

ISSN 0913-0705

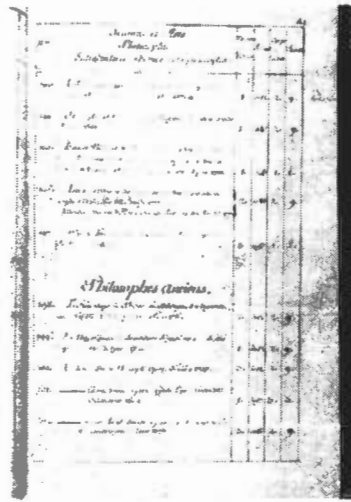
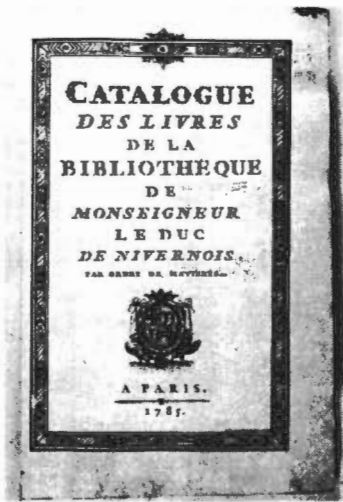
KULIC

24

1990. 11

慶應義塾大学研究・教育情報センター

18世紀個人文庫の手書き目録——ニベルネ伯爵文庫目録



CATALOGUE DES LIVRES DE LA BIBLIOTHEQUE DE MONSEIGNEUR LE DUC DE NIVERNOIS, PAR ORDRE DE MATIERES.

MSS. [1 pl] 564 p. [14 pl] fo. Paris, [1785-98]

[2 LB 217 準貴]

この4月から三田の図書館と湘南藤沢メディアセンターでオンライン目録が提供されることになった。図書館目録の長い歴史を振り返ってみると、その形態は、手書きのリストあるいは冊子目録、印刷冊子目録、カード目録（手書きと印刷ユニットカード）、そしてコンピュータ目録という転換があり、そのたびごとに技法の変遷をみている。

印刷冊子目録の出現はもちろん活字印刷技術の普及後であるが、近世・近代のすべての図書館がこの形態の目録をもっていたわけではない。とくに個人文庫の目録は、売り立て目録は別としても、その多くが手書きの冊子目録であったものと推察できる。したがってそれぞれの目録は1セットだけしかこの世に存在せず、現存しているものがあるとすれば珍品である。しかし、その意味での稀観性とは別に、目録作成技法上のその後の展開を調べるのに重要な情報を提供してくれる。筆者は、『目録の歴史』（勁草書房 1985年刊）でフランスのアドリアン・ペーレがラモニオン判事の文庫目録（現存せず）を取り上げ、件名目録法の展開のさきがけとなった主題索引の意義についてを論じているが、ここに掲げるニベルネ伯爵文庫目録も、同時代の手書き目録である。

本蔵書目録は、いわゆる4教科分類法を基盤として、歴史部門を加えた分類目録で、約2,700タイトルの書物（ほとんどが当代の印刷本）が各部門に区分され、さらに各部門主要主題に再区分されて、記述されている。さらに巻末に細区分された主題のアルファベット順索引が付けられている。また、各記述ごとに巻数、判型、書架番号、書棚番号が記入されている。それらを分析すると書架上の書物の配列は、主題と判型と書架に一定の関係が認められる。それは、中世以降よくみられた配架法であるが、義塾図書館旧分類図書のそれにもつながっている。この目録は、中世・近世目録法の基本的なスタイルを備えながらも、またペーレの技法ほど精巧ではなくとも、幾つかの点でその後の目録法展開のつながりを現実の形として示してくれる。（浜川雅俊）

KULIC 24

目 次

| | |
|--|----------------|
| 1.....情報革新による研究競争の激化と図書館の役割 | 清水 龍 登 |
| 特集 義塾における21世紀の図書館サービス(Ⅱ) | |
| 2.....情報検索の仲介者としての主題専門家 | 平 尾 行 藏 |
| 6.....21世紀・理工学情報センターの役割を考える | 宮 入 暁 子 |
| 10.....2010年の慶應義塾図書館 | 樋 口 恵 子 |
| 14.....情報と利用者の中に | 伊 藤 恭 子 |
| 18.....機械化の向こう側 | 小 沢 ゆかり |
| 23.....日吉情報センター雑感〈所長の抱負〉 | 小長谷 彌 高 |
| 25.....理工学情報センター所長就任に当たって〈新所長の抱負〉 | 山 口 喬 |
| 27.....医学という主題に出会って〈スタッフルーム〉 | 近 藤 真理子 |
| 28.....慶應義塾図書館トータルネットワークシステム | 関 秀 行 |
| 32.....江戸時代のウォーターフロント〈ティールーム〉 | 河 合 正 朝 |
| 海 外 か ら | |
| 33.....Differences between Japanese and American Academic Libraries (日米大学図書館比較) | Mary F. Grosch |
| 37.....同じ大学図書館, 違う大学図書館: UCLA と三田図書館 | 松 本 和 子 |
| 40.....数理学科図書室について〈スタッフルーム〉 | 石 上 貴 子 |
| KULIC のノウハウ | |
| 41.....明治期資料のマイクロ化について | 加 藤 紉 子 |
| 44.....医学情報センターの将来計画 ——将来計画委員会報告をもとに—— | 天 野 善 雄 |
| 48.....徒然に想う事〈ティールーム〉 | 山 本 慧 |
| 〈展示会から〉 | |
| 49.....「資料にみる日本の食文化と食養史」展にあたって | 山 下 光 雄 |
| 52.....広重東海道五十三次錦絵を読む | 白 石 克 |
| 〈資 料〉 | |
| 59.....研究・教育情報センターに関する書誌 | |
| 59.....スタッフによる論文発表・研究発表 | |
| 63.....年次統計要覧〈平成元年度〉 | |
| 表紙裏.....18世紀個人文庫の手書き日録——ニベルネ伯爵文庫日録 | 渋 川 雅 俊 |
| 68.....編集後記 | 〈表紙〉 孫福 弘 |
| | 〈カット〉 大橋史子 |

巻頭言

情報革新による研究競争の激化と図書館の役割

清水龍瑩

(研究・教育情報センター所長)

現在OCRによる印刷物の自動読み取り率は、英文、和文とも99%以上になったという。自然科学系論文のコンピュータによる自動翻訳も既に実用段階に入っているという。社会科学系論文の自動翻訳される日も近いであろう。

従来、学問研究、特に社会科学の研究では論文の検索に多くの時間がさかれていた。最近の世界各国における学問研究水準の急速な向上によって、発表される論文の数は急増し、その中から関連する論文を探すことは並大抵なことではなくなってきた。そのため各国の研究者は、比較的入手しやすい、少数の、定評のある学術雑誌から、必要な論文を探し、それを研究のベースにせざるをえなくなっている。

また一方、研究者の評価は、その研究論文が他の研究者の論文のなかにどれだけ多く引用されたか、あるいは参照されたかの頻度によって行われている。そこでいきおい多くの研究者の目にふれ、引用される確率の高い有名学術雑誌への寄稿希望がふえる。そのことは当然それら有名学術雑誌のレフリーと称せられるゲートキーパーの発言権を増大させることになる。彼等の気に入らない論文は受け入れられなくなり、彼等の気に入る論文だけが世界に流布する。学会でときどき、理解に苦しむような学説が急に流行するのはこのせいである。

しかし最近の情報革新によって、世界中の論文がOCRで読み取られ、自動翻訳機で自国語化され、CD-ROMにおさめられ、またその内容が人工衛星を通じて世界中に拡がり、コンピュータによってリアルタイムで検索されるようになったら、従来の有名学術雑誌という壁はなくなってし

まう。いままでレフリーの目にふれなかった世界中の多くの無名の優れた論文が一瞬にして検索され、比較され、引用されるようになる。これはいままでの権威を失脚させてしまう。ベルリンの壁が崩壊したのも、東欧が突然民主化したのも、情報によって権威が失脚したからである。近い将来、古い権威にまもられた象牙の塔は崩れ、激しい研究競争が世界的規模で展開されるのではないかと思われる。

慶應義塾の研究・教育情報センターは、この研究競争の激化をみすえて、世界中で検索され利用される、優れた論文のCD-ROM化を自らすすめ、それを世界の図書館に拡げていくことをいま考えている。新しい情報発信センターになることを考えている。これは従来の受信機能を重視した情報センターではない。これはまた、単に、CD-ROM化によって書架はふえない、検索用の端末機がふえる、あるいは研究室や自宅からの直接的アプローチができる、というような、図書館機能の物理的な変化を考えているのではない。世界の情報革新を先取りして、新しい研究競争に勝ちぬき、世界における慶應義塾の研究・教育上の地位の向上を日ざす将来戦略の一つと考えている。

この情報革新の最先端を担おうと誓い合った、理工学情報センター所長、白井恒雄教授の突然の逝去は悔んでも悔みきれものではない。慶應義塾研究・教育情報センターの全スタッフとともに先生の御冥福を心からお祈りすると同時に、先生の御余慶が先生の最も愛された御奥様、お子様方、御遺族の方々に長く及びますことを心からお祈りする次第である。

特集 義塾における21世紀の図書館サービス〈Ⅱ〉

情報検索の仲介者としての主題専門家

平尾行蔵

(三田情報センター整理課長)

I. はじめに

20年後に義塾の図書館はどのようなサービスを展開しているであろうか。どのようなサービスを展開すべきであると考え、どのような準備を経てそれを実現しているであろうか。

あるいはもう少し近い未来のこととして、21世紀を迎える十年後にはどのようなサービスを行っているだろうか。

筆者が想定しうる射程は、筆者自身がまだ存命中である蓋然性の高い時点の21世紀——2001年～2011年——程度に過ぎないのをはじめに申し上げておきたい。

II. 2001年

2001年の塾図書館は、1989年度から具体的に開発に着手した5キャンパス・ネットワークシステムを既に8年前に完成しかなりの実績を積んでいる。

これは、元来図書館機能を総合的に管理運営するシステムとして開発されたが、21世紀を機に装いを新たにし、機能的に従前の情報センター（図書館）・メディアセンター・計算センターを統合した新しい組織がついに先頃公表した全塾総合情報ネットワークシステムの中に組み込まれてその重要な一翼を担うこととなった。

この全塾総合情報ネットワークシステムに組み込まれた図書館機能は以下に見るようにサービスメニューの豊富さを誇っている。ここでは検索対象となる情報源の種類多様性という観点からみ

てみたい。

1. 書誌データベース

塾の構成員であれば誰でもあるいは塾外の利用者の場合には一定の制限の下に、塾が所蔵する図書・雑誌に対し図書館内からはもちろんのこと館外からも検索が可能である。塾140年の長い歴史が蓄積してきた図書館資料のうち最近半世紀ほどの資料については直接図書館に出向くことなく居ながらにして端末からの検索が可能である。湘南藤沢のすべての所蔵資料、四谷・矢上・日吉の所蔵資料のほぼすべて、三田のここ40年間に収集された資料がコンピュータ管理されている。（三田の資料をコンピュータ管理するための遡及入力事業は1989年から開始されたが、その第一期分が完了したのは5年前のことであった。紙に書かれた記録を機械可読形に変える作業は、多かれ少なかれ再整理を意味するので、最初に整理した際に要した程ではないにしても、膨大な労働力と費用と時間を要することは容易に想像されるであろう。そして漢籍、和装本や中国語、朝鮮語、非ローマ字言語で書かれた図書等の書誌記録の機械可読化は第一期分には含まれておらず、未だ作業の過程にある。）

2. 二次情報データベース

図書・雑誌という単位（出版物）ではなく、それらに収録された論文単位（著作物）の検索はそれまで多くを索引誌等にかけていたが二次情報データベースの多様化とそれらを一元的に管理するシステムの実現により、コンピュータ利用の割合が飛躍的に増大した。つい最近まで、繁忙を極める大規模大学図書館で二次情報データベースが図書館自身によって作成されることは絶えてなくなっていたが、情報専門職としての主題専門家「もどき」を置いてゆとりある図書館運営の時代に入った塾図書館では、少しづつではあるが自館作成の書誌を機械可読形態で図書館システムに取り込

むようになってきた。しかしまだ今のところ大部分が外部の機関により作成されたものである。問題は、それをいかに手際よくシステムに取り込んでサービスに乗せるかであるが、我々のシステムは周辺技術の進歩をうまく取り入れ、出版物単位の検索と著作単位の検索を極めて簡単な操作により切り換えることができるようになってきている。

3. 電子出版物

図書・雑誌という紙に記録された伝統的な出版物以外に電子メディアを利用した出版物が実用化されて10年以上が経過した。これらの電子出版物に図書館システムを使ってアクセスできるので、資料についての情報ではなく資料そのものがワークステーションさえあれば居ながらにして入手できる。もちろん電子出版はすべての資料に及んでいるわけではなく、伝統的な出版物に取って代わるものではないので、ワークステーションから入手できる資料には限りがある。しかし特定の分野にとっては有効な出版形態である。二次情報データベースと並んで電子出版物も情報源として重要性を増しているのである。

4. 海外書誌データベース

塾のシステムは、必要とあらば、塾内にとどまらず日本の他の大学図書館ともあるいは専門図書館等の館種を異にする他の図書館（群）ともつなげて、必要な資料の調達のために威力を発揮することができるようになってきている。また日本の大学図書館所蔵資料総合目録データベースのセンターである学術情報センターを経由して諸外国とも接続して北アメリカ、ヨーロッパ、アジアの図書館資料の書誌記録を見ることができる。

このような情報源の多様化とそれへの一元的アクセスは、最近の技術開発に多くを負っている。CD-ROM等の光ディスクの図書館システムへの取り込み、総合デジタル通信網の整備、種々の通信網の自動接続、人工知能・エキスパートシステムの実用化、ゲートウェイシステムの機能の向上等々。

また国内・海外の書誌ユーティリティ間相互乗り入れのために法的制度的問題の解決があった。

情報の社会における存在形態の変化により、情報サービス機関も多様化した。もはや図書館だけが情報提供機関であった時代は過ぎ去った。塾図書館は、外部記憶装置としてのあるいは単に施設としての図書館から脱皮を図った結果、上に述べたような情報基地として生まれ変わったのである。

ここで目が覚めた。

目が覚めて考えたのは、このような情報システムを使いこなせる利用者とは一体どのような人間なのだろうか、図書館員はこのような進歩の後にも存在しているのだろうかということであった。

III. 1990年

従来図書館サービスは物、器、人によって成り立つといわれてきた。所蔵資料、それを収蔵する建物、図書館員である。同時的・通時的な情報を建物に蓄え、利用者の自由な利用に依ってきた。図書館のこのような社会的役割は今後も基本的には変わらない。しかし既に述べたように、物と器——収蔵資料と建物——の内実は徐々に変化しつつある。では人の方はどうか。

情報専門職としての図書館員は、今後次の三つの類型に分化していくといわれている。

- ① 情報システムの企画運営を担当する管理者
- ② 情報システムを研究し設計し運用する技術者
- ③ 主題知識をもち情報システムと利用者を仲介する専門員

ここでの関心はこのうち第三番目の類型にある。

1. 情報検索の仲介者

多様化した情報源の種類と内容を予め了解せずに、望むような検索結果を得ることはむづかしい。人工知能・エキスパートシステムの導入、その機能の向上によりどのような利用者志向のシステムができるかにもかかっているが、利用者が求める情報に的確にアクセスするにはそれなりの知識と技術を要する。そこに仲介者としての情報専

門職の成立する契機がある。

主題に通暁し、情報処理システムに明るく、データベースの種類内容と検索方法に詳しい仲介者、これが情報専門職員の持つべき資質のひとつである。

情報とそれを求める人とを仲介する機能は図書館員の専売特許ではない。既に検索代行業——サーチャー——が、図書館の外に職業として成立しようとしている。資料と情報のなかには図書館員の介在なしに得られるものが発生していることの端的な現われである。しかしすべての求める情報に対して、図書館員の介在なしに、利用者自身であるいは代行者を使って（有料で）アクセスできるわけではない。利用者自身によりかなり高度なオンライン検索が行われるように検索方法について利用者教育を行うこと、利用者が検索上で出会った問題について相談に応じる利用者援助を行うこと、そしてもちろん検索を代行して行うこと、場合によってオンライン検索が必要なればマニュアル検索を勧めること、参考質問に答えるために情報検索を行うこと、これが情報専門職の果たすべき課題である。

図書館員を情報検索の仲介者とするための教育・研修はどのようなものであろうか。

この点では私達は恵まれた環境にある。図書館・情報学科を有しているということであり、これとの共同作業により大きな成果が得られるだろう。私達は既に何年にもわたり相当数の職員を修二課程に派遣してきたという実績を持っている。今後は派遣の趣旨を情報検索仲介者の養成という点に絞ればよいのである。

2. 主題専門家

情報検索の仲介者と並んでいま一つの側面である主題専門家を育成するための教育・研修もなされねばならない。多くの人により指摘され必要性が論じられてきたが、いまだに我が国においては社会的制度としてこれは実現されていない。

従来我が国において参考業務とかレファレンスワークといった言葉で表現される機能を担う図書

館員は、図書館学ないし書誌学の専門家であり、書誌を駆使して参考業務を果たしてきた。彼または彼女の専門は図書館学ないし書誌学であって、何らかの研究分野、主題の専門家ではないのが通例であった。求める資料・情報に至る方法の専門家ではあっても、求める情報が属する主題の専門家ではなかった。そこには、いわば方法の洗練はあったが内実の獲得はなかった。

社会における専門家敵視の一般的風潮、それと裏腹の関係にある雇用体制、そして養成制度、この三位一体が、たとえば図書館員の主題専門家としての自立を妨げてきた。

現在既に在職中の者の中には主題専門家はいない。養成過程の面からも、雇用体制の面からもそのような地位は存在しない。従って主題専門家が定着するに至るまでの間は（そもそもそういう時代は我が国に到来するであろうか？）、過渡的措置として在職中の者を主題専門家もどきに育てるという観点から現職教育・研修制度を見直すのが近道であろう。

3. 主題専門家もどき

テクニカルサービス部門の仕事のなかに、主題専門家もどきを育てる契機を見つかることができるだろう。

目録作業のなかでいくらか知的と呼べるのは、目録対象資料の内容を把握し、把握した内容をなんらかの主題を表わす言葉または記号で置き換えるという作業——件名または分類の付与いわゆる主題目録作業——である。

この作業の必要性は徐々に薄弱になりつつあるという意見もある。末端の図書館では——塾図書館もそれに当たる——日本とアメリカの全国書誌作成機関の作業結果を流用するようになっていくからである。とはいうものの、専門図書館は勿論のこと大学図書館でも、蔵書構成の特性からくる個々の図書館特有の事情をその作業結果に加味しないで済ませることはできない。個々の図書館固有の事情を標準分類表に盛り込んだいわゆる分類コードに従い、日々の作業を通じて一貫性を維持

すること、このために目録担当者がいるとって過言ではない。

私達も、和書については国立国会図書館の付与した日本十進分類法による分類番号をそのような流れのなかで流用している。しかし洋書についてはその前段階の作業として、米国議会図書館の付与した分類作業の結果を日本十進分類法の番号に変換しなければならない。この自動変換テーブルが用意されれば、最も時間と労力を要する作業が大幅に軽減される（過去に自動変換テーブルが商品化されたことはあるが、完成度が高くなかったため普及しなかった）。その作成のためには百以上に及ぶ学問分野の専門家と図書館学の専門家の共同作業が必要となる。膨大な作業である。そして分野によっては簡単に変換できる分野もあろうが、多くの分野にとってそれは容易でないだろう。学問の存在態様、分類表そのものの精度等は、それぞれの社会の文化を反映したものである。（自動変換テーブルが日本の一部の図書館員の見果てぬ夢に終らないことを願う。）

書架の配列に標準分類表を使用する限り、そしてそのことより重大な意味をもつと思われるが、機械検索において、主題を表わす言葉（件名等の統制語、書名等に現われる自然語）と記号（分類番号）の組み合わせの有効性を重視するならば、目録担当者の主題目録作業という営為は今後も欠くことができない。

先に描いた10年後の図書館では、出版物単位の日録作業は遅滞なく楽々とこなされることになっている。しかしそれは本当に実現されるだろうか。

主題専門家ないし主題専門家もどきの現職教育による養成、それがこの隘路をも救う途である。テクニカルサービス部門の仕事のなかに、主題専門家もどきを育てる契機を見つけることができるというのは次のような趣旨である。

たとえば目録業務の主題目録作業を独立させ、緩やかな分担性を導入する。担当した分野に資料の分析を通じて親しみ、当該分野の出版の概要と

書誌に詳しくなる。何らかの主題に通暁すると、異動先で、例えば、個性ある今後の図書館活動にとって欠くことのできない、主体性をもった蔵書構築に貢献することができる、あるいは高度なブリオグラフィック・インストラクションを担当することができる。また、担当しなかった他の分野に対する視点に変化が生まれるので、他の目録担当者との相互理解を容易にし、組織としての総合的な力が向上する。——もちろん主たる目的は、担当した分野の主題目録作業の効率化、端的に言えば迅速化であるが……。——このためには相当数の中堅職員を一定期間目録担当者として置くという人事政策が前提となる。繁忙に過ぎることも避けねばならない。そして、たとえば最低3年間は異動の対象としないで、その後は積極的に部署を変え、これを何年かの周期をもって反覆する。これは組織の活性化にも貢献するだろう。

そして雇用方針を今から改める。図書館・情報学以外の専攻者にも門戸を解放する。情報専門職の確立とともに図書館員に人事面で一定の位置付けを与える。ゆとりある組織づくりを目指すといったことが考えられねばならない。

今後の図書館サービスに対処するための、現職教育による過渡期の人材養成の一例を述べた。この種の試みはテクニカルサービス部門に限らずパブリックサービス部門でも可能であろう。

現在の情報センターの業務を将来の夢との関連性においてとらえ直して再編成し、夢の実現につなげるというこの考えにはもとより新味はない。しかし、明日からでも容易に始められる最初の一步ではある。

参考文献

- 丸山昭二郎 ニューテクノロジーと情報専門職 現代の図書館 26(3):126-130, 1988/9
 森智彦 オンライン検索と図書館員の役割 専門図書館 102:49-59, 1984

21世紀・理工学情報センターの 役割を考える

宮 入 暁 子

(理工学情報センター
情報サービス担当課長代理)

I. はじめに

21世紀への架け橋となる90年代が始まった。

人間の五感に近づくコンピュータ。空想科学小説「2001年宇宙の旅」では人間と対話し、考えるコンピュータ「ハル」が活躍していたが、当時はSFの世界のこととみられていた。しかし、それがあながち夢ではなくなってきたとの期待を抱かせるほど最近の技術進歩は目ざましい。果たして、人間の感性が理解できるコンピュータは本当に実現するのだろうか。2001年まであと10年、そして未来へと夢は大きく膨らんできた。

21世紀・高度情報化社会は確実に理工学情報センターの情報環境を変える。「利用者像」「多様化する情報源」「情報専門職としての図書館員」をキーワードに、理工学情報センターが情報源と利用者を結ぶ有効なインタフェースの役割を果たすためには、何をすべきかを考える。

II. 利用者像

1. 多様化する主題領域

科学技術の急速な進展に対応するため、理工学系学部・大学院の研究活力向上を目指して、“変身”中の大学が増えている。そのことは、大学に付属する科学技術専門図書館としての理工学情報センターにとって無縁のことではない。

1989年理工学部は、1939年藤原工業大学開校より50年を迎えたのを機に、先進の科学・技術の時代に対応し、理工学の研究・教育態勢を整え、整備すべく50周年記念事業を行った。

1989年4月より理工学研究科に計算機科学専攻・物質科学専攻・生体医工学専攻がスタートし

機械工学・電気工学・応用化学・計測工学などの、学問背景が異なっても同じ専攻分野を目指している研究者・学生を、大型機器類を整備した施設の総合科学研究センターに結集、統合し、これによって異質の思考・知識・手法が相互に強く影響し合うような研究態勢が取られた。

これにより理工学部にインパクトを与え、独創的な研究・教育が開かれることを期待してのことである。開学時3学科よりスタートした工学部は1981年理工学部への改組を経て、現在8学科11専攻へと成長した。

理工学情報センターは、その時代時代のニーズに対応しながら蔵書を構築し、医学分野等との関連を深めながらサービスを展開してきた。

21世紀の理工学部は、独創的研究・教育の成果をふまえ、新分野が開発されさらに知識の細分化傾向により学際的アプローチを必要とする。科学と社会の調和を求めて、広い視野の中で様々な角度から問題を理解することが要求される時代にもなってくる。理工学情報センターは、学術情報ネットワーク整備の中、科学技術の専門図書館としての特性を十分に生かした蔵書構築をする。それを有効的なものにするためには、情報源の電子メディア化により利用者が直接的に情報源へのアクセスが容易になる状況、それによって生ずる利用者の新たなニーズ、そして蔵書構成するメディア自身の変化を十分に考慮しなければならない。

2. 変化する利用環境

18歳人口が1992年205万人をピークとして2005年には140万人まで減少する。彼らの時代は、初等教育時から、それこそ黒板と同じようにコンピュータが教室に入り、先生が使う主要な教具として活用されることになるであろう。そしてハイパーメディアで教室が変わってくる。化学実験もシミュレーションで、本物そっくりに。

そして彼らは、大学入学時にパーソナルコンピュータを与えられ、それで文章を作成、キャンパス情報ネットワーク(学内LAN)を通して、勉強の内容を教授陣に伝送すること、日程、宿題、

指導内容や情報センターの利用案内等やOPAC (Online Public Access Catalog) へのアクセスが可能になるであろう。電気工学科安西祐一郎教授が指摘するように“理工学部においても、各学科、研究室単位に30本以上のネットワークが構築され、ゲートウェイを介して基幹ネットワークに接続されている。1984年に5台の計算機をつなぐことから始まったネットワークが、今や300台におよぶさまざまなワークステーションを接続した環境となり、電子メールはもとより、ネットワークニュース、リモートログイン、ファイル転送がキャンパス内、国内、海外を意識することなく研究室から行えるようになった。また国内だけでなく海外にもある、不特定多数の利用者に開放されたパブリックメインソフトウェアやフリーソフトウェアを、ネットワークのファイル転送を用いて瞬時に持ってくるができるようになってきている。そのためこれらのソフトウェアは以前に比べ格段に簡単に使えるようになった。技術的にはすでに、すべての研究者、学生がコンピュータネットワークの恩恵を受けつつお互いに、コミュニケーションできる時代が到来していると言える”。¹⁾ さらにこれが発展した形の、理工学情報センターも参加した研究基盤高度化の要請に対応したネットワークの構築が考えられる。

理工学情報センターでは、1988年より図書の貸出・返却システムが機械化され、そして現在全塾情報センターのトータルシステム (FLANSYS: 仮称) も目前にせまりつつある。従来より理工学情報センターはレファレンスサービス、オンライン情報検索サービス等を通じ、利用者に散在する情報源を活用する手段を提供してきた。それは、利用者が理工学情報センターへ出向いて受けるサービスが大部分であった。

利用者は何を求めて、理工学情報センターに来ているのであろうか。その一つのパターンとして「関連ある論文に引用されている文献の追跡」がある。研究者は、理論を創造し、推論を引き出し、実験を計画し、データを得て、それを分析

し、理論を試し、論文を書き、講演をする。そして研究を開始する前と研究をまとめて発表する前は、関連する広い分野の学術情報に十分アクセスする。それは、理工学部の場合、卒業論文、学位論文作成時と同じである。「自分のアイデアが、まだ他人の論文に先んじられていない」という保証を得るため、「こんな面で他人が困っているのか」「自分ならそれを解決できるのではないか」「自分の抱えている問題を別の面からみるとどうなるのか」と自分を刺激する、次に学術情報は、自分の研究を他人に対し説得する力をつけるのに不可欠である。「自分の研究は、在来の類似の研究とこのように違い、新規性がある」「自分の取り上げたのは、このような重要な未解決問題である」という説得力は、先行関連研究の十分な引用からしか行えない。²⁾ このパターンは将来においても変わらないであろう。変わるのは、その情報源へのアクセスの方法である。

ネットワークの構築は、利用者を直接的又は間接的 (理工学情報センターを通して) に電子メディア化された情報源と結ぶ。利用者は、自分の端末から所在情報やフルテキストデータベースへのアクセスが可能になる。そこには、課金の問題、不慣れから生ずる障害等様々な問題が起こる。

将来、利用者は二極化するだろう。主題知識も富んでかつ情報源へのアクセスが的確に行えるグループと主題知識不足又は情報源へのアクセス知識不足のグループ。理工学情報センターは、各々のグループに対しプログラムを用意し、適切なサービスを展開するだろう。利用者教育の重視は、理工学情報センターが利用者と情報源を結ぶインタフェースになるためのポイントの一つである。

また、カード目録が端末に変わり、一変するであろう館内において変わらぬものは、ブラウジングする機能、思索をねりたい場、AVを楽しんだりする機能等であり、施設は目的別にもっと快適な環境改善がなされているだろう。

学内の利用者に対するサービスの他、理工学情報センターには、一つの特徴がある。それは、学

外の理工学研究者・機関に対し、利用可能な部分があれば学内に支障のない限り、その部分は積極的に公開して利用に供しようという、藤山工業図書館の伝統を受け継いだものである。これは、将来においても重要である。

理工学系大学・大学院の“変身”の一つに、研究活動を活性化させる方式として基礎研究志向を強めている産業界との連携強化がある。

神奈川は就業人口に占める科学者、技術者の比率が全国一、研究所の数は東京に次いで二位、従業員一人当たりの付加価値額は全国一という基盤をもつ地にある。生涯学習の面からも、将来、科学者、技術者は一般教養を住民の側にぐんと顔を向け地域に根付くであろう公共図書館に求め、科学技術の専門知識を科学技術専門図書館に求めるといふ図式が定着するであろう。

Ⅲ. 多様化する情報源

1. 電子メディア化の進行

雑誌がその蔵書に大きなウェイトを占める理工学情報センターでは、現在和雑誌1095タイトル、洋雑誌1514タイトルを継続受入している。99%が紙による印刷物である。21世紀、この比率が下がるのは明らかである。即ち、電子雑誌等の電子メディアに取って代わられる可能性がある。

それは、科学技術系雑誌が、専門領域の細分化により雑誌の数の多さを生み、そのため文献の分散をまねき、自分の関係のある領域が雑誌の一部分にしかすぎなくても、その雑誌全体を購読する必要を生ずる問題に起因している。³⁾

一論文を単位とする出版は、すでに数学・物理学の分野におけるプレプリントの広範な利用、特にデータの重要性の高い分野におけるシノプシス誌の発行の例をみても、電子雑誌はまずニュースレター誌等の迅速な出版が求められる分野において、有効なメディアとなるだろう。

フルテキストデータベースの発展は、利用者の一次文献へのアクセスが容易になる。STNインターナショナルには、アメリカ化学会の刊行する

雑誌23タイトルの論文のフルテキスト約9万レコードが収録されている。

電子メディアは、紙による印刷物に比べ、タイムラグが少なく、瞬時に更新が可能で強力な検索能力を持つが、携帯には向かず、汎用性に欠け、ブラウジング機能が劣る。読むというより引くためのもの、迅速に特定の事実を知るものに向いている。辞書、抄録、索引誌、新聞等。

抄録、索引誌においては、遡及検索にはCD-ROM等のオフライン型データベースを用い、最新情報の検索はオンライン型で行い、検索技術の基本の取得、ブラウジング、又古い情報を遡及検索するのに冊子体を使用するといった利用頻度も考えたメディアの使い分けも可能になってくる。

電子メディアと紙による印刷物は互いに補完しながら残るだろう。そして学術情報のハイパーメディア化で生物図鑑も鳴き声が入って生き生きと、紙の上では十分には表現できない3次元画像や動画、音声などがデータあるいは情報表現手段として利用される時代になる。

図書館員にとって、従来の利用者のニーズによる蔵書構築に加え、メディアの選択という判断力を要求される時代になる。それに、情報通信機器の互換性、規格の標準化、書庫スペースや予算の各問題が大きな要因となって加わる。

2. 資料保存の問題

理工学情報センターの蔵書数。現在、単行本72,951冊、製本雑誌131,108冊。

科学技術系雑誌の寿命は短いといわれるが、実際はどうか。理工学情報センターへの学外申し込み文献複写サービス1987年度分の調査⁴⁾によると、直接申し込み分15,078件中1900年以前が8件、1901年以降0件はわずか4年、1930年以降からすでに2桁となり、1956年以降は全て3桁となる。JICST経由(JICST寄贈の1958年から1972年までの15年間のバックナンバーに限定される)の場合、申し込み件数が18,064件で、ここ1~2年の実態は増加の傾向にある。一つ一つの雑誌に寿命があり、論文は古くても利用される。

この事実は、資料保存の問題と関係してくる。原本保存の共同保存書庫設立等、一館を越えた全塾的に、さらに“資源共有”の立場から考えるべきことである。

また、劣化する資料のメディア変換の問題、マイクロフィルム化等。それは、“内容を保存”するものとし、現在と将来の利用を保証するためのものでなくてはならない。

3. 国際的 ILL の充実を

科学技術情報の種類、発生源、流通経路が広範かつ多様であることが、グレイリテラチャー（灰色文献）を生む要因にもなる。日米科学技術協力にうたわれたことから、グレイリテラチャーが注目をあびているが、この定義は、(1) 公開文献であること、(2) 一般の流通経路にのらない文献であること、である。公共機関刊行の技術報告書、非営利団体刊行の会報、学会刊行の会議資料、学位論文等多くの種類の存在しており、それぞれが特色をもち貴重な資料である。

しかし資料の入手にマンパワーと時間が多く費やされているのが実情である。会議資料を例にとると、理工学情報センター1989年度文献取り寄せ(依頼)統計(含現物借用)によると、その11.4%が欧文の会議資料で202件、また和雑誌の場合、1983年度132件に比べ236件に増加しているが、その増加分はほとんど雑誌形態の会議資料である。そして国際会議はますます細分化している。会議資料に対する要望の高さを考慮し、そして会議発生時点からの追跡が必要であることからして、いままで以上の網羅的なアップトウデイトなデータベースの整備が、将来においてグレイリテラチャー入手を容易にする鍵となる。

今後、学術情報ネットワークの中、国内的にも国際的にもネックになっている会計処理上の問題の解決が、ILL発展の条件である。

IV. 情報専門職としての図書館員

21世紀は、コンピュータに取って代わられた人間の時代ではなく、コンピュータを使いこなす人

間の時代になるだろう。このためにも図書館員はその資質を高めることを要求される時代になる。書誌情報処理能力と学術情報処理能力のほか、各種通信情報機器の操作、そしてデータベース検索技術習熟、そして利用者のニーズを的確にとらえるために不可欠な主題知識等。

目まぐるしく変化する高度情報化社会にあって、不可欠な要素は、“継続教育”である。とくに総合大学である慶應義塾大学の図書館員にとって、主題知識取得の問題は、自己啓発または経験によるものをこえ、研究者の協力を得た教育プログラムをもって解決される必要がある。

今後、利用者にとって、検索技術の習熟度が的確な情報入手を左右する。今まで以上に重要になる利用者教育、そして図書館員と利用者との意見交換の中からより良い検索が生まれる。

V. おわりに

21世紀・理工学部は、自ら独創的科学・技術を開発しえる機関として、評価を受けるであろう。理工学情報センターは、それを支援する組織として、部門間の情報共有やコンピュータ技術者との協力のもと、科学技術専門図書館としての伝統と特性を活かし、情報源と利用者をむすぶインタフェースの役割を果たすだろう。

そして、コンピュータとネットワークがこれだけ身近になった今、不安がないわけではない。プライバシーの問題、著作権の問題そしてシステムの安全性には万全の注意が必要だ。それが21世紀の大きな課題となる。そして「ハル」の反乱は、SFの世界だけのものにしてほしい。

引用・参考文献

- 1) 安西祐一郎 “UNIXネットワークの現状” 矢上台ニュース, 77:5-6, 1989
- 2) 山本毅雄 “学術情報の特質と国際流通” 学術情報センターニュース, 9:3, 1989
- 3) 原田 勝 “未来の図書館” 松籟社, 1987
- 4) 森園 繁 “科学技術系雑誌の寿命を調べてみる” KULIC, 22:7-11, 1988

2010年の慶應義塾図書館

樋口 恵子
(三田情報センター)
資料課課長代理

11月11日(土), 2010年

(1) ある教授の場合

「今日の講義で紹介した未来予測の手法を使った実際の調査例を来週の講義までに各自調べてレポートとして、私宛に電子メールで提出して下さい。来週は学会から帰っておりますので、教室で講義を行います。それでは、また来週。」

ビデオカメラに向かって水野教授が一礼すると「ハイ、カット。先生、お疲れ様でした。」と声がかかり、ガラガラした照明が落とされて急にスタジオは暗くなった。

「11月14日の3時限の放送ですね。収録したビデオは14日以降学生に貸出用のコピーが必要でしょうか。」それまでビデオカメラを操作していた情報センタースタッフの浅野が尋ねた。

「ええ、お願いします。私が不在でビデオだけの講義だと、教室での放映の際にサボる学生も多いようですからね。よろしくお願いしますよ。」

スタジオから出ると、窓の外に爽やかな秋空がひろがっている。月曜から3日間、阿蘇山の麓で行われる国際未来学会に出席するため、明日から熊本へ出張するのだ。火曜の講義を休講にしないために、予め講義のビデオ撮影を済ませた水野教授は120階にある研究室へ戻ることにした。

創立150周年を記念して2008年に三田キャンパスに完成した超高層大学ビルは、200階建であり、研究室、各教室、塾監局をはじめとする事務部門全体、図書館機能と計算センター機能を統合した統合情報センター、各研究所などに加え、1万人収容の大ホール、大小様々な学会の開催が可能な

コンベンション・ルーム、カフェテリア、教職員・学生のための健康センター、室内グラウンド、室内プール、アスレティック・ジムなど様々なスポーツ施設、海外からの訪問研究者・留学生のための宿泊施設、さらには廃棄物の処理施設、太陽エネルギーを利用した空調冷暖房設備、上下水道処理施設等を完備した総合的な大学の施設ビルである。またこの大学ビルの一部は多様な情報処理機能をもったオフィスビルとして企業に賃貸され、特に大学の研究者と共同研究を行う企業の研究室として利用されている。ショッピング街には郵便局、銀行、生協もあり、このビルだけで一つの町を形成しているといっても過言ではない。三田キャンパスは大学・中等部・女子高・綱町グラウンドを含めて総合的に再開発され、中等部・女子高は別に建設された40階建の学校ビルに収容され、重要文化財の演説館、慶應義塾図書館のみが歴史的な建造物として残された。そしてキャンパスの残りのスペースは緑のひろがる公園として市民に開放されている。

ビル内には貨物用モノレールによるデリバリーネットワークと大勢の人間を一度に運搬する高速エレベーター、さらに個人用のリニアモーターカーネットワークが縦横にはりめぐらされている。

水野教授が、走ってきたリニアモーターカーの一つに乗り込み、コンピュータのナビゲータにICカードを差し込むと、リニアモーターカーは滑らかに研究室まで自動運転で到達した。

研究室のワークステーションに向かうと、コンピュータの秘書エリザが、留守中にいくつか電子メールが入っていることを知らせてくれた。一つはスタンフォードのボブからであり、今夜の超音速ジェットでサンフランシスコから福岡に向かうので明日の夕方阿蘇で学会の始まる前に会えないかというものであった。他の電子メールは統合情報センターからであり、今月の図書委員会の開催通知と自分の研究テーマに関する最新情報リストが電子メールで送られてきていた。

ボブのメールに返事を書く前に、来週の講義が

ビデオ講義であり教室が変更となること、その講義でレポートの課題が出されること、ビデオ講義に出席出来ない場合は情報センターから後日ビデオを借りる、または送信してもらうことができることなどを受講生全員に対する電子メールとして発信することにした。

1995年に、従来の図書館機能を中心とする情報センターとコンピュータを中心とする計算センターが統合され、義塾の研究教育に大きな変化が起こった。統合情報センターでは、従来の図書館機能、計算センター機能に加えて、マルチメディアを利用した教材・プレゼンテーション資料の作成、衛星通信を利用した放送授業の実施といった実際の研究教育を直接的に支援する機能を強化したため、教員の不在時のビデオ講義、通信教育課程の衛星通信を利用した放送講義などが当たり前のこととして行われるようになったのである。

受講生宛のメッセージを発信したあとで水野教授は、ボブに由布院のホテルで明日5時に会おうと返事を書いた。サンフランシスコを発つ前にメールが届かなくても、阿蘇までの移動中に公共の情報コンセントを利用して電子メールを受け取ることができるだろうと水野教授は思ったのだ。情報センターへは最新情報リストにある文献の内、2点を全文電子メールで送るように依頼の電子メールを発信した。

New SDI (Selective Dissemination of Information: 選択的情報提供) サービスと呼ばれるこのサービスは利用者の希望する頻度で、水野教授の場合は週1回だが、登録した研究テーマに関してどんな最新情報があるか、また提供される各情報の重要度について評価が行われ、重要度と自己の研究との関連性における必要度のランクも表示したリストが配布されるのである。もちろん最初は、登録した研究テーマに関係ない情報が入っていたり、大切な情報が漏れていたりとすることがあったが、何回かやりとりする内に人工知能を応用したシステムによる自動検索によって、かなり適切な範囲で研究テーマに関する最新情報が送られ

てくるようになってきた。教員の中には情報は自らの手で探さなければ意味がないとしてこうしたサービスを利用しない人もいるらしいが、自分にとっては統合情報センターがこうしたサービスを行っていることはメリットがあると水野教授は思っている。

統合情報センターは大学ビルの50階から100階を占めていて、図書館機能、計算センター機能、教材・メディア作成機能を果たすようになっている。統合情報センターにはコンピュータ施設、マルチメディア情報処理施設、放送設備、そして200万冊の開架閲覧室と500万冊収容可能な自動化された保存書庫、保存のためのメディア変換施設やぼろぼろになった資料の特別な保存室などがある。1990年代には200万冊台であった所蔵資料も現在では400万冊近い。余裕のある書庫部分は相互協力協定を結んでいる図書館の資料の共同保存書庫として活用されている。

統合情報センター内の図書館施設は新しく居心地の良いものとなっていて、学生の利用は活発だが、水野教授自身は最近直接情報センター、特に図書館機能を果たす閲覧室や書庫に出掛けることが少なくなってしまった。図書館へ行かなくても24時間キャンパスの通信ネットワーク上で公開されているOPAC (Online Public Access Catalog) に研究室からアクセスして、必要な図書はロボットによるデリバリーサービスを利用して研究室へ配達してもらえ、全文がデータベース化されている雑誌論文にいたっては、通信回線を利用して研究室のワークステーションに必要な論文をダウンロードすることが可能であり、いちいち図書館へ出向いて掲載されている雑誌を探して自分でコピーをするといったことは必要なくなってしまった。研究プロフィールに研究テーマを登録してあるので、最新情報は自動的に知らせてもらえるし、探したい資料が図書館のデータベースでうまく見つからないときはレファレンス・ライブラリアンやサブジェクト・スペシャリストに電子メールまたはテレビ電話で問い合わせることができ

る。慶應義塾に所蔵の無い情報については外部のデータベースへの接続がキャンパスネットワークからゲートウェイサービスを利用して簡単に自由にアクセスして調査することが出来る。他キャンパスの情報センターや、他大学の図書館等に所蔵のある情報は相互協力システムを利用して無料で、宅配サービスまたは電子デリバリーサービスを受けることが出来る。

統合情報センターの前身の研究・教育情報センター時代から、徐々に進められてきた図書館サービスの改革によって、いまでは20世紀に従来の図書館で行われていたほとんどの機能が直接図書館へ行かなくても研究室や自宅から情報センターシステムにアクセスすることによって利用可能となっている。そのため水野教授の場合、研究室と同じビルの中に新しい図書館が出来たにもかかわらず、たまに図書の背を眺めたり、図書委員会に出席したり、写本を調べるために図書館内で仕事をしている同僚を探しに行くために図書館へ足を向ける以外、直接図書館を利用することも次第に少なくなってしまう。図書館施設が新しくなってしまったため、資料の配置場所が全く変わってしまったため自分にとっては探しにくくなったことも図書館へ行かなくなった理由の一つだと水野教授は思うことがある。しかし直接行かなくなったとはいえ、ロボットによるデリバリー・システムを利用したり、パブリック・ドメインのソフトウェアライブラリーや統計情報データベースなど情報センターの独自のデータベースサービスを活用したりして、直接図書館を利用していた時よりも現在のほうが、はるかに情報センターの提供サービスを利用しているというのが水野教授の実感である。11月20日の図書委員会にはぜひ出席して New SDI サービスについて不満な点の改善を申し入れなければならない。これだけ図書館と情報センターのシステムと組織が変化したにもかかわらず、学部予算の図書や雑誌、機械可読資料、AV資料など情報センターの資料の選定とサービスに関する委員会の名称が図書委員会のままなのは不思議なこ

とだと思いながら、水野教授は図書委員会への出席の電子メールを送信した。

(2) ある学生の場合

鳥居圭介が目を覚ますと10時を過ぎていた。ゼミの三田祭発表の準備で10時30分に銀杏の樹の下に集まることになっているのに、このままでは遅刻してしまう。手元のノート型コンピュータを通信回線につなぎ、大学の電子掲示板を呼び出すことにした。電子掲示板は、コンピュータでアクセスしてきた学生がメッセージを書き込んだり読み取ることができるばかりではなく、キャンパスを指定してキャンパス内のお知らせ用掲示板に電子サインとして自動的に表示させることができるため、室外で友人を待っている学生達がコンピュータで電子掲示板にいちいちアクセスしなくてもメッセージを受け取ることができるのである。

キャンパスネットワークにログイン（接続）すると、水野教授の火曜の講義がビデオ講義に変更になるという電子メールが届いていた。三田祭前にゼミ活動以外にレポートを出さなくてはならないなんてついていない。でも火曜の講義はアルバイトのために出席できないと思っていたので、ビデオ収録があるのはラッキーだ。早速情報センターの予約システムを呼び出し、自分の留守中にビデオ情報を送信してもらい、留守録をするよう自動登録を行っておくことにした。ついでにレポート用に図書館システムを呼び出し、未来予測の手法について知的検索システムを利用して予備検索を行い、結果をダウンロードした。ビデオの水野教授の講義を聞いたあとでこの予備検索ファイルをチェックし、必要な文献を情報センターから送ってもらうことにしよう。情報センターシステムとそれに含まれる各種のデータベースサービスの内容と検索方法は、1年の時に個別に行われるコンピュータ・オリエンテッド・ビブリオグラフィック・インストラクションによって徹底的に修得させられている。自分の検索技術には自信があるが水野教授の講義には欠席がちなので、今一つ

検索のための内容分析に自信がない。こうした時は知的検索システムと対話しながら検索した方がヒントが得られるし、誤った検索が避けられる。

ダウンロードした結果の一部を表示しようとした時ノート型コンピュータが突然、アラームをならした。驚いた圭介は、時刻表示をみて時間がすでに10時30分になっているのに気づき、慌てて友人宛の電子メールを送信し、急いでアパートを飛び出した。

(3) ある大学院生の場合

新製品に関する広告代理店との何時果てるともしれない長時間の会議を終え、会社を後にした石井理絵は、足早に三田のキャンパスに向かった。理絵は、フルタイムの仕事を持ちながら、商学研究科の修士課程に通う社会人大学院生である。

通常の勉学と研究は、直接講義に出席する以外に、コンピュータ通信を利用した教員による個別指導やビデオ収録の講義を見ることなどによって補足され、仕事をもたないフルタイムの大学院生に比べて遜色ない活動ができる。また、自宅からアクセスできる情報センターシステムのおかげで研究に必要な情報は大学まで出掛けなくても手に入れることができるが、同じ社会人大学院生仲間の友人とディスカッションしたり、共同で勉強会をする為には、大学まで行かなければならない。

幸いなことに2年前に超高層大学ビルが完成してから、夜間の大学の利用は飛躍的に便利になった。ICカードを利用したセキュリティ・システムのおかげで、24時間大学ビルへの入構も、統合情報センターのコンピュータ施設や図書館施設の利用も、予約の電子メールを入れておけば、ディスカッション用のセミナー・ルームの利用も可能だからである。統合情報センター内には24時間施設を使う学生・教職員のために居心地のよい仮眠室も設置されている。49階のカフェテリアは、24時間営業で夜中でも軽い食事をとることが出来る。夜間に研究を進めようという研究者のためのバックアップ・サービスが様々に展開されてい

る。

今夜はタイの中小企業に関する共同研究会があり、理絵は統合情報センター内のセミナールームに急いだ。この研究会には商学研究科の仲間の他に、統合情報センターのスタッフである吉田由佳里が加わっている。これは統合情報センターの研究者に対するコンサルティング・サービスとして実施されているものだが、共同研究などのグループに対し統合情報センターのサブジェクト・スペシャリストを派遣し、研究に必要な情報の入手を助けたり、主題分野の特性によって入手した情報の分析を援助したりするためのものである。吉田由佳里は、東南アジアの多国籍企業論で博士学位をもち、図書館・情報学とコンピュータ・サイエンスで修士号をもつサブジェクト・スペシャリストである。フレックス・タイムで働くこうした主題知識の豊富なスタッフによって、24時間コンサルティング・サービスが受けられる大学は他にはあまりなく慶應の特色あるサービスである。

以上は、シナリオ・ライティング法という未来予測の手法を利用して、私が描いた2010年の慶應義塾大学の図書館機能のある選択可能な未来像である。この未来像の中には将来に関し、1. 高度な技術導入の必要性、2. 大学全体の未来計画と有機的に結びついた図書館の未来計画の必要性、3. 多様化する個々の利用者の要求に対応可能なより個別化したサービスの展開、4. 情報提供の高速化、5. 24時間のサービス体制の確立など慶應義塾の図書館の未来に対する私の意見を具体的な形で表現してみたつもりである。私の描く未来は、かなり実現が難しいことも含まれている。しかし、慶應義塾の図書館の未来について本当にどんな選択可能な未来が有り得るのか、私の未来像、そしてKULICに連載されたこの特集の各論文が、図書館の利用者の方々と情報センターのスタッフそして大学の事務部門のスタッフと真剣に議論する糸口になれば面白いと私は考えている。

情報と利用者の間に

伊藤 恭子

(三田情報センター)
情報サービス担当

I. はじめに

約1年前から、力足らずではあるが利用案内検討会の代表を務めさせて頂いている。レファレンス経験も5年を越え、常に図書館員を利用者と情報、そして利用者と図書館の橋渡し役として意識してきた。

メディアの発達とともにパソコンや通信システムを利用したツールが導入され、図書館員には新しい知識と努力が求められるようになった。最近盛んになっている21世紀の図書館論の中では、機械化が進んでも図書館サービスにおける人的援助の必要性は認識されている。通信システムをベースにした無人図書館が実現したとしても、我々は図書館員の存在が無になるとは考えていない。

我々が情報の専門家として果たす役割を確認し、利用者への働きかけの一つである利用教育の将来像を考えてみたい。

II. 媒体の変化と図書館員の存在

「〇〇に関する文献が欲しいんですけど、どこに行ったらいいんですか？」……「日本十進分類法を知っていますか？」「雑誌記事索引は調べましたか？」。単行書と雑誌論文では探し方が違うとか、分類目録では全ての蔵書にアクセスできないので地下3階の図書を探すためには……など説明する我々の言葉をさえぎって「どこか一ヶ所に集めてあるんじゃないんですか？」と苛立つように問い直す利用者。我々はなだめるように説明を続ける。レファレンス・カウンターでは、このような質問と対応が毎日繰り返されている。カウンターで何人もの利用者に指導しても、ライブラリ

ー・オリエンテーション、ライブラリツアーを何年続けても減ることのなかった光景である。

図書館サービスには目録さえあればそれでよしとされた時代から約100年たった。その間、総合目録、書誌といった発想が生まれ、冊子体からデータベースへと形態が変化し、一方レファレンス技術としてインタビューの手法が注目され、図書館員とは利用者の真の要求を引き出して適切なツールを用いて必要な情報を利用者に提供する専門職であるという概念が定着した。我々の活動の場とする大学図書館では、情報の検索及び利用方法の指導という教育的目的も加味されている。

確かに我々はその職務に従って様々な努力をし、資料組織法、目録、書誌作成などの研究を続けている。そしてその成果の一つとして開発されたデータベースが図書館業務の中心となり、今後はどのようなデータベースを構築し、それをどのように活用していくかということに研究動向が移ってきた。

それでは、多くの利用者が望むように、キーワードをキーボードから或いは音声で端末に入力すれば必要な書誌情報とその所在、また(文献を含む)情報そのものをも入手できるデータベースが実現した時、我々図書館員の存在価値は何処にあるのか。不安を感じながらも、データベースとそれに含まれない情報源の検索方法、資料知識に専門性を見出し、将来の図書館員像が考えられている。しかし、変化するのはツールだけではない。データベース開発にあたって、出版業者やコンピュータ関係業者に我々は多くのヒントを与え、現実には検索方法のノウハウはそういった開発側から教えられている。コンピューターで情報を検索することが特別のことでなくなった時さえ、検索方法の知識が我々の専門性の根拠になるかどうかは疑問である。既にエポックリサーチや情報図書館RUKITのような情報検索を専門とするサービス業が出現している。彼らが大学生や大学に所属する研究者を市場とするようになれば、我々と図書館界以外のサーチャーとの競合は

避けられないのである。私は時々、図書館で端末機の横に立ってOAショーのコンパニオンよろしく機器の使用法を利用者に説明している自分を想像してしまう。

21世紀に図書館が単なる古い本を保管している建物でなく、図書館員が機械のお守り役でない状況を残すために、我々は図書館の‘人的資源’であろうとしている。

利用者はどのような時に図書館員を必要とするのか。

知り合いのある文学部の学生は、3年生になって初めて資料を集めるために図書館を利用したという。その時の様子を聞くと「図書館の使い方が難しい。入って、最初にどこへ行っていいかわからなくて、伊藤さんを探しちゃった。」「それから?」「家の近くの図書館で目録は使ったことがあったから引いてみたけどわかんなくて、雑誌を探そうと思って3階で係の人に聞いた。」冒頭に挙げた質問は、図書館に不慣れた学生には当たり前のものである。恐らくレファレンス・カウンターに辿り着くまでに、とにかく何か探せそうなところへ足を運び、レファレンス・カウンターの存在を教えられて来るのだろう。

極端なことをいえば、図書館に入って最初に目について図書館員に尋ねれば、必要な情報が何処で手に入るのかが分かり、しかも目の前に文献を揃えてくれればよいと思っている利用者が大半である。その最初に目につくのが図書館員でなく一台の端末で、それが必要情報を揃えてくれたら、利用者は何の援助も図書館員に求めることなく図書館を利用できたとするのだろうか。

約10か月の期間UMI社のCD-ROMを利用した利用者をお願いしていたアンケートの結果をみると、利用者は機械検索に過剰な期待をかけるものの、結果には最大の信頼をおいてはいないようだ。一次情報が冊子体の形態で出版される限りは、データベースは検索手段でしかあり得ないと考えられている。

21世紀に電子出版が紙媒体による印刷・出版に

とって代わったとしたら、その検索もれへの不安は解消される。しかし、現在まで人類が発見・蓄積してきたすべての知識が機械検索によって提供されるようになるとは思えない。なぜなら書物が冊子体として存在することによって生まれた学問と文化があり、また電子媒体は歴史が浅く耐久性が確約されてはおらず、記録媒体としての不安は解決されていないからである。録音管がレコード、そしてCDに完全に展開したように、出版も電子媒体に変わるという声もあるが、‘聴く’と‘読む’の大きな違いがある。人間の生理としてディスプレイに映し出された文字を改頁キーを押しながら‘読む’ことは、少なくともあと100年のうちにできるようになるとは思えない。

少々話が大きくなってしまったが、機械検索が当たり前の時代になっても、情報は文献として蓄積されていくものであり、また現代まで蓄積されてきたものが図書館にはある。情報サービス業と図書館員が競合した時、この一次資料の蓄積と提供が可能である図書館でサービスを行なえるということが必ず図書館員の専門性の根拠となると考えられる。資料を持ってこそ、データベースの有効性と非有効性とを常に論じられる立場にあるのだ。そして資料利用のノウハウを利用者に指導できるのである。

義塾図書館は、国内外に誇れる蔵書を有し、我々は、情報と利用者の間には必ず図書館員の介在が必要であるという認識と自負を持ち続けることができる。今春あるライブラリー・ツアーを担当し、学生同士の「図書館で案外面白いね。」「訊いてみないと分かんないことも多いね。」という会話を耳にした時、どのようなツールが導入されても、我々の果たす役割の本質は変わらないと確信した。

Ⅲ. 利用教育の展開

情報と利用者が電気コードでつながれる時代に、我々はその関係にどのように参入していけばよいのだろうか。

オンライン検索やCD-ROMの導入により、機械検索の実行には人的援助が必要とされることを、我々は短い経験の中からも既に確認している。先に述べた通り検索技術は情報サービス業者と競合するとしても、研究・教育の場における利用者援助の一つとして活動する限り、目的は情報サービス業のそれとは異なる。コンパニオンにならないために、図書館員は、データベースを利用するだけでなく、提供されたものに正当な評価を下すことのできる知識の習得と経験の積み重ねを心掛け、新しい商品待たずだけでなく、開発する側へ常に積極的に働きかけ、あくまでも主導権を持ち続けることが必要だと私は考えている。

そのためには、各分野の主題知識を備えたスタッフの充実が必須であるし、加えてその知識をシステム構築に反映できる能力も必要とされよう。さらには図書館経営の方針として、外部産業との柔軟な接触が可能な組織の実現が望まれる。

では、検索システムについては完全な知識と検索技術を得ているとして、我々は、それを利用者に提供しなければならない。冒頭に挙げた対応を繰り返すばかりでなく、利用者がより効率的に求める情報に到達できるように、利用教育を展開する必要がある。

利用教育は、利用者教育・利用(者)指導などいくつかの表現があり、その概念を表すための完全な共通用語とはなっていないが、ここでは「図書館のどこに何があるか、どのようなサービスが受けられるかを紹介し、積極的な図書館利用を促すこと」を目的とする利用案内と、「情報の検索と利用について二次資料或いは一次資料を用いてその方法を教示すること」を意図する利用指導という図書館側から利用者へ働きかける活動をまとめて利用教育と言うこととする。利用案内はオリエンテーション、利用指導はビブリオグラフィック・インストラクションと言い換えることもできる。

現在三田情報センターでは、各部署から1名ずつの職員が参加して構成している利用案内検討会

が、「図書館利用案内シリーズ」や「ライブラリー・ニュース」と題して発行している印刷物の配布と、4月の新年度開始時期と8月の通信教育課程のスクーリング期間中にスライド上映と館内ツアーを行なうライブラリー・オリエンテーションの実施によって利用案内を担当し、情報サービス担当が、ライブラリー・ツアーと称するビブリオグラフィック・インストラクションの受付・実施の窓口となっている。

私はこの二つの活動をより全館的に組織化して行なうことの必要性を感じている。

その理由は、まず、利用案内検討会においては各メンバーが優先すべき所属部署での業務量に押され、利用案内関係の仕事の思い通りに行なえないというジレンマに悩まされていることである。また、ライブラリー・ツアーは年々申込みが増加し、情報サービス担当一部署では対処できなくなり、他部署職員の応援を求めるという形で運営している。利用教育が片手間に行なわれるべき性格のものでないことは明白である。

さらに、ライブラリー・オリエンテーションとライブラリー・ツアーは実施時期が重なるために混同され易い。(ツアーは年間を通して受付けるが、実際は4月と5月に集中する。)ネーミングの問題かと検討もしているが、結局図書館側としてはそれぞれ内容を明確に表していることと、既に我々の中では定着し、例えばビブリオグラフィック・インストラクションと言うよりは、利用者にも分かり易いこともあって打開策は見つけれない。名前が混同されるだけでなく、三田の図書館に不慣れた利用者を対象とするために、ツアーにもある程度オリエンテーションの内容を盛り込まなくてはならない。オリエンテーションの方も単なる館内見学にしないために簡単なインストラクション的要素を含ませることが必要なのである。蛇足であるが、オリエンテーションとツアーの実施時間が重なり、50人以上が4グループを作って混雑する館内を歩き回ったことがあった。最後の理由としては、効果の望める利用教育を

目指し、実施時期や内容、担当者などを的確に計画すべきであると考えている。ツアーが4月に集中するのは、慣例として第1回目をツアーにあてるセミナーが多いからだ。しかし、この時点ではレポート課題も出されていることは少なく、卒業論文のテーマも決まっていない学生が殆どである。参加する利用者側にはまだ図書館利用の必要性が感じられていない。恐らくツアーに参加しても三田祭前に「どこに行けば……」式の質問をする利用者も多いだろう。実際「今教えてもらってもピンと来ない。」という声を聞いたことも、卒業論文執筆を控えた4年生に2度目のツアーを行ったこともある。

以上のように、参加者の意識に見合った利用教育を図書館サービスの一つの柱として計画的に実行する必要を感じ、利用教育の組織化を提案したい。当然、その実現のためには利用教育が図書館サービスの中で果たす役割の明確な位置付け、その実行に対しての館員の意思統一と、教員の理解、カリキュラムへの働きかけが欠かせない。

利用案内検討会の活動は、業務上細分化された部署を越えたプロジェクトとして、最も利用者に近いところで直接利用者に働きかけるものである。この利用案内検討会のような機能をもつ部署を設けることを考えるのは大胆すぎるだろうか。

実際に各部署で業務に従事し、利用者に接してこそ利用者のニーズを把握できる。利用案内検討会でも各部署からメンバーが集まっていることにより部署間の情報交換ができる。しかし、今後トータル・システムの運用や外部データベースとのリンクが実現すれば、組織は変革されるであろうし、各部署におけるノウハウも共通のものになっていくと考えられる。自宅から図書館システムにアクセスすることが可能になれば、利用者に接するのはカウンターだけではなくなるのだ。

現在義塾の各図書館では、義塾の教育的環境の支えもあり、連日相当数の利用者が入館する。その点で利用者を図書館に呼ぶ(入館者を増やす)ことを目標としている小規模図書館の利用案内パ

ンフレットと、我々が作成し配布しているそれとは性格を異にしているように思う。しかし、社会の情報化が進み図書館以外で求める情報が入手できるようになった時、我々は大学図書館たるべきサービスを提供する、そのための努力を惜しんではならない。

IV. おわりに

これまで利用案内は主に配布物、オリエンテーション(スライド・ツアー)という方法で行われてきた。最近他大学図書館では利用案内ビデオの制作が盛んである。三田情報センターでも近い将来、OPAC端末でアクセスできるシステムが実現するだろう。「無人図書館」においてはパソコンが唯一の媒体となるかもしれない。

方法が何に変わっても利用案内・利用指導がなければ、利用者は図書館の入口で迷い、端末の前で困惑する。しかし、用意されたパンフレットや企画されたオリエンテーションでは個々の利用者の全てのニーズに応じられない。利用者の情報要求を把握するという概念には、利用者がどのような援助を必要としているかを知るという意味を含んでいると考えたい。

図書館サービスの中で利用教育は、図書館員が情報の専門家として知識を持つだけでなく、それを生かすために工夫をする、あえて言うならばおもしろみがある分野であると思う。そしてどのような時代が来ても、むしろ従来よりもそのあり方と方法は研究されていくべきだと思う。

参考文献

- 1) 丸本郁子, 椎葉倅子編『大学図書館の利用者教育』(図書館員選書27 日本図書館協会) 1989
- 2) 小川治之 “高度情報化社会を迎える学術図書館” KULIC 23 (1989.11) p.1-5.

機械化の向こう側

小 沢 ゆかり

(日吉情報センター
テクニカル・サービス課)

慶應の図書館の人も他の図書館の人も、この数年の図書館の機械化をめぐる急展開に心騒ぐ日々を送られていることと思います。確かに私が大学で学んでいた頃すでにオンライン目録や電子出版は実現していたわけですが、それは最先端のよその話で自分にとっては漠然としたずっと先のことに思えたものです。実際この様に急激に機械化の話がやって来るとその勢いに圧倒されてしまい、機械の能力に合わせて仕事を考えたり、現在抱えている難問の解決を機械化に押しついたりしてしまいがちです。

今、21世紀の(=10年後の)図書館を検討する場合、まず思い浮かぶのはやはり機械化によるメリットです。確かにそれは大きなポイントではありますが、この線から検討していくと皆似かよった将来像を描いてしまう危惧があります。また、過去10年のことを考えると、今後10年の間には現在では思いもよらない様な技術的革新があっても不思議ではありません。それに素人心に、途中で将来の可能性を狭める様な選択さえしなければ、どの様な道を通っても行き着くところに大きな差はないと思うのです。

そこで、機械化の問題は一気に飛び越えて(機械的、技術的問題はクリアされていると仮定する。なんと楽観的!)、その先どの様な図書館になりたいか考える機会を持つことも時にはよいと思います。現実には捕らわれずに思考を発展させることになるので、個人的志向や嗜好がかなり反映されてきますが、他の人の多種多様な志向に接して思考を柔軟にし、発想の転換をはかっていくことも、重要ではないでしょうか。

I. ある図書館員の個人的志向

私の場合、現時点での個人的な志向(や嗜好)は以下の要素から成り立っています。現状をかえりみず個人的嗜好に走る言い訳代わりに触れておきましょう。

私は小学校の頃から公共図書館や学校の図書館に御世話になってきて、図書館は便利で面白い所だと他の人にも教えてあげたくて図書館員になろうと思いました。「図書館に行けば、読むのに面白い本も見つかるし、知りたいことを教えてくれる本も見つけることができる」「読書には文学的なイメージが根強いけれど、実際は様々な分野の本があって興味に応じた本がきっとある」という事を多くの人に知ってもらいたい、またその期待を裏切らない図書館でありたいと思うのです。

大学時代には、主に公共図書館や中高校生の年代への図書館サービスに興味がありました。昭和45年前後から大きく意識の変化のあった公共図書館界の目指す所は「権利のある人は誰でも利用できる条件を整え、より多くの利用を得ること」「利用者の求める資料を提供出来ること」と言えるでしょう。利用者の幅広い要望に常に答えられる蔵書構築を心掛け、図書館サービスをアピールすることによってより多くの利用者を獲得しようとする姿勢には、館種を越えて学ぶべき点が多いと思います。

中高校生に対しては読書離れの傾向が指摘されています。大人が彼らに読んで欲しい本ではなく、彼らが読みたい本、必要としている本を的確に把握しようとする姿勢や、彼らを図書館に引き寄せ定着させる為の努力がまだまだ充分ではない状況です。どの図書館においても、利用者を魅きつける為には、それぞれの利用者層を把握し理解しようとする姿勢が不可欠であると思います。

慶應の図書館に勤めて目録業務を担当して今年で6年目になります。分類番号の付与や標目の決定の際に迷った時は、“利用者にわかる様に”ということが一番の決め手になります。それなのに、利用者とは接する機会が殆どないのが弱点であ

リコンプレックスにもなっています。また、一冊一冊手塩にかけて整理した本には、機会を逃さず一回でも多く利用されて欲しいと考えてしまいます。利用者にとっては、探しているテーマに関して何件か該当する資料がみつければよいわけですが、目録担当者としては、目録上の都合や間違いのせいで或る資料が利用される機会を逃すことはとても残念なことなのです。余裕さえあれば、熟読玩味して念入りに分類番号を付与し、標目も数多く選定して様々な手掛かりから探し出せるようにし、以前に整理したものと調整をこまめにはかりたいと思いながら、押し寄せる新着図書を黙々と片づけていく毎日なわけです。

最後に、私は本屋に行くのがとても好きです。図書館に行くのも好きですが、今は本屋に行く方が楽しい。(毎日図書館に勤めているのだから当たり前という話もありますが。)週に1,2回はいつもの本屋に行って新刊をチェックしてそれから何か面白い本がないか探します。出先や旅先でもなにかと本屋に入ってしまうのは、面白い本が見つかるかもしれないと常に期待してしまうからです。図書館の本は実に正しく並んでいて、目的があって本を探すにはとても便利です。でも、一冊一冊の個性を減少させている気がします。本屋の書棚は図書館と較べて雑然としていますが、それぞれの本が個性を発揮してアピールしてきます。それから、本屋の本はお金を払わないと持って帰れないし、図書館の本は無料ですがいつかは返さないといけません。両者の違いをあまり感じさせない、魅力的な図書館になりたいと思います。

II. 魅力的で無駄のないコレクションの構築

昨年新聞に、ある学者の図書館の理想像についての記事が載っていました。「もう7年ほど前のことだが、アメリカに留学したときつくづく感心したのは、大学の図書館が「民主的な制度」として機能しているということだった。例えば、何か新たなテーマを研究したくなるとする。そんなときは何はともあれ、図書館に行って書棚から書

棚へと駆け回れば、数時間のうちに基本文献を集められる。後はそれを読破するだけだ。やる気さえあれば、誰でもそうしてゼロから新しい分野に挑戦することができる。そんなことはあたり前だと言われてしまいそうだが、日本ではなかなかこうは行かない。少なくとも僕の専門分野では、図書館の蔵書が頼りにならないので、研究者は泣く泣く安月給をはたいて、自費で本を購入することになる。また、捜している文献が図書館にはなくて、誰かが私蔵しているというケースもよくあるが、この場合には人脈を通じて借受けるしかない。つまり、どうしても金かコネが物をいう世界なのだが、これはあまり健全ではないと思う。本は図書館にあるというのが、本来の姿ではないのだろうか。ところが、日本の学者の間では、図書館の拡充に努力する以前に、必要な本は自分で買ってしまおうという傾向が強い。ぼく自身、人並み以上に金と時間を本のために浪費してきた人間だが、この種の非合理的な精神主義はそろそろ断ち切るべきだといいたい。金もコネも振り捨て、軽快なフットワークで広々とした図書館を遊園地のように駆け回る——ぼくが思い描く書物のユートピアはこんなものだ。」(沼野充義 ロシア・ポーランド文学者 朝日新聞 1989年4月3日 夕刊)

様々な分野に関して十分な基本的文献を持つこと、蔵書の構築は個人の手元ではなく図書館に共有し育てていくこと、より利用者にマッチした知識の宝庫となること、これは正に図書館側が望んでいることでもあります。1つの手段としてあらゆる資料を集めるという方法もありますが、経済的、スペース的に限界があり、また、大学図書館に求められる機能とは違います。大学図書館の守備範囲として効率的かつ充実したコレクションを維持していく為には、選書や蔵書構築に細心の努力が必要です。新刊や販売リストを追うだけではなく、書評や紹介記事、最新のトピックス、各種リスト、論文の参考文献など各方面に絶えず目を光らせねばなりません。さらにその中から、必要なもの、質がよく価値のあるもの、利用者にマッ

チしたものを選びだす腕（選択眼）も必要です。

さらに、資料の動向に気を配るだけでなく、利用者層を把握し理解する事も重要です。利用者の意見や要望を吸い上げる手段、蔵書の利用の実態の把握、利用者の行動の観察などと、その検討結果を反映させることが必要です。

利用者側、特に研究者には、自分達が図書館のコレクションを作り上げていく中で大きな一端を担っていることを強く意識して戴きたいものです。それぞれの専門分野を想定した小さなコレクションが図書館内に個別に形成されると確かに便利かも知れませんが、無駄が多く、利用の機会も限られます。機械化によって数多くのアプローチで資料にたどりつける様なになれば、同じ資料を何箇所もで買うような無駄を他の資料にまわす方が賢明です。学際化が進むと専門分野以外の資料の利用の機会も増えるでしょう。お互いもちつもたれつということで、図書館のコレクション全体、図書館の利用者（もちろん学生達を含んで）全体を考慮してコレクションを作り上げていく為に、いっそうの理解と協力が望まれます。

Ⅲ. より多くの利用者を得る為に

一連の公共図書館の変革の指針とされた『市民の図書館』では公共図書館の基本的機能を次のように述べています。「公共図書館の基本的機能は、資料を求めるあらゆる人々に、資料を提供することである。公共図書館は、住民が住民自身のために、住民自身が維持している機関であるから、資料を求める住民すべてのために無料でサービスし、住民によってそのサービスが評価されなければならない。公共図書館は、資料に対する要求にこたえるだけでなく、資料に対する要求をたかめ、ひろめるために活動する。公共図書館は、あらゆる人々にサービスする。年齢、信条職業などによってサービスに差があってはならない。また公共図書館は、全住民が、どこに住んでいようと最も効果的な方法でサービスを受けられるようにすべきである。公共図書館は、利用者の求める資

料は原則としてどのようなものでも提供する。…」この文中の“公共図書館”を“大学図書館”に“住民”を“学生と教職員”に読み変えてもあながち間違いではないと私は思います。我が校の図書館でも、資料に対する要求に答えるという点ではかなり健闘していますので、次は、利用を促進し、新たな利用者を開拓することに積極的に踏み込んでみてはどうでしょうか。

図書館を理解し活用している利用者の、より高度な要望に答えていくだけでもやりがいがあり、十分に忙しいのです。けれども、「在学中数える程しか図書館に行かなかった」「行ったことはあるけど、探してるものがみつからなかったから、あまり行かない」「きれいで涼しいけど、何がどこにあるかわかりにくい」などと聞くと悲しくありませんか。こういう学生達（研究者でも図書館をあまり利用しない人もいますし）に対して、「君達も努力が少し足りませんね」などと言わず、受け身ではなく先回りして、手取り足取りと言われる程のことまでしてもかまわないと思います。

例えば「聞けばわかる」「利用案内を読めばわかる」ではなく、配架の案内や目録の引き方のポイントを目につき易い所に掲示するなど、まだ図書館の使い方に慣れていない人だけを想定した工夫もすべきだと思います。また、資料の区分、目録の配列基準などで、利用者はどの図書館でも共通の様に思っているも実は違うことが結構あります。こういった初歩的な問題でつまづいて探している資料を見つけれなかった為に、利用者を失うことは極力避けたいものです。また、図書館のスタッフも、基本的な使い方についての質問には正確に対処できるよう訓練されていなければなりません。答えられなかったり、間違ったことを教えることがあると、それだけで不信感を与えてしまうこともあります。

利用者を図書館へ引き寄せ、定着させていく為の工夫も、積極的に考えていきたいものです。各種の企画、オリエンテーション、資料展示など、まず図書館を訪れ利用する機会を数多く設定する

ことが望まれます。図書館の資料へ導くよう関連付ければより効果的です。さらに上級向きの利用指導、各種テーマに関するリスト、テーマに基づくコーナーの設置など、余裕さえあれば図書館をアピールすることは図書館員の望むところです。

新しい利用者を次々に引き入れると、利用者の質が下がって環境が悪くなるという意見もあります。しかし、大学図書館も教育機関の一環ですから図書館におけるマナーを教えるのも1つの役目なのかもしれません。図書館は、資料及び情報を提供する場であって、単なる自習室ではないことを、学生にも大学にも理解して欲しいものです。

IV. 魅力的な施設として生き残るには

情報や文献の電子的形態化が進み、利用者が自分の端末から図書館や他の情報提供機関にアクセスするようになると、従来のイメージによる施設としての図書館は不要になっていくという話が最近聞かれます。確かに情報提供機関としての図書館のオリジナリティーは無くなっていくでしょうし、大学における情報の提供を、図書館という施設にこだわって行っていく必要はないと思います。従来図書館の機能として主に挙げられてきたのは、情報の提供と資料の提供の2点でした。情報の提供は、これまで図書館の持つ資料に大きく依存していましたが、今後は2つの機能を別々に考える事が出来るようになるわけです。

この様な中で大学図書館が施設として存続するとしたら（私はぜひ残って欲しいのですが）そのポイントは資料提供の機能にあると思います。資料提供の場といっても、本がぎっしりの“文書館”のイメージではなく、ニューメディアも含め、素材としての資料が満載された、知識と知的な刺激の宝庫としての魅力に磨きをかけていくべきでしょう。

資料の品揃えが図書館員の腕のふるい所となります。まず持つべきものは、様々な素材としての資料です。オリジナルとして価値のあるもの、今後電子的形態に置き換えられる機会のない文献、

フルテキストなど電子的形態の資料、ニューメディアによる資料などが考えられます。個人の思想体系や芸術的な要素などが関わってくると、オリジナルに近い程、資料から得るものが多くなる分野もあります。さらに、各分野の基本的知識を、身近に手に入れる為の資料も必要です。

そして利用者はこの施設へ、特定の資料を利用する為、研究の題材やテーマを探す為、知的興味を満たす物を探しになどの理由でやって来でしょう。図書館の魅力は、気軽に中身を確かめられること、ブラウジングで意外なものを発見できることにあります。

資料や情報に関連さえあれば、今後はレクリエーション的な要素も盛り込まれていてもいいと思います。大学の他の施設は学生や研究者がいなければ単なる場所に過ぎませんが、図書館には、常に、情報があり資料があり、知的刺激があふれています。親しみやすく、行けば何か面白い物がみつかるという期待感のともなった施設として生き残り、今後大学内でますます大きな位置をしめていく様になればいいと思うのです。

以上のことを実現する為には、仮定として挙げた機械化の達成の他にも、人的余裕、経済的余裕と、大学内の大きな理解が不可欠です。機械化は人員削減ではなく、サービスの向上に全面転化されるのが理想です。また、機械にできること、機械にしかできないことが機械によって行われるようになって、図書館にはヒューマンなイメージを持ち続けて欲しいと思います。

さて、ここまで読んでいらして、大いに共感を覚えた方がいたとしたら、貴方は古い体制のままでは良くないなどと言いながらも今進みつつある状況にあまり同調出来ていないようですね。本という形や印刷された形態に執着があったり、図書館の仕事に職人的な誇りを持つことがナンセンスな時代がやってくるのです。より柔軟な思考（と嗜好）を持つように意識していく必要があります。努力してもどうしても同調出来ないのであれば

ば、より適した仕事への転職を考えた方がいいかもしれません。逆に、全く異質のものを感じた方には、将来の大学図書館を考える際の柔軟剤として少しでもお役にたてば幸いです。また、私の様な思考の人が少なくはないと思われるので、こういう人に対処する際の参考にしてください。

図書館の仕事には営利の追求という面の厳しさはありませんが、理想と心意気でもっている様な所があります。理想を追えばきりがなく現実との

ギャップに悩みは尽きませんが、一步一步、必ず前よりは一段上に進んで行きたいものです。

参 考 文 献

- 1) 『市民の図書館 増補版』日本図書館協会, 1976.
- 2) F. W. ランカスター『紙からエレクトロニクスへ』日外アソシエーツ, 1988.
- 3) 竹内紀吉『図書館のある暮らし』未来社, 1990.
- 4) レイ・ブラッドベリ『華氏451度』早川書房, 1975. (原著は1953年に発表)

小 展 示 ニ ュ ー ス

〈三田情報センター〉

平成元年

7月1日～8月31日

フランス革命200年にあたって Part 2

——1789年に登場した人々

9月1日～9月7日

慶應義塾図書館蔵 西洋図書館史稀観書展

9月11日～11月2日

日本の古貨幣

11月6日～11月30日

ジャン・コクトー生誕100年記念小展示

12月4日～12月22日

サー・トマス・マロリー著

「アーサー王の死」(1485年初版)とその影響

平成2年

1月17日～3月10日

「三井好み 都のにしき」(明治錦絵)

3月10日～4月28日

「江戸時代の一枚刷“寺社境内絵図”上
関西篇」刊行記念展示

5月7日～7月14日

三田文学ライブラリー所蔵資料による「三
田の文人・六人展」

(1) 永井荷風(5月7日～5月17日)

(2) 久保田万太郎

(5月18日～5月29日)

(3) 水上瀧太郎(5月30日～6月9日)

(4) 佐藤春男(6月11日～6月21日)

(5) 折口信夫(釈超空)

(6月22日～7月3日)

(6) 西脇順三郎(7月4日～7月14日)

〈日吉情報センター〉

平成2年

4月4日～4月27日

福沢諭吉を味わう

日吉情報センター雑感〈所長の抱負〉

日吉情報センター所長

小長谷 彌 高

(文学部教授)



日吉情報センターの所長を仰せ付かってから早いものでもうかれこれ1年になります。全くうかつなことに、日吉情報センターが日吉の図書館と関係あることは何となく分かっていたが、図書館そのものだけを

指す正式な名称であることを知ったのは突然の電話による任命ばなしのときでした。図書館に関する私の当時の認識はその程度のものでした。あらためて考えてみますと、図書館という大学における学問の中核の一つに直接かかわりのある仕事をするということは学者として大変な名誉ですが、それだけに非常に責任の重い仕事です。浅学菲才の私ごときがその責任を担うなどといったことはそれまで全く夢想だにしたことがありませんでした。ですからその時「所員がしっかりしているから心配ありませんよ」という清水龍壘研究・教育情報センター所長の励ましの言葉がなかったならば、その場で強引に降りさせてもらうところでした。そのような有様で就任当初はかなり心細い思いをしました。

しかしその後まもなく清水さんの言葉が真実であることがはっきりしてきました。所員の多くは図書館学について訓練を受けた有能な専門家であり、その方面の知識のない私の質問に対して適切で納得の行く答えがたちどころに返ってきます。ですから私は所員の説明を聞いてただただうなずくばかりです。

今の学生は恵まれている、とよく言われていま

す。確かに私が学生の頃経験した戦後の物質的精神的窮乏とか、いまだにいくつか残っている専制国家の学生たちが現に経験している思想の弾圧とか、日本でも戦前から戦後にかけて見られた体制に対する若者の嫌悪感などを今の学生はほとんど経験していません。現在苦難と忍耐を強いて若者を鍛えるものは受験地獄だけで、その障害を首尾よく越えてしまった日吉の学生たちにとって、就職や結婚というハードルを別にすれば、彼らの前に立ちはだかる大きな障害は、何もないといえます。その点で確かに今の学生たちは恵まれています。しかし本当に恵まれていると考えて良いのでしょうか。

流動的な社会情勢や価値観の急激な変化が学生たちにある種の無力感をもたらし、将来についての視界を狭めていることは否めない事実です。そのため往々にして無気力であるという謗を受ける学生たちですが、物質的欲求が殆ど充足させられている現在の日本社会が、若者から彼らの精神活動をかきたてる大きな原動力である飢餓感を取り上げてしまっているように思われます。その意味で私には今の学生たちは恵まれているようでいて実は恵まれていないように思えてなりません。

将来が不透明な今のような時代には優れた知識と並んで、その知識を広い視野のなかで生かせる豊かな教養と人間性を培うことがきわめて肝要です。ところがそれにゆっくり取り組める時期は、受験勉強に追いまわられてきた若者にとって、専門課程に入る前の日吉での1、2年しかないのです。そういった時期の学生に精神の糧になるものを日吉図書館にはできるだけゆたかに揃えておき

たいと思います。

日吉図書館のサービスの対象には、こういったいまだに専門の研究対象を持っていない一般教養課程の学生のほかに、特定分野を専門に研究対象としている教員があります。このサービス対象の二面性は日吉の図書館の特徴といえます。しかし図書館側に主体性があるという意味では図書館の主たるサービスの対象は学生です。つまり学生を対象とした図書予算を組み、教員・学生の要望を勘案して選書し、整理し、1階から3階までの部分に配架し、貸出をし、また文献情報についてのレファレンスを行なっています。開架式であるため棚から直接本を手にとって検索できる便利さのほかに、キャンパス内での地の利や完備している空調、それに居住性の良さもあって高い入館率を保っています。

一方教員を対象としたサービスですが、図書館側には限られた主体性しかありません。つまり日吉に研究室をもつ教員の組織体の一つである研究室運営委員会（実務は図書委員）が予算を組み、選書をします。図書館はその選書された本の整理と、配架と、貸出を行ないます。3階までの空間に往々見られる活気や喧騒とは対称的に、4階は常に静寂が支配し、デスク・ワークの研究環境としてはきわめてすぐれています。

この1年程の間最も気になっていることは滞貨が多いことです。慢性的人手不足のため選書が済んで購入することになった本が何千冊も山積みになっていて、登録が済んで配架されるまでに半年近くかかることが多いのです。担当所員もなんとかしたいと思っているのですが、滞貨の量が個人の努力の限界を越えており、そういった山積状態が長年にわたって続いていると、その滞貨が常態であるように見えてきても不思議に思えないのですが、部外者にはひどく気になることです。情報を新しいうちに提供するというのも図書館の使命の一つですので何とかしたいものだと考えています。ただ特定の文献を早く見たい場合、その旨申し出れば特別早く処理をする便宜は計ってもらえるようです。

時代の趨勢で平成4年4月完全実施を目標に段

階的に図書館業務のコンピュータ化がはかられています。これは計算センターを中心にして教務関係から、庶務や経理の出納までを含む全塾的なシステムの一環で、完成の暁にはカードや冊子体の目録はなくなり、日吉図書館を含む全塾の図書館の本や雑誌の購入、取書、検索、会計、貸出返却などすべてが入力され、図書館や研究室に備えられる端末により目録閲覧・検索ができるようになります。将来は自宅の端末からも電話線をとおして検索が可能になるようです。その機械化のための準備としてソフト面では既存図書のカード全部の週及入力が必要で、現在ただでさえ窮屈な予算と不足している人手をそちらにも割かれています。残念なことにこの作業は前述の図書の滞貨に拍車をかけることにもなっています。

私が所長として未熟であるうえに、このようにここ2、3年は丁度機械化という図書館にとっては大きな転換期に当たっており、なにかと行き届かない点、ご不便をおかけする点があることと思いますが、利用される方々のご叱責、ご意見、お力添えを心から願っております。



理工学情報センター所長就任に当たって

〈新所長の抱負〉

理工学情報センター所長

山口 喬

(理工学部教授)



ご案内のように、平成2年2月24日前所長白井恒雄(応用化学科教授)がクモ膜下出血により急逝され、凶らずも理工学情報センター所長をお引き受けすることになりました。故白井教授が所長に就任されたのは平成

元年10月1日でしたので、5ヶ月足らずの在任でありました。この間、雑誌・図書・新しいメディアによる資料(学生のための教育用ビデオ等)の充実、教育研究機関の一隅としての理工学情報センターの環境整備、閲覧スペースの問題等を第一課題とし、また当センターが保有する資産を教職員、学生、卒業生がいかに有効に利用できるかを第二の課題として積極的に取り組みはじめられた矢先だけにその逝去は残念でなりません。

さて、理工学情報センターの管理運営に当たっては、これを取りまく環境は決して平穏であるとは言えないものがあります。その第一は図書をはじめとする図書館資料の価格の高騰化傾向です。CD-ROMといった電子媒体の資料の購入も今後慎重に検討を加えていかなければならないことは勿論ですが、従来の形式の雑誌がはたす役割が消滅するとは考えられません。コンピュータの進歩はペーパーレス社会の実現とは正反対に紙の消費を増大させました。また情報ネットワークは一極集中化を回避させるどころか、“地上げ”と言った言葉に象徴されるような企業の東京集中化をもたらしました。カラーテレビの普及が絵本の需要を吸収しなかったようにCD-ROMのような新媒

体の資料が増えれば増える程、従来の雑誌の役割を極わだたせることとなります。それを証するかのよう、新規創刊の雑誌が次々と出版され、研究者からの購入希望も後を断ちません。経済大国日本というイメージは雑誌の円建て価格や日本向け別価格をもたらし、また複写機の普及による出版社の損益が価格にはね返るといふ悪循環が理工学情報センターの図書予算を圧迫してきています。8学科11専攻の理工学部の資料センターとして現在の図書予算が妥当かどうか科学的に分析する必要もあるかもしれません。

第二は、現在のペースで図書館資料が増えていけば早晩書庫が足りなくなるのは目に見えています。そのためにも、資料の電子的フルテキスト化、CD-ROM化、同規模研究機関との資料の分担収集・保存といった取組に対する調査研究も欠かせないところです。

第三は、書誌情報の迅速な提供ということが利用者に望まれるところですが、これは現在、湘南藤沢キャンパスに導入される汎用メインフレームを核として、研究・教育情報センターの機械化の開発が行われています。従って、オンラインで書誌情報を提供できる日が近々到来します。これにしても、現在のワークステーションの寿命が1年半半と言われるように技術的サイクルが短いことを考慮すると、増え続ける書誌情報を低価格かつ効率的に保持するにはどうすればよいか、今から調査検討が必要かと思われます。

就任に当たって念頭に浮かぶことは以上のようなことですが、故白井前所長も心にかけていましたように、日吉から矢上台キャンパスにやっ

てくる理工学部生に落ち着いた環境の中で勉学に励んで欲しいということが課題として残されています。

故松下幸之助氏のご好意により松下記念理工学図書館が誕生してから来年は20年を迎えます。三田の慶應義塾図書館（三田情報センター）、日吉情報センター、あるいは現在建設中の湘南藤沢メディアセンターと比較した場合、建物内部、学生用机等で遜色がないとは言えない状況です。リノリウム床のカーペット化、日吉並みの閲覧机、壁の亀裂の再塗装、建物内部のインテリジェント化等理工学部ならびに熟当局のご理解ご支援を得ながら実行に移していきたいものです。

昨年、創立50周年を迎えた理工学部は記念行事の一つとして国際シンポジウムを開催しました。これのアウトプットは「ヒューマン・ハーモニー：科学と社会の調和をもとめて」でありました。科学技術の進歩が人類に大きな光明をもたらしたと同時に、社会の安寧に重大な影をもたらすという場面も出現しました。その中には本来、魚や野菜の切断に使用すべきものが殺人に使われたといったものから、後になって見なければカストロフィが予知できなかったというものまでが含まれていました。これらのことに関心はどのように対応したかを知るためには過去の資料が役立てられるでしょう。

一方、ミクロ的には、日本における科学技術の基礎的研究の必要性はますます強調されるのでありましょうし、世界もそれをわが国に要求しております。また、既に言われ尽くされておりますように、研究領域の境界が極めて流動的になっており、大学院理工学研究科に誕生した計算機科学、物質科学、生体医工学といった新専攻もこれらの結果と見なしてよろしいかと思います。基礎研究の着手は独創性の有無から始まり、文献探査が基本となります。

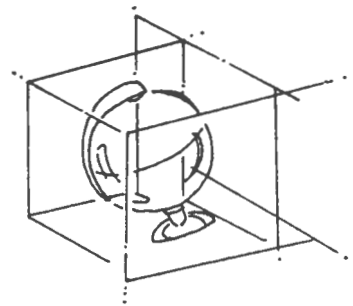
以上のようなマクロ的、ミクロ的環境の変化は理工学情報センターの管理運営にも影響を及ぼしてきます。8学科11専攻の先生方の研究・教育活動がいままでも決して一様ではないために、これまでの先輩所長をはじめセンター職員はそれなり

にご苦労があったと伺っております。科学技術の進展がコモダリティと直結し、我々の職場や家庭におけるエネルギー、コミュニケーションに変革をもたらすという図式は今後も続くと思われれます。センター職員によりますと、同業者が集まると「21世紀の情報化社会と図書館」、「電子出版と図書館」といったテーマの議論がかわされるといいます。この現象は今まで述べてきたことと決して無縁ではありません。

現在、理工学情報センターは建物内にethernetを付設し、矢上台キャンパスのLANと接続した場合どのようなサービスが提供できるのか検討に入りました。「21世紀の情報化社会」に対応するための第一歩というわけです。

さて、「21世紀の情報化社会」に対応するための基幹構造の整備で一番重要なのは申すまでもなく人の問題であります。幸い本塾文学部には図書館・情報学科があり優秀な人材を養成していただいておりますが、現在の多極化した社会では一専攻学科がはたす役割はかつてのような重要性を認め難くなってきています。従って、職員の門戸を広く解放すると同時に、OJTを必要に応じて実施すべきかと思えます。

理工学情報センターが研究・教育活動のカゲの内閣と噂されることを切望するわけですが、そのためにも、センター協議会でのご支援はもちろん、理工学部当局、熟当局のご支援をお願いする次第です。



医学という主題に出会って

近藤 真理子

まだ、図書館司書という職業にあこがれを抱いていた高校生の頃、図書館員になりたいと思った理由の中に、次のようなことがあった。「図書館では、人文科学・自然科学・社会科学など、さまざまな分野に触れることができる。」「図書館司書とは、広範囲にわたる主題知識をもっていなければいけない知的な職業である。」といったようなことである。

そのころの私は、専門図書館という存在を知らなかったから、ある分野にしばった図書館があるとは思いませんでした。

大学で図書館・情報学を勉強するようになって、専門図書館の存在は知った。が、その時も、公共図書館・大学図書館・専門図書館というジャンルは、それぞれ全く別に成り立つものだと考えていた。

これらのジャンルが重なりうることに気付いたのは、就職してから、しかも医学情報センターに配属になってからである。私は、「大学図書館」であると同時に、医学分野の「専門図書館」でもある図書館で働くことになった。

高校時代に想像していた「広範囲の主題を相手にするインテリジェントな職業」は、専門図書館で働くことになって少々路線がズレてしまった。あらゆる分野を対象にするのではなく、「医学に関する主題」という枠組みの中で深い主題知識を要求されることとなったのである。

しかも、私の担当業務は図書の整理であった。主に図書の目録をとる。分類をし、件名も付与する。

恥ずかしい話だが、私は、医学はもちろん生理学すら知らないことが非常に多い。小学校レベルのことでも知らないことがあるのではないかと思う。そんな私がひとつひとつの図書に件名を付け分類をすることになったのだ。

当センターで件名に使用しているのは MeSH のタームである。最初、MeSH で件名作業をしなければならないと聞いたとき、①英語である。②専門用語である。③主題知識がない。という理由で自分にはできるかどうか、とても不安だった。特に、洋書には NLM のカレントカタログという心強い味方がいるが、和書にはほとんど頼れるものがない。

しかし次第に慣れてくると、当初考えていたよりは難しいことではないと感じるようになった。件名にしても分類にしても、頻繁に出てくるものは決まっている。また、臨床系のもはだいたい病気の名前やどの臓器かによってなんとかなるものだ。

基礎系、とりわけ薬学のようにさっぱり分からない分野というのも相変わらずある。が、人文・社会学系にありそうな、「全く捕らえどころがない」ことはない。医学に主題が絞られたためにかえってやりやすくなったことも多いのだ。

今こうして考えてみると、以前は「図書館司書は扱う主題が広範囲だから知的だ」と思い込んでいたところがあったが、主題が限定されていても主題知識を要求されるという点では全く変りがない。

むしろ、ありとあらゆる分野に深く通じることなど不可能に近いのだから、各人が自分の得意とするテーマ・専門とするテーマをもっていることこそ大切なのだ。当り前のことかもしれないが、そのことに案外、気付かないでいた。

残念ながら私には、他の誰にも劣らない自信のあるテーマはない。しかし私には偶然にも、医学図書館という場を与えられた。これも何かのご縁かもしれない。研究者のレベルには到底及ばないまでも、カタログラーとして最小限必要な程度の主題知識は身につけるよう心がけたい。

(医学情報センター資料サービス担当)



慶應義塾図書館トータル ネットワークシステム

関 秀 行
(本部事務室機械化計画担当)

I. はじめに

今日、日本の図書館界は機械化ブームである。大学図書館のみならず、公共図書館、学校図書館と館種を問わず機械化が行われている。業務へのコンピュータの導入いわゆるOA化は時代の趨勢とは言え、多くの図書館は自身が抱える問題の解消とサービスの進歩を求めて機械化に乗り出している。

II. これまでの機械化について

慶應義塾図書館の機械化の歴史を振り返ってみよう。機械化に関する意識は古くからあり、業務にコンピュータを導入した時期は他と比べても早かったと言える。ところがコンピュータの導入といってもそれは、個々の業務の部分的な機械化であった。たとえば、各種統計類の帳票作成、雑誌の冊子体目録作成、図書の目録カード作成などである。最も大規模なもので、図書の貸出・返却など閲覧業務の機械化があった。これは専用の中型コンピュータを配し、主にカウンターで行われる業務を機械化するものであったが、利用者および図書館業務に多くの便益を与えたと評価し得るものであった。このように過去の機械化は個々の業務単位で行われていた。しかし、それは明確なポリシーに則って行われたものとは言い難い。つまり、その時その担当部署の管理職が機械化に積極的であったか、または同時にそれを成し得るスタッフがいたか、はたまたその業務が機械化しやすかったか、機械化を行うだけの資源があったかなどのある種物理的な要因に左右されつつ、行き当たりばったりにて有志が結集して行われてきた機械化という感を拭えない。たとえば、前述した閲覧業務の機械化は日吉キャンパスがその先駆であっ

たが、その後三田地区で同じようなものを別に開発した経緯がある。言うなれば、問題解決よりもコンピュータの導入自体が目された試行錯誤の時代であった。しかし近年になって、機械化が図書館業務・利用者サービスにいかなるメリットを与えるかという点に関心が寄せられるようになった。これは慶應に限らず、図書館界全体の傾向と言えよう。

III. 計画の背景

業務を機械化する最大の目的はその業務を効率化することである。今まで行われてきた部分的な機械化でも当然その効果は発揮されてきたが、その効果もあくまで部分的なものに過ぎなかった。ところが近年、図書館の提供するサービスの多様化・迅速化を求める声が高まる一方、それらに応えたくとも応えられないほど図書館業務の繁忙さが増し、それに伴うサービス面での行き詰まりが生ずるなど、図書館の抱える問題が深刻なものになってきている。図書館としてはこれらの問題に対処していかねばならないわけであるが、そこで思い当たる方策の一つが、現在部分的に行われている機械化を拡張する形でこれらの問題に対処できないかということである。つまり、図書館業務を個々の業務単位で捉えるのではなく、一元的なものとして捉えた機械化である。

前置きが長くなったが、以上のような状況を背景として現在、大規模な図書館業務機械化計画が進行中である。この計画が成就したあかつきには全塾レベルの図書館トータルネットワークシステムが完成することになる。

IV. 計画の概要とその意義

この計画は最終的には図書館トータルネットワークシステムなるものの構築を目指すものである。つまり、図書館の全業務を（トータル化）、慶應全キャンパスの図書館が連動した形で（ネットワーク化）、機械化を実現しようとするものである。図書館の全業務ということは、選書→発注→受入→目録→閲覧の流れを一貫したシステムで処理することを目指している。具体的な開発方法

として、機械化の対象となる図書館業務を①図書の選書・発注・受入業務、②雑誌の選書・発注・受入業務、③目録業務、④閲覧業務、⑤目録検索サービス、という5つのフェーズに分けて、それぞれに実務担当者およびシステム担当者からなる作業グループを設置した。⑤の目録検索サービスに関してはレファレンスなど利用者と直接関わる部署の人間が中心となって構成されている。これら作業グループが業務分析から要求仕様の作成までを行い、実際のシステム作成にあたるメーカーと図書館側のシステム担当者がこの要求仕様をもとに基本設計から開発までを行う。平成2年8月段階で基本設計の第1案が提示されている。システムの稼働は平成3年4月からの予定である。

V. トータル化ということ

トータルネットワークシステムとはいかなるものなのか。言い換えれば、図書館をトータルネットワーク構築という考えに立って機械化すると何が期待されるのか。トータル化とネットワーク化をキーワードとしてその意味を考えたい。

トータル化とは、従来のように部分的に機械化するのではなく、選書から閲覧までの図書館業務を一連の業務として捉え、各業務間の連携を意識したシステム作りを目指すものである。それにはそれぞれの業務間に存在する垣根を取り除き、一つの図書館機能として最も合理的な流れを作ることが肝要である。政策面での業務体制の見直しは有効であるとは言うまでもないが、機械化という視点で見ると、複数の業務で重複して持っているデータをデータベースとして共有することがポイントになる。目録を例にとると、現在では、目録は目録担当者の手によって完成された後はじめて利用に供される。それは選書されてからかなりの時間的経過を要するのが実情である。機械化の当然の結果として、カード目録からオンライン目録への移行がある。そうになると目録作業のほとんどは、外部書誌データベース（学術情報センター、OCLC、書店データベースなど）からMARC（機械可読目録）を取り込んでそれに手を加えるという作業にとってかわる。MARCに手を加え

る作業は目録担当としての専門知識を要するものであっても、MARCの取り込みは比較的容易な作業である。そうなると、選書の段階でMARCを取り込んでしまえば、業務上の不要な帳票の発生を防げるし、また多少の不備はあっても一定の水準の目録を利用者に提供することが可能になる。このように各業務間でデータを共有する話になると業務間の垣根を取り払った一つの流れを考慮せざるを得なくなる。それは利用の便にも寄与することになる。ただ、トータル化は直接的に利用者サービスの向上に働き掛けるというよりは、図書館内部の業務の効率化を第一に考えている。これに対して次に述べるネットワーク化は利用者サービスの向上を主眼とするものと言える。

VI. ネットワーク化ということ

全塾レベルでのネットワーク化は、今までの慶應義塾図書館のサービスにはなかった考え方である。慶應にはキャンパスそれぞれに図書館があり、それぞれが独自の個性を以て動いている。ただ、組織的には図書館はキャンパスに付属するものではなく、「研究・教育情報センター」という一つの旗の下にある。したがって理屈の上での障壁はない。たとえば、湘南藤沢の学生が日吉キャンパスの図書館を利用したければ、それは日吉の学生と全く同等の権利を以て利用できる。しかし、図書館によって求められる働きが異なるため実際にはそれぞれが縦割りの関係の中で別個の図書館として存在してしまっている。三田・矢上・四谷はそれぞれの専門分野に対応し、日吉は新生を対象とした図書館となっている。湘南藤沢に至っては、キャンパス内ネットワークの思想の下、計算機資源提供機能と図書館機能の融合が求められている。図書館のこのようなあり方は長い歴史の中で形成されたもので、ある意味では理想的な体制なのかも知れない。ところが一方で湘南藤沢の総合政策学部のように、既成の特定分野に興味の範囲を限るのではなく、視点を広く持った研究が望まれるという傾向も見られる。実際に他キャンパスの図書館を使う利用者也数多くいる。今回目指しているネットワーク化により、図書館

間の横の関係が強化されることになる。つまり全塾的な見地から、図書館間の様々な局面での有機的な結合を実現しようとするものである。機械化という点でいうならば、図書館間で様々な情報を共有することが可能になる。その中で最も顕著な例は目録情報である。現在各図書館の目録で探せる資料はその図書館の所蔵資料のみであるが、目録が1つのデータベースとなり、オンライン目録ができれば、どの図書館にいても全塾のすべての図書館資料を探ることが可能になる。現在では三田地区の洋資料の一部がオンライン目録で提供されているが、全体としてはカード目録が主体である。目録サービスは利用者に直接関わる部分であるから、オンライン目録の開発は最重要視すべきだ、という点で開発チーム内の意見は一致している。

Ⅶ. オンライン目録の効用とその問題点

オンライン目録はカード目録ではできない多角的な資料情報検索を可能にする。これは利用者の図書館利用に際し、多くの可能性を提供するものとなろう。ただオンライン目録の利用には落とし穴がある。オンライン目録は確かに図書館の機械化の中では利用者に一番アピールしやすいものではあるが、その提供にはカード目録時代にはなかった配慮が必要である。カード目録では、利用者はタイトルなり著者名なりを正確に知らなければ検索できない。検索方法が限定されているがゆえに、利用者サービス全般における目録サービスの役割・位置づけというものが図書館の側で把握できている。ところがオンライン目録になって多角的な検索が可能になると、その役割・位置づけが把握しがたいものになる。具体的に言うと、オンライン目録では利用者が検索に際して検索語を入力するという形をとるが、利用者がどんな形でどんな検索語を入力しても何らかのヒットのある可能性が高い。が、それが検索結果としてどの程度妥当であるかは利用者が判断しなければならない。現在のカード目録でも利用者が検索結果の判断をしているには違いないが、それは特定のタイトルなり著者名なりがあったか否かの判断であ

る。したがって、その結果の評価も利用者が独自に下し得るものであった。ところがオンライン目録では検索方法そのものが多岐にわたる。まず適切な方法を選択し、次に適切な検索語を適切な組み合わせで入力しなければ、最終的に適切な検索をしたことにはならない。問題となるのは次のような場合である。適切な検索をすれば50件のヒットが得られるのに検索語の選択が不適切で5件のヒットしか得られなかった場合、利用者が不適切として判断してくれるであろうか。その5件で一応の満足をしてしまう利用者が多いのではないか。0件ならば検索のやり直しへと導くことができるが、たとえ1件であろうと何らかのヒットがあった時、それが妥当な検索結果であるかを図書館員不在の状況下で利用者の判断に委ねることになる。実際、ネットワーク化が進展すれば図書館の外から目録検索を行いたいという要求が出るだろうし、図書館員に聞く前にまずオンライン目録を引こうという利用者が多くなることが予想される。目録をオンライン化したという点に目を奪われずに、利用者サービスの一環としてオンライン目録をどのように位置づけるかを明確にしなければ、かえって利用者に不利益が与えかねない。この点については十分な議論が必要があると私は考える。また検索以前の問題としてオンライン化することによって、カード目録の持つ良さ、すなわちカード自体の見易さ、一覧し易さなどを失わざるを得ないことも認識すべきである。もちろん使い易いオンライン目録を目指すのは当然であるが、目録を単に見るのではなく「読む」利用者が存在することもけっして忘れてはならない。

Ⅷ. ネットワーク化に求められる付加価値

目録のオンライン化自体はある意味ではコンピュータを使ったことによる当然の結果である。今回の計画ではネットワーク化することによってどのキャンパスの図書館からでも全塾の資料情報を検索できる点が特筆されるべきである。目録情報の一元化によって慶應全地区の図書館を一つの図書館システムとみなせる基盤が得られることになる。自分がどのキャンパスにいようと常に全塾の

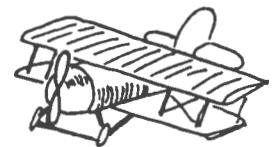
情報が得られるという、ソフト面での一元化である。そして次なる展開は物理的なハード面でどこまで一元化が実現するかである。検索はどこからでもできるが、実際の資料の入手はその図書館に行かないと駄目というのでは、ネットワーク化の意味も半減してしまう。日吉で三田の資料が検索できるなら、その資料を日吉で手にしたいと思うのが利用者の当然の心理であろう。また利用規則の面でもできる限り統一するのが望ましい。ネットワークを組めば当然、相互の利用の機会が増える。その時に、たとえば罰則で、ある図書館では延滞料をとり、別の図書館では貸出停止とするなどの違いがあると図書館側、利用者側双方にとって混乱を招くことになる。ただ、こういったハード面での一元化は機械化とは離れた政治的な問題もあるし、また一元化という点に囚われ過ぎると各図書館の個性を損なうことにもなりかねないので慎重に行うべきであろう。

IX. おわりに

以上が今回の機械化計画で実現しようとしている事柄であるが、図書館の全面的な機械化に関しては慶應は後進であり、大学図書館で既に成功している例は数多くある。が、それら機械化した図書館は例外なくその効果を満喫しているのか、というと必ずしもそうではないらしい。ある大学図書館ではシステムとしては立派なものができたが、実際の現場の事情に則したものにはなっておらず、そのシステムを使わず相変わらず手で仕事をしているという話を聞いた。慶應としては、システムを作ること自体を優先し過ぎて二の舞いになってはいけないと認識し、開発に際してシステム担当者は実務担当者の言うことを十分に受け止めるという姿勢をとっている。そうすればシステムが実際の業務で使いものにならないという最悪の事態は避けられるという判断である。しかし、現場の事情を反映させるというやり方が度を越すと業務がシステムに束縛され、身動きがとれなくなる恐れがある。機械化したことによって仕事が増えるなどいくらでも起こりうる現象である。機械化後の展開を考慮して適切なレベルで

の機械化を行う必要がある。

「コンピュータは道具である」とよく言われる。今回の機械化計画は、現在の問題解決と将来の発展のための道具としてシステムを用意するという基盤づくりの意味を持つ。道具である以上それをいかに使い、何をすることが重要である。実際にシステムを使う実務担当者のレベルで機械化の後に来るものは何かという点についての認識を持たねば、システムの規模が大きいだけにそれに振り回されることになりかねない。機械化をなされた図書館の図書館員に求められる資質は何かを真剣に考え、答えを出す時期に来ているのではないか。その答えを持たずに機械化したところで、状況が好転するとは到底思えない。そのためには、私個人の意見を言わせてもらえば、現在慶應義塾大学研究・教育情報センターが抱えている弱点である、構成員一人一人の視野の狭さ、それを補うべきセンター統括機能の欠如、各部署・地区レベルの既存業務形態へのこだわりなどの諸々の問題点を機械化計画と並行して克服していくことが、事の成否を占う上で重要であろう。後々、機械化をやらうとするどこかの図書館に慶應の二の舞いは踏まないようにしよう、などと言われたいためにも。



江戸時代のウォーターフロント

河合正朝

ウォーターフロントは、いまもっともトレンドな遊び場である。こんな言葉が、若い人たちのあいだで交わされているようである。近年盛んになりだした東京湾に接する地域の再開発にもなあって、風光明媚な、もとは漁師たちの棲みかであった海沿いの村が、国際金融情報の発信基地となり、アーバンリゾートの雰囲気をもつファッションナブルな街にと大きく変わろうとしている。海が秘めるロマンチックな響きや解放感、夢などが、若者の心をこの街にひきつけるのかもしれない。

今年度の秋に日吉で行われる予定の横浜市民講座でも、この変わりゆく地域の歴史や産業に焦点があてられ、わたくしも、その一端を担当することになったので、専門である美術史の立場から、これを考えてみることにした。

いま、わたくしたちに江戸の地を代表する美術は何かという問が与えられたなら、恐らくその大方は、「浮世絵」と答えるであろう。浮世絵とは、ごく簡単にいえば、憂き世、この楽しくも辛くもある浮き世の時世風俗を描き、江戸市民たちに共感をもって愛好された絵画のことである。だから実際に、浮世絵に描かれたところをみれば、江戸市民にとってかれらの心の憩う場所としたのが、どんな処であったかは容易にわかる筈である。それは、一に遊里や芝居などの二大悪所であり、もっとひろく人々に親しみ深い遊楽の場となっていたのは、じつは大川端、つまり、いまいうところのウォーターフロントであったといえる。

隅田川は、江戸文化の母である、といった先人がおり、浮世絵は、その流域に位置する下町に咲いたあだ花であるとも言われる。明和二年（1765）に多色摺木版画の錦絵を創始した鈴木春信や浮世絵の最

盛期に活躍した鳥居清長、喜多川歌麿、葛飾北斎、安藤広重ら五大浮世絵師の作品にも、大川端に集う人々の姿が、実に生き生きと活写されており、かれらが、いかにこの川に親しんでいたかを知ることが出来る。

そこでこころみに、塾情報センターの管理保管する故高橋誠一郎教授旧蔵の浮世絵版画のなかに、これをもとめてみれば、春信の「風俗四季哥仙・水無月」には、屋形船の行き交う両国辺りの景を背後に若衆と女が縁台近くに寄り添うさまが描かれ、清長の大判三枚続き「隅田川渡し船」では、さまざまな階層の人たちが浅草側から三囲神社のみえる向島へ渡ろうとしている。歌麿も、美人の背に大川の流れを写し、北斎の富嶽三十六景には、江戸日本橋、五百らかん寺さざむ堂、深川万年橋下、御厩川岸より両国橋夕陽見、東海道品川御殿山ノ不二などの図がある。浮世絵風景画家として名声の高い広重の代表作東海道五十三次之内では、日本橋・朝之景や品川・日之出がそれにあたるのであろうが、東都八景、東都名所、江戸名所、新撰江戸名所などのシリーズでも、しばしば隅田川の景をはさんでの人々の交歓のさまを詩情豊かに表現する。なかでも名所江戸百景の一図「大はしあたけの夕立」は、広重の傑作で、ゴッホが油絵に模したこともあってかあまりにも有名である。

しかし、特に興味を持ち、心を寄せるのは、葛飾北斎の名品「隅田川兩岸一覽」である。これは、隅田川を主題とした大本三冊、二十三図からなる狂歌絵本で、狂歌師の狂歌に応じて、高輪の暁鳥から吉原の終年まで、四季おりおりの風物を、東岸ぞいに下流から上流へと尋ねのぼりながら表わしている。北斎の、そこに登場する人物に対する克明な風俗描写やその構成力のすばらしさには、目を見張るばかりであり、ひとときわ華やかな色彩とともに、鑑賞者を全く飽きさせることがない。

この川は、そのほとりに住む人に生命を与え、文学や絵画や音楽を生み、さまざまな芸術を創り上げた。浮世絵は、いわばその証言者であり、これを見るにつけ、江戸時代の隅田川兩岸の賑わい振りを思わずにはいられないのである。

（文学部（日吉・美学）教授）

Differences between Japanese and American Academic Libraries

Mary F. Grosch

(Business/Economics Subject Specialist)
(Northern Illinois University Libraries)

Having worked at Keio University Library and Information Centers for almost one year now, I have had the chance to talk at length with several library staff members of Keio as well as to other Japanese librarians who I met while visiting other academic libraries in Japan. I have become aware of many differences that exist between academic libraries in the two countries and in this article I would like to explain some of these differences. I would also like to talk specifically about Keio University Library and its educational level of staff, its commitment to service and its training and continuing education program.

I would like to begin by discussing library education in the United States. The *American Library Directory 1989-90*¹⁾ lists 53 American universities with professional programs in librarianship that are accredited by the American Library Association (ALA). For almost all academic, special and public libraries in the United States, the graduate degree in librarianship, earned from one of these ALA accredited universities, is required for employment as a professional librarian. All but a few of the programs take one calendar year to complete. The program usually involves a few required or "core" courses in cataloging and classification, reference, collection development and administration. The student can then choose a

number of electives depending on his/her interests.

This library degree is considered important for the academic library director, also. In the United States, academic library directors are hired specifically for the job of director and have the title Director of Libraries, University Librarian or Dean of Libraries. American librarians prefer having a director who has not only the library degree, but also experience in academic libraries. They also prefer a director with a doctorate because it gives the director equal educational status and therefore, more credibility when dealing with the teaching faculty and the university administration.

There are also differences in the other academic library staff members education and job responsibilities. In Japanese universities, new staff is chiefly hired for "entry level" positions. Rarely, it seems, is someone with work experience hired from another academic library. Also, the staff member, though hired initially as library staff, may find him/herself transferred out of the library and into some other department of the university in the future. Finally, all staff members execute a variety of duties, both professional and clerical. In American academic libraries, there are three distinct "levels" of library staff and the responsibilities of these staff members differ greatly. *The ALA Glossary of Library and Information Science* defines the LIBRARIAN as "A person responsible for the administration of a library... The chief administrative officer of a library... A class of library personnel with professional responsibilities, including those of management, which require independent judgment, interpretation of rules of procedure, analysis of library problems, and

formulation of original and creative solutions, normally utilizing knowledge of library and information science represented by a master's degree...²⁾ PARAPROFESSIONAL PERSONNEL is defined as "...library employees without professional certification or entrance-level educational requirements who are assigned supportive responsibilities at a high level and commonly perform their duties with some supervision by a professional staff member..."³⁾ Paraprofessional employees are increasingly found in the technical service area. The LIBRARY CLERK is "...library personnel with general clerical and secretarial proficiencies who perform tasks related to library operations in strict accordance with established rules and procedures."⁴⁾

In American academic libraries, librarians usually specialize in one aspect of librarianship, such as cataloging or reference, or have one subject specialty and become, for example, a Music or Medical librarian. Within the academic library, rarely will the cataloger be transferred to reference or vice versa. Librarians professional responsibilities include administration and management, collection development, original cataloging, reference, library instruction and liaison with teaching faculty.

Many academic librarians have either academic or faculty status.⁵⁾ In both cases, librarians are recognized by the college or university as being part of the instructional and research staff, but those with faculty status are given "...ranks and titles identical to those of faculty, and commensurate benefits, privileges, rights, and responsibilities" while those with academic rank normally are not.⁶⁾

There is also a widespread presence of

the subject specialist in American academic libraries. These subject specialists are, for the most part, professional librarians, and many have a second masters degree or a doctorate in their field of specialization. The typical subject specialist is responsible for collection development, reference, library instruction and liaison with faculty.

As I said, collection development is one of the responsibilities of the professional librarian in American academic libraries. Librarians have primary responsibility for collection development rather than teaching faculty members. However, faculty are not excluded from the book selection process. The amount of responsibility for book selection between librarians and teaching faculty varies from university to university.

Another part of collection development that is very different in the United States is the approval plan. The control of what books are received on this plan in Japanese libraries seems to be held by the book dealers. In the U.S., the vendor and the librarians work closely to develop a "profile" under which the books will be sent. This profile is composed of several elements. First are the non-subject parameters or modifiers. These parameters include academic and readership levels of difficulty, country of origin, textual format of the books, language of the publication, geographic and time limitations, price, etc. The major part of the profile is the subject thesaurus. This profile needs to be very specific and outline as closely as possible the particular needs of the library. It also is reviewed at regular intervals and revised if necessary.

The reference function is another important responsibility of the professional librarian. At

Northern Illinois University (NIU) Libraries in an average week in 1989, 3,316 reference questions were answered. Besides answering reference questions, the reference librarian also develops subject bibliographies to help the library user find information in the various subject areas.

The last major responsibility of professional librarians that I will discuss is library instruction. In American academic libraries, there are highly structured library instruction programs that are an essential part of reference. There is an extensive library instruction program at NIU Libraries, part of which is integral to the Freshman English and Communications classes and introduces incoming Freshman to the library and its resources. Subject specialists are involved with library instruction for upper level undergraduate or graduate students.

Recently, library automation has had an impact on library instruction. Many academic libraries already have or are planning to have online catalog. With the addition of these catalogs, it is necessary to instruct the library users on their use. CD-ROM technology, which is fairly new to American academic libraries, is impacting on both library instruction and reference services. Librarians are struggling to determine the best way to instruct users on the use of CD-ROM products.

Library cooperation is extensive in American libraries with many automated cooperative networks of some kind existing locally or regionally. These networks are used for shared cataloging, interlibrary lending, reciprocal borrowing and union catalogs. These automated networks facilitate the extensive interlibrary loan service available in American libraries. Many of these networks are multi-type, that

is, interlibrary lending takes place between all types of libraries: public, school, special and academic. NIU Libraries is a member of LCS (Library Computer System), a circulation and interlibrary loan (ILL) system that currently has 34 university and college members. Member libraries can borrow books from other member libraries through this system. Library vans travel between these libraries regularly in order to deliver these materials. All members also have reciprocal borrowing privileges. In 1989 alone, NIU Libraries lent 47,838 photocopies and other materials to other libraries. Almost 51% of these ILL transactions were placed through the LCS network. NIU Libraries borrowed 34,755 items, with almost 65% of these placed through LCS.⁷⁾

There are other differences I have noticed in library service. Almost all Japanese academic libraries have a classified card catalog for the library user, while in American libraries, the alphabetic subject card catalog is the norm. Access to academic libraries in Japan is often restricted to faculty and students, but in the U.S., many libraries, especially state-supported university libraries, are open to anyone who wishes to enter and use the collection. However, some services, such as ILL, may not be available to them. Books bought with the library budget are housed in the library with access to all. The reserve book system, which is common in academic libraries in the United States, is rare in Japan. This system allows for restricted access to sources which may be scarce but needed by a large number of students. For example, multiple copies of periodical articles can be made available if a large number of students will need access to them.

Though there are many differences in policy and services in academic libraries in our two countries, there are challenges which all academic libraries face. These include the continuing development of online catalogs, automated book acquisition and serials checkin systems and the introduction of CD-ROM technology to the library. Common problems include staff shortages and overworked library staff members, the shortage of space that seems to face even the newest of libraries, the soaring cost of serials and the conservation and preservation of materials.

Having talked to many Japanese librarians and visited several academic libraries in Japan, I have become aware of the fact that Keio University Library is indeed exceptional. I have been impressed by the number of library staff members here who have extensive library training and are committed to service to the library user. The number of reference questions that are answered at the main counter alone is far above the average number answered at other private and national universities of similar size. Though statistics are not kept at the service counters of serials section, the number of students and faculty members who approach the desks for help is also very high. I think this is not only a reflection on the quality of the staff and their commitment to service, but also a reflection on the quality of the Keio University faculty and student body.

Another aspect of Keio Library is their excellent formalized training and continuing education programs for staff members. This academic year, 7 seminars will be held for library staff members. Also, two to three computer training courses are provided for

new library staff members through the KULAS (Keio University Library Automation System) training program. Some staff members have been able to attend master's courses in the Graduate Program of Library and Information Science, and for the past several years, a librarian from Keio has had the opportunity to work in an academic library in the United States. I don't know of any library in the United States that has such an extensive program.

Working in a Japanese academic library for the past year, especially in one as fine as Keio University Library with its excellent and helpful staff, has been a rewarding experience for me both professionally and personally. I would encourage any American librarian who has the opportunity to participate in such an exchange program to do so.

Notes

1. *American Library Directory 1989-90*, 42 ed. (Chicago: American Library Association, 1989), 2177-95.
2. *The ALA Glossary of Library and Information Science*, (Chicago: American Library Association, 1983), 130.
3. *Ibid.*, 164.
4. *Ibid.*, 131.
5. DeBoer, Kee and Wendy Culotta, "The Academic Librarian and Faculty Status in the 1980s: A Survey of the Literature," *College & Research Libraries* 48, no. 3 (May 1987), 220.
6. *ALA Glossary*, 1, 90.
7. Interlibrary loan statistics taken from unpublished IPEDS (Integrated Postsecondary Education Data System) Libraries statistics. Cumulated and prepared by CODSULI (Conference of Directors of State University Librarians in Illinois): LCS percentages taken from internal reports of Northern Illinois University Libraries.

同じ大学図書館，違う大学

図書館：UCLA と三田図書館

松本和子

(湘南藤沢メディアセンター係主任)

I. 始めに

1989年8月から10ヶ月、UCLAのオリエンタルライブラリーで訪問図書館員として研修を受ける機会を得た。研修はオンエンタルライブラリーでのOCLCのCJKシステムを使っての日本語図書目録作成を中心に行われた。全く目録の経験のない私にとっては、日本語図書をAACR2を使って目録を作成し、LCのSubject Headings, Classificationを使って分類や請求記号を与える作業は大変だったが面白い経験だった。それにも増して今回の研修で得られた最も貴重な経験は、メインライブラリーのカタログインフォメーションデスクとレファレンスカウンターで研修生として実際に利用者と接する事が出来たことである。同じ大学図書館でも日本とアメリカ、そして私立大学と公立大学という設定の違い所で自分の知識、経験を試せたというのは、生涯忘れられない体験だった。そんな中で、こんな所が違う、同じだ、面白い、と感じたことを幾つか述べてみたい。

II. キャンパスポリス・館内規則・利用者対応マニュアル

UCLAのメインライブラリーであるUniversity Research Library (以下URLと略)の入口にはCampus Policeと書かれたTシャツを着た学生が座っている。UCLAは公立大学で地域住民にも図書館を公開しているため、いろいろな人達がやって来る。彼の役目は不審な人間が入ってこないかどうかチェックすることだ。URLでは数年前に館内でレイプがあったこともあり、入口

でのチェックだけではなくキャンパスポリスが常時館内を巡回している。また夜遅くまで図書館で勉強したあとなど一人でキャンパス内を歩くのは危険なので、2人のポリスが付き添って駐車場等まで送ってくれるエスコートサービスもある。安全に対する意識の違いが日本には無いシステムを生み出しているのだ。

キャンパスポリスは、キャンパスの安全と快適な生活を守ることを目的にしているので、犯罪だけではなく、キャンパス内のルールを守る番人でもある。URLの入口に座った学生も、館内を巡回している学生も、館内ルール違反者を見つけると注意をする。コーラの入った紙コップを館内に持ち込もうとする利用者には「入口の外で飲み干すか、捨ててから入館してくれ。」という具合。館員も目についた利用者に注意をするが、彼らがいるので三田のように時間を決めて注意して歩くといった煩わしい仕事はしなくても良い。自分の仕事に専念できる。

UCLAには、利用者との応対、緊急時の対応などをまとめた“Patron Relation Manual”がある。これによると、館内での飲食、昼寝？騒音？（おしゃべり）はカリフォルニア州法に違反するので刑事事件として起訴することもできるとか、クレームの処理の仕方、問題のある利用者にどういうふうに注意をするか、急病人の出た場合、犯罪が発生した時の対処、館員による逮捕、警察への報告等々、法律、条例を参照しながら細かに記されている。このマニュアルは各部署に備えつけられ、学生アシスタントを含めた全員と、キャンパスポリスも目を通すことになっている。更に年に一度ワークショップを開き、内容の確認をおこなう。Lawsuit社会と言われるアメリカ、館内規則一つにも注意の払い方が違う。下手な対応をすれば逆にこちらが起訴されてしまうからだ。

III. レファレンス・サービス

レファレンス・カウンターにできる長い列というのも三田と違うところだ。URLレファレンス



レファレンス・カウンター



カタログインフォメーションデスク

ライブラリアンの1時間当たりの接客件数は14人である。次から次と利用者がやってくるといった状況だ。中にはコピー機ほどことか、この請求記号は何処といった簡単な場所に関する質問も多い。その簡単な質問をするにも皆辛抱強く自分の番がくるのを待っている。そういえば、図書館以外でも沢山列を作っている風景を見た。国民性の違いだろうか？ また URL のレファレンスでは昼間忙しい時間帯(11:00-19:00)は外部からの電話の問い合わせを受け付けない。直接カウンターにやってきた利用者を優先させるためだ。日米のレファレンス件数の違いは案外こんなところに原因があるのかもしれない。

カタログインフォメーションデスクでは、昼間の間も電話での問い合わせを受け付ける。このデスクは、テクニカルサービス部門の図書館員やライブラリアシスタントと呼ばれる、日本で言えば司書資格のない図書館系事務職員も含めた有志で運営されている。10:00-16:00の間、一時間交代でボランティアが立つ。ボランティアのノルマはだいたい週2回。レファレンスカウンターがOPACと離れた位置にあるため、本来OPACの利用案内を行うために設置されたものだが、1時間に電話を10本、利用者を14-15人と、こちらもかなり忙しい。私も何度かこのデスクに出たが、電話での問い合わせは個人からのものでも書誌事項はかなりきちんとしていてびっくりした。そし

てOPACのおかげで受話器を持ったままキーインすれば所蔵調査ができる。三田ではメモを取ってカード目録を見に行き、貸出を調べ、と一件にかなり時間が掛かっていたのが嘘のようで、これなら1時間に一人で10件の問い合わせにも答えられるなどOPACの利点に改めて感心させられた。

学生の質問の内容という点では、三田もUCLAもあまり差はない。雑誌新聞記事の探し方、件名目録の使い方、引用文献の読み方など、学术论文に慣れていない学部生のレベルではやはり戸惑うことが多いようだ。またテーマをどう絞っていいのか、どういうふうに調べていいのか途方に暮れている学生もいる。UCLAでは図書館の利用教育にかなり力をいれており、様々なプログラムや授業への協力がなされていた。そのためか大学院生以上の研究者レベルでは、三田以上に図書館を使いこなしている。但し、中には自分では全然図書館を利用せずに、秘書や大学院生を使って調査をさせているので、図書館のことは何も知らないという教授もいる。日本と同じ。

レファレンスサービスの中で、ILLが州の法律により、全て無料で利用者に提供されていたのが印象に残っている。

IV. 図書館員

アメリカで図書館員になるためには、M. L. S. (Master of Library Science) を取得しなければ

ならない。一旦職を得ても、毎年査定を受けなければいけない。論文を書いたり、図書館以外での学会、社会活動にも精を出さなければ、評価されず昇給しない。そして、一定期間内で昇格しないと首になるという就業規則まである。図書館関係の雑誌の発行数の多いのは、皆が投稿の場を必要としているためではないだろうかなどと考えてしまう。UCLAの図書館員組合はこの年に一度の査定のために、説明会、マニュアルの作成など組合員のバックアップも積極的に行っている。半分永久就職という日本の大学図書館とは事情が違う。

図書館で働く者への待遇の中で非常に羨ましく感じたのは、就業時間中に研修の時間を取れるということである。週30時間以上働いた場合は、その内の1割の時間を上司の許可を得て、自己研修に使えるという制度だ。これはUCLAでの授業の聴講、単位の取得を目的とするもので、例えば、働きながらライブラリースクールに通って、M.L.S.を取得して給料アップを計ることができる。尚単位を取得するには授業料は払わなければ

ならないが、かなり割引される。生涯教育と実益を兼ねた良い制度だと思う。

よく言われることだが、UCLAは図書館員の質、数ともに充実している。機械化により人件費が削減される、図書館員のポストが事務職に置き換えられるなど冬の時代を迎えているとはいうが、レファレンス部門を見ただけでも層の厚さ、学問的背景は、溜め息がでるほど違う。

V. 終わりに

私がUCLAに滞在中に三田から届いた手紙には「忙しい」「大変だ」という文字のない手紙はなかった。三田の忙しさは全塾の機械化に始まったことではない。適切な人員配置なしに次々とやってくるプロジェクト、そして専門分野と言えないいわゆる事務処理に多くの時間を取られ、専門性を生かしたり、向上させる場を持つことが出来ない職場が現在の三田だと思う。とりとめのない報告になってしまったが、海外研修を含めた研修のありかた、そして機械化だけでない業務の効率化を考えていく参考になれば幸いである。

研究・教育情報センタースタッフの KULIC 研究会

第5回（平成元年10月16日

於：日吉情報センター）

発表者 酒井明夫「UCLA図書館における実務研修報告」

吉川智江「IFLAパリ大会及び英・仏・独大学図書館ならびに諸情報センター視察報告」

第6回（平成元年12月22日

於：三田情報センター）

発表者 原田 悟，金子康樹
「湘南藤沢メディアセンターの構想について」

第7回（平成2年5月28日

於：三田情報センター）

発表者 天野善雄「医学情報の最近の動向」

第8回（平成2年6月18日

於：三田情報センター）

発表者 Mary F. Grosch「Evaluative report on ABI/INFORM and BUSINESS PERIODICALS ONDISC」

第9回（平成2年7月19日

於：三田情報センター）

発表者 松本和子「UCLAのBIとレファレンスサービス」

数理科学科図書室について

石上 貴子

理工学部の数理科学科図書室に勤務して一年が過ぎた。矢上キャンパスの中でも奥まったところにある小さな図書室を一人で担当している。「数理科学科図書室」はその名の通り、数学の専門図書室である。私の仕事は、図書の購入・装備から雑誌の受入、そして予算の管理に至るまで、図書館業務のすべてをやっている。数学が大の苦手である私に数学図書室の仕事が務まるのだろうか？ そんな不安を抱えてのスタートであったが、一年たつてようやく仕事にも慣れ、数理科学科の素顔も見えてきた、という感じである。

数理科学科図書室は昭和50年（1975）に現在の研究棟の完成と同時に開室した。毎年数理科学科内の予算で図書及び雑誌を購入しており、理工学情報センターからは完全に独立して運営されている。また、日本数学会の学会誌との交換先である「日本数学会雑誌交換事務局」としての役割も果たしている。規模としては、平成2年4月現在で、単行書8,400冊、雑誌300タイトルとなっている。これらの資料は日本十進分類表によらず、数理科学科独自の分類に基づいて配架されている。利用時間は、午前9時30分から午後5時30分で、午後4時30分からは学生アルバイトによって管理されている。利用対象者が、学科内の教員・学生に限られているせいか、とても和やかな雰囲気、静粛であるべき図書室が談話室と化してしまうこともしばしばある。こんな状況であるから、貸出期間や冊数制限もあってないようなもので、私の方も見て見ぬふりをしている。

教員の研究活動に伴い、国内外の研究者を招いての談話会が行われており、それらをまとめて、「Keio Mathematical Seminar Reports」を発行し

ていたが、1983年より現在のプレプリントシリーズの「Research Reports」にタイトルを変えて継続中である。また講究録として、「Seminar on Mathematical Sciences」も発行し、こちらの方は書店でも販売されており好評なようである。さらに、他大学の数学教室と提携して、「Tokyo Journal of Mathematics」が発行されて、高い評価を得ている。

上記のシリーズを通して他大学の数学教室との交流も活発で、図書室として順調に成長していると言えるだろう。

しかし、先の蔵書数を見てもわかるように、やっと図書室としてのスタート地点に立つことができたような状態である。図書室と本当に呼べるまで成長するには時間がかかる。もうここでよし、というゴールはないし、たとえ一つの目標を定めたにせよ、そこに到達した時には、また、別の目標が見えてくる。図書館員の仕事とは、一言で言えば、利用者と資料を結びつけることに帰着する。そのためには、必要な資料や情報が集まり、いつでも利用できるようになっていなければならない。また、図書室としての機能を高めるためには、図書館員は利用者についてよく理解するとともに、当然資料についての深い知識が要請される。図書館員として未熟な私には、利用者の要求に応える資料にはどんなものがあり、どの資料が正確であるのか、ということに答えられないことがしばしばある。それでは様々な情報を求めてやってくる多くの利用者に接する図書室としては十分と言えない。

図書室作りは、図書室を知り、図書室について学ぶところから始まる。私も日常の仕事を通して一冊でも多く、図書室の資料に精通するよう心がけていきたいと思っている。これからも試行錯誤の繰り返しが続くと思うが、より充実した図書室の実現のために努力していきたい。

（理工学情報センター資料サービス担当）

明治期資料のマイクロ化について

加藤 絢子

(早稲田大学図書館
明治期資料マイクロ化事業室)

I. 経 過

早稲田大学図書館は、1987年6月、明治期資料マイクロ化事業室を発足させた。紙の劣化で消えつつある明治時代の出版物を残し、かつ明治期の出版物の全貌を明らかにしてゆくことを目標に、明治期の全出版物をマイクロフィッシュ化してゆく構想である。

明治期の全出版物のマイクロ化ということは、当然のことながら、早稲田大学図書館一館の蔵書で足りるはずが無い。そこで国立国会図書館を始め全国の図書館や資料室へ趣意書を送付し、この仕事の意義を明らかにし、資料提供の協力をお願いした。

1年間の準備期間を経て、1988年5月「文学・言語篇」第1ユニットが完成した。1ユニットはマイクロフィッシュにして約500枚、250頁の本で約170冊分に相当する。1988年度1～6ユニット、1989年度7～15ユニット、そして1990年度の第16ユニットに慶應義塾大学の三田文学ライブラリーを収録し念願の他機関所蔵ユニットが誕生した。慶應義塾大学の御協力により、明治期刊行物集成の全国への広がりへの第一歩が踏み出せたことは、大変有難いことである。

II. マイクロ化作業内容

1. 明治期出版物仮総合目録の作成

明治期出版物だけの所蔵リストを持っている図書館は、きわめて少数である。早稲田大学図書館も同様にリストは無かった。資料をマイクロ化してゆく場合、どんな資料を持っているのかを知ることが、まず始めに必要である。そこで、図書原簿及び事務用基本カードを基にして、明治時代に

出版された本のカードをピックアップし、書名順に配列した。現在、早稲田大学図書館、演劇博物館、慶應義塾大学図書館、神奈川県立図書館、天理大学図書館、カリフォルニア大学バークレー校東アジア図書館所蔵の明治期出版物のなかの文学言語関係仮総合目録ができつつあり、これに国立国会図書館の明治期刊行物目録を参照しながら調査を進めている。いろいろな図書館のカードが集まってくると、各図書館における文学言語分野の概念がまちまちで、特に明治時代については文学を大変広い範囲に考えている図書館と、そうでない図書館があり、文学の範囲をどのあたりに限定するのが良いか頭を悩ませている。本事業室顧問の紅野敏郎先生に御相談しつつ作業を進めている。

2. 現物調査および異版本の調査

現物調査とは、書庫から借り出した本の汚れ、破損、落丁、乱丁、書き込み等を調べ、その本がマイクロ化に適しているかどうかを判断する仕事である。異版本を所蔵している場合は、1冊づつ内容に変更があるかどうかを調べてゆく。ページ数、挿絵の数や位置、活字の形や大きさ、紙質やインクの色、正誤表をもとに誤字の訂正の有無等をチェックしてゆく。これらの調査がその本をマイクロフィッシュに撮るかどうかの判断の決め手となるので慎重に行う必要がある。明治時代の出版物は改訂してあっても無くても、2度目、3度目に印刷した場合、2版(再版)、3版という表示がしてある。現在使われている「刷」という表示はまだ見たことが無い。それ故、数多く版がある本の場合は慎重に調べることが大切である。表1のリストを見ていただくと、同書名が並んでいる場合「略」と記してあるものと無いものがある。これは「略」としてないものは内容が前の版から改訂してあるので全体をマイクロフィッシュに撮ってあるという意味であり、「略」とあるものは、前の版と変わらないので本文は略してタイトルページと奥付けおよび広告ページだけを撮影したという意味である。こうして撮っておけ

表1 明治期刊行物業成
第16ユニット収録書目(抜粋)

| 番号 | 書名 | 著者名 | 刊行年 明治 | 枚数 |
|-------|-----------------|--------|-----------|----|
| 01966 | 閑話集 | 矢野龍溪 | 39 | 3 |
| 01967 | 不必要 | 矢野龍溪 | 40 | 3 |
| 01968 | 龍溪隨筆 | 矢野文雄 | 44 | 3 |
| 01969 | 相聞 | 與謝野寛 | 43 | 4 |
| 01970 | 世捨人 | スティブソン | 36 | 3 |
| 01971 | 西詞餘情 | 戸川秋骨 | 40 | 2 |
| 01972 | 西詞餘情 | 戸川秋骨 | 41 | 1 |
| 01973 | 歐米紀遊二萬三千哩(落丁あり) | 戸川秋骨 | 41 | 6 |
| 01974 | 獵人日記 | ツルゲーネフ | 42 | 9 |
| 01975 | 獵人日記(略1974) | ツルゲーネフ | 42 | 1 |
| 01976 | 時代私観 | 戸川秋骨 | 41 | 4 |

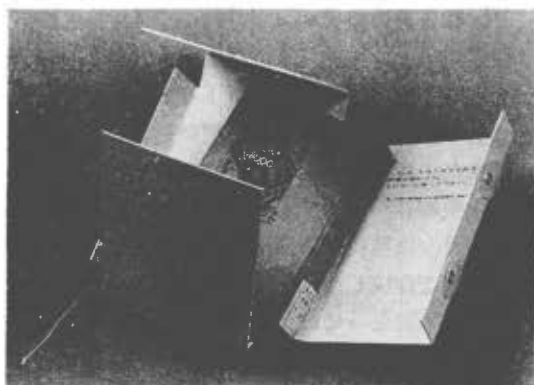
ば当時その本がどの位読まれ版を重ねたのか、また著者がどのような思い入れで訂正を加筆したか、どの出版社はどのような丁寧な仕事をしたのか……等がわかるし、出版広告ページをフィルムに残しておくことによって今では見ることの出来ない本も発見できて興味深い。

この度マイクロ化がなされた三田文学ライブラリーは、慶應義塾大学に関係ある作家の著作を、初版、原装のままという方針によって収集、保存されてきた特別本のコレクションである。これらのあるものは箱に入ったまま、あるものはバラフィン紙に包まれたまま、またあるものは出版広告が挟み込まれたまま、大事に保存されてきている。早稲田大学所蔵本とかなり重複していたが原装、美本ということで、すべて三田文学ライブラリー本を使用した。第16ユニット168点の内、9点は早大所蔵本と合せた形で、3点は同ライブラリー未所蔵のため早大本を補充した形で加えてある。三田文学ライブラリー本中の「歐米紀遊二萬三千哩」戸川秋骨著 服部書店 明治41年刊(マイクロ No. 1973)は、リストに注記したように残念ながら4頁分落丁があった。国立国会図書館の本を借用して補おうと依頼したところ、表紙中身の部分欠落ありということで使用できず、まだ完全本は見つかっていない。カリフォルニア大

学パークレー校の村上文庫には所蔵しているので、秋以降、同校所蔵本のマイクロ化がスタートすれば、完全本を手にすることができる。なお、同本は平成元年5月ゆまに書房より「明治欧米見聞録集成」第29巻として復刻されたので他の本と違い、少し気は楽である。

3. 本のクリーニングと保存箱

長い間書庫におかれた本は、ゴミや埃で、大変汚れている。利用者も少なく、大事にしまっているものほど汚れが激しい。そして紙が硬く、一見した外形は美本と見えても、開いてみるとボキッと折れそうな本に出会ったりする。利用者の多いものは、本に風も通り、ゴミや埃が払われるためか、かえって紙の劣化は進んでいない。当室では自館の本も他館から借用した本も、マイクロ撮影する前には、1ページずつ刷毛で埃を払いクリーニングをしている。この時に落丁や乱丁が見つかることが多い。汚い書き込みは消しておく。大変手間のかかる作業であるが、フィルムの鮮明度も増し、今後の本の保存にも良いと確信して、作業を続けている。縦じ釘が錆びてボロボロになり、紙の部分まで茶色に変色しているような時は、釘を抜き糸で軽く縦じておく。現在の姿のままを残すことを大前提に、決して大幅な補修は行わないように心掛けている。釘できっちりと止まっている開きの悪い本(再製本した本)や5cm以上の厚さの百科事典のような本は、あらかじめ縦を切って撮影し再製本する。マイクロ化がなされた本は保存箱(次頁写真参照)に入れて書庫に戻す。保存箱はCAP編集長の木部徹氏の御指導によるもので、箱形・バインダー形の2種類をクリーム色のボード(弱アルカリ性、pH8.5、厚さ1mm、防カビ処理済)を使用して作っている。一冊一冊手作り作業なので大変手間がかかるが、保存方法が確立し次のステップへと行動が起こせる時期まで、本を埃から守り、酸化を少しでも遅らせ、本の寿命が長らえるように念じつつ箱を作っている。箱の背に書名、フィッシュ No.、請求番号等を記入し、フィルムと連動させている。三田文学ライブ



保 存 箱

ラリー本についても、同館の了解を得て、覆っていたパラフィン紙をはずし、保存箱に入れてお返しした。古書店等ではパラフィン紙をかけてある本も多いが、パラフィン紙は製法上酸の強い紙なのでカバーには不向きである。お借りした何冊かは、撮影時に多少痛んだものもあったが、製本屋さんに来室をたのみ、原装を損ねずに元の通りにと無理な注文をして、当室で修理していただいた。

明治を残そうというこの仕事は、多くの図書館の協力を得て初めて行えることで、一館でも協力館が増えこの仕事に共に加わって下さると念願している。

三田図書館・情報学会 月例研究会

第60回（平成2年1月20日）

「大学図書館における書庫管理の諸問題」

発表者 渡部満彦（慶應義塾大学理工学情報センター副所長）

第61回（平成2年3月31日）

「MEMEX の概念に基づく研究者用情報蓄積・検索システムの総合的研究」

発表者 村主朋英，武者小路澄子，岸田和明（慶應義塾大学大学院）

第62回（平成2年6月30日）

「日米大学図書館の相違について」

発表者 Mary F. Grosch (Northern Illinois University Library)

第63回（平成2年9月22日）

「学術情報の流通機関としての書店の役割」

発表者 高井昌史（紀伊國屋書店情報事業

本部情報製作部部长）

第64回（平成3年1月26日予定）

「図書館システム構築における電算機メーカーの役割」

発表者 浅田 格（ファコム・ハイタック株式会社）

第65回（平成3年3月16日予定）

内容未定

これらの研究会は、非会員にも公開している。また、年刊の機関誌 Library and Information Science は、個人会費（年額¥3,000）、機関会費（年額¥5,000）を支払った会員に送付される。学会への入会、機関誌等に関する問い合わせは、慶應義塾大学図書館・情報学科事務室（Tel. 03-453-4511 内線 3147）で受け付けている。

医学情報センターの将来計画

——将来計画委員会報告をもとに——

天野善雄

(医学情報センター副所長代理)

I. はじめに

医学情報センターは、昭和12年10月に、北里記念医学図書館として設立された。既に50年余の歳月を経ていることになる。昭和62年10月に、50周年記念行事が挙行されたことは、我々の記憶に新しいところである。この半世紀の間に、医学情報分野が驚異的な発展を遂げたことは、今更論をまたない。それは、情報量の爆発的な増大、情報処理技術の急速な進展などとあいまって、医学情報センターの運営に色々な影響を与えてきた。特に、情報量の増大は、施設の狭隘さに拍車をかけることとなり、閲覧座席を犠牲にして書架を設置したり、蔵書の一部を外部に預託したり、書庫内通路に蔵書を床置きしたりといった、対症療法的な手段を講じて、その場その場を切り抜けざるを得ないような結果を招いた。このような状況を憂慮し、むしろ長期的な展望を持つことによって、将来の医学情報センターのあるべき姿を明確にしておくことが、結局は現状を打破していくことにつながるのではないかとの立場から、昭和63年8月に、医学情報センター協議会の了承のもとに、医学情報センター将来計画委員会(委員長 横山哲朗所長)が発足した。本委員会はその後回数を重ね、平成元年9月に中間報告書を発表し、塾内関係者に配布した。中間報告書とはいえ、同委員会としての最終報告書に相当するものである。そこで、本報告書の概要を紹介することによって、医学情報センターの現状及び将来の姿をできるだけ明確にし、合わせて今後の医学情報センターの取るべき対応について付言したい。

II. 報告書の概要

医学情報センター将来計画委員会(以下単に委員会と略す)は、横山所長以下6名の医学部教員と2名の医学情報センター管理職員とで編成された。また、各種データの作成や調査には、同センター中堅職員が協力するという形式で進められた。委員会は前後4回開催され、発足1年後に中間報告書を作成した。中間報告書(以下単に報告書と略す)となっはいるが、委員会としての実質的な最終報告書に相当するものである。報告書を引用すると、“敢えてこれを中間報告書としたのは、この内容が塾当局、研究・教育情報センターならびに医学部当局の検討を経て、その規模が具体的に示された上で、改めて最終案を検討すべきと考えたからである。”即ち、最終報告書は、医学情報センターの新築計画が義塾で本決定をみた後に作成されるべきものとしたわけである。

報告書は、先ず医学情報センターの蔵書が書庫収容能力を上回ったために起こっている様々な現象に触れている。利用可能床面積が著しく制約を受けているため、視聴覚資料の整備や機械化への取り組みといったサービス面にも影響を与えていると指摘している。その上で報告書は、医学情報の増大化現象を、資料の物理的側面から経年的に分析することを試みている。“最近の医学雑誌及び単行本の経年増加傾向を実測により調査し、更に現状分析の結果に基づき、今後30年間の蔵書量の年次増加を定量的に予測して書庫の必要量を推計”している。そして“もし今後の図書購入をこのまま継続する場合、蔵書量は急激に増加し、30年後には、現在の蔵書容量の3.5倍を必要とするようになる。もし蔵書容量が現状のままであるならば、30年後には書庫内には、僅かに7年分の医学雑誌を保管出来るに過ぎなくなると予測”している。また、“過去の医学雑誌の利用状況をコピー依頼伝票から調査したところ、30年前までの資料が頻繁に利用されていることが明らかになった。”と報告している。以上のような現状分析と将来予測に基づき、報告書は今後の対応策とし

て、以下の5項目について提案を行っている。即ち、i) 蔵書の保管について ii) 閲覧施設について iii) 蔵書管理・情報検索のコンピュータ化について iv) 視聴覚資料の整備とそれらの利用のための施設の充実 v) その他 である。

蔵書の保管について報告書は、以下のような提案をしている。即ち、“蔵書のすべてを無期限に書庫に保存することは不可能である。”従って、“利用頻度の高い刊行後30年間は原則として現物を書庫に保存し”それ以前に出版された蔵書については、“マイクロ化し、これを永久保存することとし、原本を廃棄する方向で検討”してはどうか。“場合によっては、このマイクロフィルムをマスターとして、光ディスクなどの媒体を採用”することも考慮してはどうか。また、“廃棄処分とする原本の選択については十分慎重に方法を考え”例えば、“図版を必要とする形態学の資料など原本を確保する必要があるものについては、十分な配慮が望ましい。”などとしている。マイクロ化の経費についても、できるだけ低く抑えるため、“市販のマイクロフィルムの活用”や“他の大学・研究機関との提携”などを図るべきであるとしている。“いわゆる図書館として、古い資料を処分することは、まことに恥じるべきことである。”という強い認識を持ちつつも、敢えてこうした方法を取らざるを得ない、医学情報センターの苦しい現状が、報告書の中には随所に見受けられる。次に閲覧施設について報告書は、従来の施設機能に加えて、“個室ブースを作り、その一部には情報検索用の端末としてのパソコン及びワープロを設置する”必要があるとしている。また、“学生の自主学習用のセミナールームを設置する”必要があることも指摘している。このことは、医学部が平成元年度より自主学習方式を採用したこととも関連して、いわゆる教育支援体制の拡充という観点からも重要なことと思われる。更に報告書は、蔵書管理・情報検索のコンピュータ化について、内外の情報検索機能の拡充のみならず、“医学情報センターをキーステーションとして、

キャンパス内の情報ネットワークを構築し、各研究室から学内外のデータベースを利用できる体制を確立する必要がある。”としている。この発想は、現在米国の主要な医科大学図書館で開発が進められている、医科大学内外の研究、教育、診療及び経営の各側面で必要とされる、あらゆる学術情報資源を、図書館が中心になって一元的に管理し、これを提供しようという、統合型学術情報管理システム(Integrated Academic Information Management System=IAIMS)の概念と共通するものであり、それだけに注目に値する記述であると言えよう。また、報告書は、“視聴覚資料を強力に整備し、視聴覚資料の制作のための施設、ならびにこれらを利用するための施設の充実を図るべきである。”と説いている。湘南藤沢地区のメディア・センターを例示するまでもなく、情報を多様なメディアとしてとらえようとするのが最近の大きな潮流であることから考えてみても、視聴覚資料、更には標本類等は、医学分野の重要な情報源とみなされるものであろう。最後に報告書は、医学情報センターの将来計画と密接な関わりを持っているが、本委員会とは別途検討されるべき課題として、北里講堂の扱い、「慶應医学」、Keio Journal of Medicine 編集室などとの関係、及び(財)国際医学情報センターとの関係等を挙げている。

以上のような提案を前提に、報告書は、当面実施できる対応策として、a) 所蔵資料のデータベースの作成、b) マイクロフィルムの購入・作成、c) 利用者のアイデンティフィケーションのためのIDカード利用、d) 図書資料利用状況の把握、e) 古資料の取扱方法等を提示している。

報告書は巻末に、数多くの調査分析結果を、図表として掲載している。例えば、蔵書量の経年的増加予測調査結果、マイクロフィルム化のための費用概算、資料を倉庫に依託・保管した場合の費用概算、所蔵誌と市販マイクロ化雑誌の調査、雑誌大型化傾向の調査結果等々であるが、中でも注目されるのは、新医学情報センター(将来構築さ

れるべき医学情報センターの意)の施設規模を、これに盛り込むべき各種施設機能別に積算している点である。これまで医学部内や研究・教育情報センター運営の場において、医学情報センター施設を拡充する必要があるという話は数多く出ていたが、具体的な数字が示されたことはなかった。報告書の重要な結論の一つとも考えられるので、その総括表を以下に紹介したい。

| | m ² |
|---------------------|----------------|
| (1) 閲覧室・書庫関係施設 | 4,332.0 |
| (2) 視聴覚サービス関係 | 450.0 |
| (3) サービス運用施設 | 382.0 |
| (4) カンファレンス・セミナールーム | 1,480.0 |
| (5) 管理部門施設 | 735.0 |
| (6) 付帯施設 | 240.0 |
| 合 計 | 7,619.0 |

7,619 m²のスペースは、北里講堂、第一会議室を含めた現在の規模(2,892 m²)の約2.6倍にあたる。

これだけの規模を誇る医学図書館は、わが国では現存しない。しかしながら、報告書の目指している、いわゆる新医学情報センターは、単に従来の医学文献を所蔵しているだけの施設ではなく、学術情報資源を一元的に取り扱う施設、いわばマルチ・メディア・センターともいうべき組織体と言えよう。報告書の中でも、論文翻訳サービス室、学内学位論文・主要研究業績保存書庫、医学部史料書庫・展示室、医学史史料展示室、マイクロフィルム保存庫、CD光ディスク作成室、同閲覧室、パソコン・ワープロ室、視聴覚教室、同カンファレンス・セミナールーム等々、現在の医学情報センターにはない機能をも取り込むべきであるとしている。更に、報告書では検討課題とされている、「慶應医学」、Keio Journal of Medicineの編集室機能等が新しい施設に加えられることも想定される。このような多面的機能を持った組織体を維持・運営していくとすれば、上述した規模は決して大きすぎることはないと思われる。

以上の通り、報告書は、これまで何も明確にさ

れていなかった、医学情報センターの将来像というものを、初めてその施設面での輪郭を示すという、大きな成果を収めている。また、医学情報センターの現状を克明に分析したことにより、改めて施設の狭隘さを内外に訴える結果となった。

このことは、内外の関係者に少なからぬインパクトを与えたに違いない。報告書発表直後の平成元年12月に、医学部跡室委員会は、厚生女子学院寮第一実習室跡室を、医学情報センター書庫として利用することを許可した。医学情報センターでは、平成2年3月末までに、同室に集密型書架(約5万冊収容可)を設置し、4月から保存書庫として活用している。このことにより、医学情報センターは、蔵書配架上最悪の事態を回避することができたわけで、正に旱天に慈雨の効果があった。また、最近では、医学情報センターの増・新築計画について、非公式ながら関係者の間で話題にのぼるようになってきたことも事実である。こうした状況や空気を醸成する上で、この報告書の果たした役割は絶大なものであったと思われる。

III. 医学情報センターの将来

当然のことながら、医学情報センターとしては、このような形で報告書を発表しただけで事足りりとしているわけにはいかない。報告書は、主として施設面から医学情報センターの将来あるべき姿を模索したものであるが、今後は、実際に将来展開すべきサービスの態様をより明確にし、報告書で述べられている内容とのすり合わせを行う必要がある。そのためには、報告書では意識的に除外している、「慶應医学」、Keio Journal of Medicine編集室との関係や(財)国際医学情報センターとの関係等も改めて議論されなければならない。また、報告書をベースにして、既述したIAIMS化への挑戦等も真剣に議論していく必要がある。

医学情報センターでは、本年6月に、医学情報固有の問題を職員相互で学習するために、医学情報センター研究会を発足させた。また、本年度中

には、サービス問題検討会(仮称)を、医学部関係部署とも相談の上で発足させたいと考えている。更に、医学教育支援体制確立の第一歩として、これまで受身の立場だけで、なおかつ対象者も極く限られていた、医学情報センターのオリエンテーション活動を、根本的に改めようという意図のもとに、現在対象者別に、きめ細かく実施内容や方法の検討を進めている。来春からの実施を目標にしているが、医学情報センターとしての成案ができ上がった段階で、関係部署に具体的な提案をしていきたいと考えている。このような研究会・検討会あるいは具体的な検討作業を通じて、報告書に盛り込まれた内容の詳細な検討や IAIMS 化に必要な基盤条件等の整備を進めていかなければならないであろう。

現在研究・教育情報センターでは、情報センターの収書・発注、受入、雑誌、目録、閲覧・検索等の各業務を機械化し、湘南藤沢を含む全センターをコンピュータ・ネットワークで結ぶトータルシステムを開発している。従って、極く近い将来には、医学情報センターにも、オンラインで蔵書を検索できる環境が整うことになる。そしてこのことは、医局、研究室または自宅からでも、端末

機を通じて医学情報センターの蔵書にアクセスするための技術的基盤が確立することを意味している。このような状況が設定されれば、報告書が提案している内容の一部は解決されるものと思われるが、こうした機械化環境の整備を更に確実に進めていくためには、施設の拡充が極めて重要である。例えば、端末機を設置しようにも、そのためのスペースがない、近くにコンセントがない、電気容量が不足している、といった状況では、円滑に機械化システムを導入することもおぼつかないのではないだろうか。従って、結局のところ報告書が重点的に述べているように、施設を抜本的に改善しない限り、医学情報センターの将来像を正確に描き出すことはできないものと思われる。

最後に、報告書の緒言から引用する。“医学情報センターの現状は、先ずハードウェアの面で窮迫の一語に尽き、建物改築の必要性は衆目の一致するところである。医学部の当面する財政的制約を重々理解した上で、今後の医学情報センターが、その役割を果たしていくために、医学情報センターが新しい生命を得る日の一日も早からんことを願うものである。”

研究・教育情報センター刊行物の案内

「資料にみる日本の食文化と食養史展」展示目録 平成2年1月 71p.

(一枚刷) 上 関西編 (文献シリーズNo. 19) 白石克編著 三田情報センター 平成2年1月 図版45枚 解説14p. B4判

慶應義塾図書館所蔵江戸時代の寺社境内絵図

慶應義塾図書館所蔵江戸時代の寺社境内絵図 (一枚刷) 下 東海・関東その他 (文献シリーズNo. 20) 白石克編著 三田情報センター 平成3年1月刊行予定 図版45枚 解説12p.

本年一月発行の上巻「関西」に引きつづき、下巻の東海・関東・東北・中部・中国地方等の寺院・神社の絵図集を刊行します。今回の下巻には鎌倉・江の島・金沢八景・松島・天ノ橋立・巖島など名所絵図も多数収録します。

徒然に想う事

山本 慧

現在地球の環境汚染が世界レベルで、重要な検討課題となっている。宇宙には約1000億の銀河系が存在し、それぞれの銀河に約1000億の星が存在するといわれているが、その中で地球のように水が在り生物が存在する星はいくつあるのであろうか。昔から水は命の源といわれるが、地球に液体の水が存在するためには地球と太陽の距離が1億3000万～1億6000万kmの範囲になくてはならないという。ちなみに太陽と地球の距離は約1億5000万kmと運よく丁度良い位置に存在していることになる。また地球の大きさがもう少し大きければ大気の温室効果により、また小さければ大気が薄くなり、いずれも人間が住める環境では無くなってしまう。この様に生命にとって欠くことの出来ない水が地球上に存在するという事自体いかに微妙なバランスの上に成り立っているかがわかる。

現在地球上に存在する生物の大部分はヒトを含め酸素を必要とする生物である。地球は今から46億年前に誕生したと考えられている。そのころの地球の大気は二酸化炭素や窒素が大部分を占め、酸素は殆ど存在しなかった。35億年前に光合成能を有するラン藻類が海中に出現し、これが大量の酸素を放出するようになった。放出された酸素は最初は海水中に溶け込んでいったが、20億年前からは大気中にも放出される様になり、大気中にも酸素が溜まり始めた。そして大気上層の酸素が太陽からの紫外線と反応してオゾン層が形成され、それが太陽からの有害な紫外線をさえぎるようになり、その結果、地上にも生物が生存できるようになったと考えられている(約4億年前)。

一方、酸素と並んで我々の生存と密接な関係があるのが二酸化炭素である。二酸化炭素は現在大気中に約0.03%しか存在していないが、僅かな二酸化炭素の増加が、そのもたらす温室効果により地球の気温を上げることが現在問題となっている。地球が

誕生したころにはなんと現在の20万倍近い量が大気中に存在していたという。この二酸化炭素を現在のレベルまで下げてくれたのもやはり生物であった。それは現在海洋汚染により激減しつつあるサンゴや層孔虫で、これらの生物は二酸化炭素を石灰質の殻へ同化することにより海水中ひいては大気中の二酸化炭素を石灰岩の形にかえていってくれたのである。この様に地球創生以来、現在に至るまでの地球の歴史の90%は地上に生物が住む為の環境作りで費やされたともいえる。しかもその環境作りをしてくれたのはいずれも生命体であったという事実に深い感銘を受けると同時に、我々人類は全ての生物に感謝の気持ちを持つことを忘れてはならないとつくづく感じる次第である。

地球46億年の歴史の中で我々の直接の祖先であるホモ・サピエンスの歴史は僅か25万年でしかない。地球誕生より現在までを一年に換算するとヒトが登場するのは大晦日の午後11時半頃という計算になる。人類が地球の環境を破壊し始めたのは火を使うようになってからといわれているが、実際には産業革命以降すなわち科学が急速に発達したこの200年位である。その間に二酸化炭素の上昇による温暖化、窒素酸化物の増加、オゾン層の破壊、酸性雨、熱帯雨林の破壊、海洋汚染等々、急速な環境変化をもたらしている。地球誕生以来種々の生命によって営々と築きあげられて来た素晴らしい地球環境を我々現代人は僅か1秒たらずの内(地球の歴史を1年とした場合)に破壊せんとしていることになる。地球史上、我々は大変なカタストロフィーの時代に生きているといえよう。

私は現在発癌の研究をしているが、癌も所詮その多くは人間が作り出した病気なのではないかと考えることがある。ヒトのがんの多くは化学発癌によると考えられている。その場合良く知られている発癌物質の多くは直接もしくは間接的に人為的過程を経て作り出されたものが多い。産業革命以後の急速な科学の発達人類に豊かな生活をもたらしたが、それと同時に予測のつかない事態ももたらした。いつの間にか人類は地球や自然に対し分不相応な行動をとっていたといえるのかも知れない。人類にとって分相応とはいったい何なのだろうか?

(医学部薬理学教室助教)

展示会から①

「資料にみる日本の食文化と 食養史」展にあたって

山下光雄

(三田情報センター特殊資料担当課長)

I. はじめに

平成2年1月29日～2月3日まで、丸善(東京・日本橋)において「資料にみる日本の食文化と食養史」展が開催された。この発端は昭和62年の3月、花見の会において清水龍瑩研究・教育情報センター所長の「最近若者の食事は困ったものですね。」という一言からである。先生はさらに続けられ、「慶應は古い大学であり、医学部には食養研究所という独創的な施設もある。このような関係から食事を時代の変遷から興味あるかたちでまとめて展示はできないかね。」というお話であった。半年後、沢川本部事務室長、そして小沢副所長から正式に展示会の準備をするよう指示があった。このような経験は初めてのことから、三田情報センター特殊資料担当の田中・白石と相談し、医学部と食養研究所の部分は「病気と食事」ということから専門性を必要とし、又それだけで展示会ができるので、今回は、疾病予防、健康増進という立場から「食べ物」を捉えようということになった。またこの展示を指導していただく方として塾名誉教授太田次男氏、斯道文庫助教授大沼晴暉氏をお願いすることで作業が開始された。

II. 展示資料の設定と概説

福沢諭吉先生は生涯多方面にわたる活躍をされているが、常に時代を先取りし、遠い将来を見透していることが多い。そこで、これを「疾病予防、健康増進における食という立場から見るとど

うなるか。」という観点が示された。それは福沢先生の「獸身を作り、然る後に人心を」という言葉を裏付けるものでもあるはずである。こう考えると慶應3年(1867)刊行の「西洋衣食住」があり、明治6年(1873)には三田にイギリス医学を中心とした慶應義塾医学所(校長松山棟庵)が開設され、明治9年(1876)慶應義塾出版社より毎月10回発刊された雑誌『家庭叢談』の誌上には「養生の事」、「養生法、飲食の説」をはじめとする食養に関連する記事が数多く発表されている。

その後『家庭叢談』は休刊となるが、明治13年(1883)『交詢雑誌』(毎月5、15、25日発行)が創刊され、このなかにも最新の食養関連記事などが多数報告されている。雑誌は問答形式により地方会員への啓蒙活動を計るために大いに利用されている。

このことは、先進国である欧米人などに比して日本人の体力が著しく低下している現状をみた福沢先生が、この改善を医学や食養学に求め、なかでも運動や食事など日常生活の中で必要とするものは、家庭内の常識となるよう考えた結果からのことと考える。また大正6年(1917)の慶應義塾の医学科の創設、医学科のメンバーが中心となって大正10年(1921)創刊の雑誌『衛生』、また昭和4年(1929)には雑誌『食養』が創刊されている。また医学部食養研究所に於ける成果を実践するため、昭和8年(1933)食養部が新設され、食事療法実践の場として今日までその役割を担っている。

そこで、これらを骨子に検討が行われ、「資料にみる日本の食文化と食養史」展となった。

III. 展示資料について

展示の中心となる部分を、「食養研究史の資料」とし、さらに「食養と栄養」、「慶應義塾と食養研究」、「森鷗外と日本食見直し論」に区分し、その展示目的が何であるかが明確となるよう努力した。

1. 食養と栄養

義塾が所蔵する古文書の一つに日本医学中興の

祖といわれる安土桃山時代の医師、^{マナキドノサン}曲直瀬道三の文書がある。当時は食事も含めて「クスリ」と考えていた時代であり、道三の著述には食行動のあり方により肥満や病気が生じるとし、食べ過ぎや塩味に注意することを挙げている。また食事についても「食物和歌本草」にみられるように和歌に食物の効能を詠んで理解させる方法がとられている。明治の西洋医学の導入はこれを、食品中に含まれる栄養成分の多寡で論じ、現代に至っている。しかし、食物の判断をただ単に数値のみで評価してよいのだろうか、そこになにか「+α」があるべきであろうという問いかけをしてみた。

2. 慶應義塾と食養研究

慶應義塾は明治6年(1873)医学所を開設し、同9年に『家庭叢談』を創刊する。『家庭叢談』は「いろいろな出版はあるが、家族が一緒に話題とするものが少ない」と、「健全な話題提供」を目指し、スポーツや食事の重要性やタバコの有害性などを理解しやすく説明している。また、福沢文集にある「婦人肥満の説」もすでにエネルギーの摂り過ぎを戒め、運動が必要と述べている。『家庭叢談』はやがて『交詢雑誌』(明治13年創刊)に受け継がれたようなかたちで「理解しやすい文字での啓蒙活動」として地方会員も含めて大きく展開される。

やがて、このことは森鷗外の日記にも「Populäre Vorträge (通俗講話)ヲ専門トシ福沢ノ政学ニ於ケル如ク日本ニテ働カバ其利大ナラン」とあるように、鷗外のその後の活動に大きな影響を与えることになる。

ここでは、食事のあり方をどのようにしたら、より理解しやすく、実践することができるかについて、時代の流れの中から新しいあり方についての問いかけをしてみた。

3. 森鷗外と日本食見直し論

森鷗外は三田の美学との関係は深いが、一方で明治期の「日本食のあり方」に多くの研究報告を残している。とくに、明治政府の富国強兵政策のなかにあつて、軍医たちを悩ました「脚気」の予防対策としての食事のあり方では、和食から洋食へと食事を変換することで患者数が減少すること

を確認し、海軍はすでに洋食採用を決定していた。このような社会環境のなかで、食物の歴史的背景と最先端の医学知識を基礎に「日本食の見直し論」を展開し、「洋食論」に疑問をなげかける。すなわち、①人間の栄養を考えると、栄養成分のみで論じて良いのか? ②日本人でも体力のある人もおり、これは日本食が悪いのではなく、食事を工夫することである ③洋食採用は大半を輸入食糧にたよることになる。国民の多くがこのような食生活をするのは、島国の日本ではたしてよいのか? など、現代にも通用する所見を述べ、洋食偏向へ警鐘を鳴らしている。このような鷗外の考え方は現在の食生活にかかわっている人々に対し、いろいろな角度から、そのあり方の是非を問いかけるものであり、新しい方向を示すものとして注目したいものである。

IV. 料理関係の資料

義塾は昭和54年、料理研究家田村魚菜氏より魚菜文庫(旧称石泰文庫)として1,600余点の料理関係の記録、書籍などの寄贈を受けた。この資料は、代々宮中の「御厨子所預」であつた高橋家が明治東京遷都により天皇家が東京に移られたのを機に、その職を幕府の町方料理方頭取の石井治兵衛に譲られた際、同時に移管された資料(一部大正大震災や戦災で焼失)と、石井家伝承資料である。今回はこれを「御厨子所預高橋家襲蔵料理式書」、「江戸幕府の料理」、「江戸時代の料理書」の三部門に分類した。

1. 御厨子所預高橋家襲蔵料理式書

このなかには『世俗立要集』(巻154)『厨事類記』いずれも鎌倉後期写本など、これまで『群書類従』などでしかみることのできなかった鎌倉時代の料理書など20余点が含まれ、一堂に展示されたことは、日本でもはじめてのことではないかと思われる。

2. 江戸幕府の料理

鎖国された江戸時代にあつて、隣国の朝鮮国とだけは国交を保ち続けていた。多くは將軍職就任の賀使である。一行(300~500人)の使節は対馬から船で大坂へ、そして陸路を約3~4週かけて

江戸に向うが、その往復の道中において諸大名から大変な饗応を受け、同時に休息あるいは宿泊先で盛んに文化交流が行われた。今年のノテウ韓国大統領の来日で話題となった「朝鮮通信使」がこれである。義塾にはこれらの通信使記録のうち、日記や饗応の記録を多く所蔵し、食文化の面から注目されている。またそれ以外にも將軍家日光御参詣など、江戸時代を通じ外国と国内から食文化をながめられるように工夫してみた。

3. 江戸時代の料理書

慶應義塾図書館所蔵本より、様々な興味をそそる資料を選んで展示した。我国で最も古い料理書といわれる『料理物語』を例にとれば、慶長版があるといわれながら、従来は寛永20年版しか知られていなかった。本館所蔵本には江戸前期写本（寛永13年跋）を始め、寛永20年刊本、正保4年刊本、寛文4年松会刊本があり、それらを展示して『料理物語』の変遷をビジュアルに示すことができた。

V. おわりに

食物は展示物でみられるように生命を維持して行くうえで欠くことのできないものであり、角度

をどう変えてみるかによって、あるときは「クスリ」以上に大切なものとなる。その一方で、「日常茶飯時」といわれるように非常に軽じられる傾向にある。しかし、食事を個人の嗜好のみを重視すると、やがていろいろな病気の発症を促すことにもなる。このようなことから、21年前の1969年、当時のニクソンアメリカ大統領は議会に送ったメッセージで「人間は正しい食物の選択について、まず教育を受けねばならない。われわれはみな、正しい食事が健康の基本的な決定要素であることを思い起こさねばならない。」と警告した。まさにこの言葉が現代の日本が必要とするものであり、このことはすでに福沢先生などによって100余年も前から啓蒙活動として力説されていたことであった。

となると現代のわれわれは、多少の科学の進歩はあるものの、こと食べるということの考え方や行動については、あまり変化のないことであり、食物の行動は実に保守的なものであると考える。

また今回の展示を通じて、各分野の人々が、食物についての姿勢を再度考え直す機会にできれば幸いである。

第9回慶應義塾図書館講演会

「ソビエト連邦に於ける社会科学情報サービスの現状」

平成2年10月19日 於 三田図書館・新館A-V
ホール

講師 ウラジミル A. ウィノグラドフ氏（ソビエト科学アカデミー社会科学情報研究所長）

展示会から②

広重東海道五十三次錦絵を読む

白石 克

(三田情報センター
特殊資料担当課長代理)

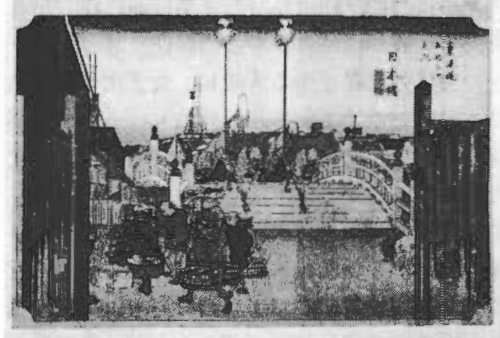
平成2年4月9日(月)から14日(土)まで6日間、日本橋丸善4Fギャラリーにて、慶應義塾湘南藤沢キャンパス開設(平成2年4月)を記念した、展覧会『広重・東海道錦絵 日本橋より藤沢・箱根まで』を開催した。期間中の入場者は延3,293人と、盛況のうちに同展は終了した。

展示作品は高橋誠一郎氏の蒐集作品を中心に日本橋より箱根宿まで、歌川広重の東海道錦絵全72点である。広重は天保3～4年(1832～33)頃刊行された“保永堂版東海道シリーズ”が売れに売れ、一躍人気絵師となり、安政5年(1858)62歳で没するまで、生涯二十数種類の東海道五十三次の錦絵を描き続けていった。今回はその内、本塾に所蔵する、保永堂版・行書・隷書・狂歌・美人・人物・豎絵・蔦屋中判の8種類の東海道シリーズより選び展示した。

開催期間中、錦絵に描かれた当時の風俗や景観について、もう少し解説がほしいとの要望が多く、何回も説明をすることになってしまった。そこで本誌では、各宿より絵を1枚選び、当時の旅の一コマを鑑賞ではなく、読解していきたい。論題の“東海道錦絵を読む”とはこういうことである。文中に記した様々な料金は主旨保永堂版が刊行された天保年間のものにした。公定料金が主であるので、実際はもう少し高いものであるかもしれない。

1. 日本橋 朝之景 保永堂版

(天保3～4年頃刊)



『お江戸日本橋セツ立ち』と歌われるように、昔の旅立ちの時刻は通常、セツといわれている。今の時刻に直してみると、単純計算では朝4時頃となる。しかし昔の時刻の基準は日の出を“明六ツ(朝6時)”, 日の入りを“暮六ツ(夕6時)”としていたので、1日を等間隔で刻む今の時間帯とは異なり、昼夜の時刻編成が一定ではなかった。今では夏の4時は日が昇り始める時刻であるが、セツは明六ツより2時間前であるので、いつでもまっ暗な時間に旅立っていたはずである。

この絵は朝之景であるので、もちろん六ツ(6時)過ぎということになる。日本橋より西(京都方面)に向かう大名行列が、暗いうちに屋敷を出発して、今まさに日本橋から道中双六の第一歩を踏み出そうとしているところである。日本橋の向こう側(現在の三越寄り)には魚河岸(現在は築地に移転)があったので、画面前方には魚屋さんたちが天秤棒をかつぎ、江戸市中へ売りに行く様子が描かれている。日本橋北側(向こう側)は朝早くから鱻背な魚屋さんたちの掛声で、にぎやかなところであった。ところが橋のこちら側は少し様子が違う。画面左方に高札が見えるように、市中の法度(法令)、公報板、東海道の里程等がいくつも掲げられていた。一方、右側の犬の尾が描かれる右方には、罪人がさらされていた。縄つきのまま多くの人々の目の前に置き、赤恥をかかせ、庶民のみせしめにするのが当時の掟であった。処刑直前の重罪人・心中未遂の男女・女犯の

破戒僧たちが毎日牢から連れ出され、ここにさらされ、まわりから罵声を浴びせられていたのである。今から想えば、毎日々々役人に見張らせ、手問ひまかかるとををしていたものである。広重の家は東海道から数十メートル東に入った京橋北方の大鋸町にあったので、常に東海道の様子を見聞していたことと思われる。彼が東海堂と名乗っていたのは、東海道錦絵の第一人者という自負心だけでもなさそうだ。

2. 品川 鮫洲朝之景 行書東海道 (天保後期刊)



朝日のさわやかな海岸沿いの茶店には、早朝出発した旅人がすでに休んでいる。自動車免許でおなじみの鮫洲の海には、今では想像もできないほど美しい藍色の水面が広がっている。戦後の埋立て以前には、浅瀬が数キロメートルもあったので、実際にはこんなきれいな海ではないかも知れない。茶店の右には海草採りの女が竹籠を肩にかけ、拾い集めている。名物の品川海苔を、これから天日で干して作るのだらう。茶店の看板には「あなご御茶漬 酒肴品々」とあるように、当時は穴子もこの辺りの名物であった。小腹の減った旅人が、さらさらと茶漬を流し込んで一息入っていたのであろう。提灯には紋らしきものが書かれているが、もちろん茶店の屋号ではない。「江吉」「江壽」は、この絵の出版者「江崎屋吉兵衛」の広告で、現在同様コマーシャルに余念がない。まるで房総や三浦半島の海岸線を見ているような、のんびりとした眺めである。品川は日本橋から8

kmほどであるので、当時でも江戸のうちと変わらないほどの近場であった。それでも江戸の町の南境界線はJR田町駅から、札の辻・地藏通り・三ノ橋・麻布にかけて引かれていたので、その南側の品川周辺は江戸町奉行支配下ではない。現在の都下或いは郡部といったところであろう。ようするに桜吹雪の北町奉行遠山金四郎のお膝元ではないわけだ。本塾の三田キャンパスは当時の江戸南境界線ぎりぎり、辛うじて入っていた。東海道もこの辺りでは旅人だけでなく、諸用に出向く庶民や川崎大師参詣の行楽客も随分いたことと思われる。品川の宿場は今の品川駅ではなく、京浜急行の北品川と新馬場付近である。江戸から最も近い町（公式には宿場）でもあるので、吉原に対抗するほどの享楽の地となり、天保年間には飯盛女郎が1,300人もいたといわれている。

3. 川崎 六郷渡舟 保永堂版 (天保3～4年頃刊)



多摩川の六郷の渡しの光景である。現在の東海道線よりやや下流の第一京浜国道鉄橋付近である。手前が東京側で、対岸が川崎側である。明治初期に外国人が撮影した写真が数枚現存しているが、まさにこの舟である。風景錦絵は現在の写生画とは違い、特徴あるものを大きく、大げさに描くものが多いが、この絵は実写に近いものである。渡し舟にはたばこを吸う旅人、笠をかぶりうつむく男、荷をなおす男、船頭の右には男女三人が話し込んでいる。舟で知りあったばかりの三人であるかもしれない。たばこの女は髪に手ぬぐい

を巻いているが、これは塵埃^{ちりほこりよ}除けである。舗装道路のない土埃の立つ街道を歩く婦人にとって、髪つけ油で結い上げた日本髪は塵や埃がつきやすく、困ったことであろう。この女は身なりからみて、旅人ではなさそうだ。遠方に旅する婦人は着物が汚れないように、浴衣を上に着ていた。向う岸には俵をいっばいに積んだ馬が、舟を待っている。これから、馬と一緒に旅人は東京側（六郷）に渡る。その背後には三度笠をかぶり道中合羽を着た二人の男がいる。道中合羽は南蛮人の着ていたマントからヒントを得て作ったものといわれている。後には小屋がみえる。ここが舟役所である。この役所は川崎側だけにあり、ここで乗降客は舟賃を払っていた。現在の多くの有料道路と同様、一方にだけ検問所があるわけだ。丁度、今支払っている男がいる。幕末には13文程度であった。1文が現在の15円ほどなので、200円程度であろうか。都バスより少し高いぐらいと思えばよい。渡し舟を降りると、ほっと一息つきたくなる。この渡し場の向うには茶屋が並んでいた。この名物に奈良漬があった。

4. 神奈川 台之景 保永堂版（再刻図）
（天保刊）



神奈川宿西はずれの崖淵に立ち並ぶ茶屋町の光景である。現在の横浜駅北方の台地である。横浜駅は画面中央部、すなわち海中にあるわけだ。明治の地形図をみると、入江の様子がわかる。手前より芳屋・たるや・玉川・さくらやと実在した茶屋が描かれている。左側に並んだ茶屋から女たちが

でてきて、激しい客引争いが展開されている。客引女から逃れようとする旅人の必死な様相がうかがわれる。彼女たちは、後から坂を登る貧しい巡礼母子や笈^{あし}を背負った六十六部（回国行脚）には目もくれない。彼らは引っぱり込まれる心配もなく、ゆっくりと歩みを進めている。道中筋には、巡礼・寺社のお札売り・六十六部・ひしゃくを持った伊勢の抜けまいりなど、喜捨をせがむ人々が随分いた。坂の上方には、これから茶屋町に入る旅人二人の姿がみえる。人待ち顔の女が立っているので、じきに二人とも彼女の強引な呼び込みに悩まされるだろう。神奈川の入江には、風に帆をはらませた舟が何隻も浮かんでいる。中央上方の二段になった岬は本牧岬である。当時は奇岩で知られた名勝地であった。現在では名庭の三溪園がある。この絵の描かれた25年後（安政5）に、本牧岬手前の横浜村が外国船の開港地となり、明治には大都市になることなど、広重には想いもよらなかっただろう。神奈川の宿場町はこの台地下方手前にある。JR東海道線の海側、すなわち京浜急行の横浜の一つ手前の“仲木戸駅”周辺である。

5. 保土ヶ谷 境木立場 狂歌入東海道
（天保後期刊）



茶屋が立ち並ぶ立場^{たてば}が描かれている。立場とは人足・駕籠・馬が休むために、宿場と宿場の間にできた休憩地である。この立場は保土ヶ谷と戸塚間（7.5 km）にできたもので、保土ヶ谷を出発して約4 km、急峻で長い権太坂を登りきったところに位置している。疲れた馬や人足だけでなく、

もちろん旅人も休息する。境木とは国境に立てられた標示棒のことで、ここが武蔵国と相模国との境である。境木がそのまま地名になった。東海道線や横須賀線で通勤する人が、毎日往復の電車を通り抜ける保土ヶ谷・東戸塚間の長いトンネルの上が現在地である。立場では馬には水や麦が用意され、旅人には名物が売られていた。この名物は牡丹餅である。

この絵をみると、左側の茶屋に4人の客がみえる。汝茶をすすり牡丹餅を食べ、坂道でくたびれた足を休めている。駕籠かき人足が休憩に出たあと、駕籠から一步も踏み出さない客には、茶屋の女たちが愛想よく茶菓を運んでいる様子もみえる。もちろん只ではない。この立場を過ぎると今度は信濃坂の下り道でもあるので、東海道の上り下りの客でここは賑わっていたようだ。この茶屋の女たちが婿を売る商売にならないように、幕府は常に目をひかせていた。どの茶屋も土間で開放された建物になっているのはそのためである。もちろん仕切られた個室は禁止である。営業時間もまた、明六ツより暮六ツまでで、夜間営業は禁止されていた。宿場からは幕府に上納金が入るが、立場で宿泊されたのでは収入(税収)にならないことも理由の一つであった。

6. 戸塚 鎌倉東海道(弘化刊)

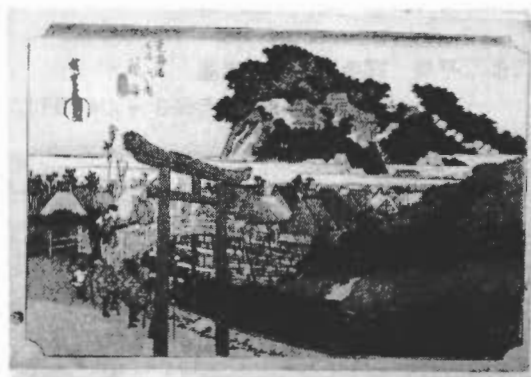


戸塚宿の西方に大坂がある。この絵はこの坂上を描いたものであろう。大山・丹沢山の向うには右方が画面よりはみだし切れてしまった富士山がそびえている。現在でもこの台地上には旧東海道

の松並木が残り、そのわきを自動車がビュンビュンと通り過ぎていた。武家の従者であろうか、荷をかついだ旅人が下方にいる。その上には六十六部(神奈川にてふれた)、馬に乗った旅人が坂を登る。この馬の乗り方を乗掛のりかけという。馬の背の上に二つの明荷(つづら)(重量は18貫—67.5kg—以内)を置き、その上にふとんを敷いて客がすわるという乗り方である。この荷の積み方は安定が悪く、かなり難しいものであったようだ。馬の使い方にはいくつかあり、馬に36貫(135kg)以内の荷物だけを乗せる本馬ほんま、人と手荷物(5貫以内)を乗せる軽尻かろひり、馬の背の中央と左右に1人づつ、合せて3人乗せる三宝荒神がある。天保15年(1844)の戸塚から藤沢までの料金は本馬133文、軽尻87文である。各々現在の2,000円前後、1,300円前後であろう。絵にみえる乗掛は本馬と同様の料金であるので、荷物と人と一緒に使えるという安価な乗り方であったようだ。5貫以内の荷をかつぐ人足は本馬の半分の料金で66文(約1,000円)である。現金収入の少ない江戸時代でも物価の上昇には悩み、幕府は度々公定価格を決め、値上りを押えていた。この絵より130年前の正徳元年(1711)の本馬の料金は86文(約1,200円)である。

7. 藤沢 遊行寺 保永堂版

(天保3~4年頃刊)



藤沢宿は時宗総本山遊行寺じしゅう じゆぎやうらの門前町で、しかも江の島や大山への別れ道という交通の要所でもあったので、非常に賑わった宿場町であった。この

絵をみてもその様子を想像できる。

右上の小高い丘に建てられた寺院が遊行寺（正式には無量光院清淨光寺、或いは藤沢道場）である。手前の大きな鳥居は江の島の弁才天の一の鳥居である。島まではここから約5 km ある。宿場町は中央の遊行寺橋から、画面にはみえない左方へ続く。むしろ橋の左方が中心街である。鳥居の左には座頭が4人、江の島へと向ってくる。將軍綱吉を療治した名鍼医杉山和一（検校）は江の島に参詣、断食して、管針の術を開眼したといわれている。関東総検校の杉山和一の故地を慕う彼らの参詣の旅である。遊行寺橋の中央に、木刀をかついだ男たちがいるが、これは大山（石尊権現）参りの道中である。毎年7月、江戸隅田川で水ごりを取り、体を清めた男たちは木刀を奉獻するため、大山に向った。大山で新たに木刀をもらった男たちは今度は精進落としをするため、藤沢宿に泊ったので、夏の宿場は大変な賑いであった。ふだんの飯盛女郎の揚代は500文（約7,500円）であったのが、この時期には700文（約10,500円）まで上がったといわれている。普通の旅籠は一般に200文（約3,000円）前後といわれている。一見、二食付きでこの料金は安いとも思われるが、汚い部屋に相部屋で押し込められ、大勢の人が入る垢だらけの風呂に入れられ、飯・汁に簡単な惣菜という食事に我慢することを考えるならば、むしろ高いものであったのかもしれない。

8. 平塚 綱手道 保永堂版

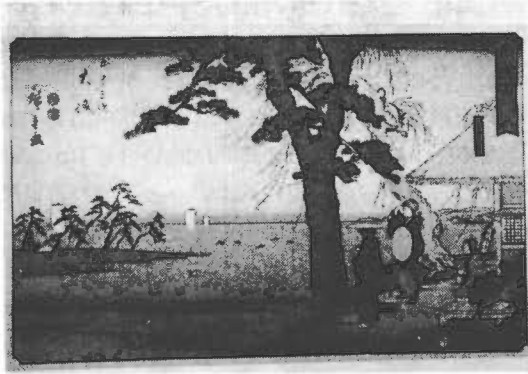
（天保3～4年頃刊）



綱手道とは田んぼの中の道のことで、東海道は平塚宿はずれより、西に向って伸びている。向かいにそびえる丸い山は高麗山である。当時は“コマヤマ”と呼んでいたようだ。この山の左下方に次の大磯宿がある。平塚・大磯間はわずか2.9kmと近すぎるため、両宿ともに客引合戦が盛んに行なわれていた。平塚側では夕方になると、「あの高麗山を越えないと大磯には行きません。」と高麗山を利用して、旅人を引き留めていたようだ。大磯でも似たようなことをしていたのだろう。右方には雪ののった富士山の頂きが少しみえる。その右の尖った山は藤沢宿にてふれた大山である。松並木を過ぎ、遠方に小さく描かれる太鼓橋は両宿の境にある花水川にかかる花水橋である。画面の手前に道標と立札がみえるが、平塚宿の西はずれにある棒端であろう。とすれば、すぐ右には宿場の家々が立ち並んでいるはずである。棒端とは宿場の出入口に上記のような標示杭が立てられていたので、そう呼ばれていた。左側の棒杭は宿場間の道しるべで、右は御定書などの立札であろうか。左方から威勢のよい飛脚が平塚方面に駆けぬけてくる。東海道の錦絵は京都へ西上する姿を順次描いているので、この逆行する飛脚の姿はのんびりとした田舎の景色に、ピリッとした刺激を与えている。右側には対照的にゆっくりした足取りの空駕籠を背負った駕籠屋2人が、大磯方面に向っている。平塚まで客のをせていった帰り駕籠であろう。東海道には松並木が続いている。幕府がたえず並木の維持につとめ、根回りの管理や枝落としをさせていたため、江戸時代を通じ東海道には松並木が常に整備されていたのである。現在、旧東海道の松並木が弱っているとよく耳にするが、自動車の排気ガス等公害による被害だけとはいきれない。空気のきれいな当時でさえ、充分な手入れをしていたからこそ、こうした松並木の存続ができたのである。

9. 大磯 鳴立沢西行庵 鎌書東海道(弘化刊)

大磯宿はこの西行庵（鳴立庵）と曾我十郎の愛人大磯の遊女虎御前の話で知られている。東海道の錦絵もこの両者を題材にしたものが多い。西行



庵は西行上人の“心なき身にもあはれはしられけり、鳴立沢の秋の夕ぐれ”の旧跡にちなんで、元禄8年(1695)、俳人大淀三千風が再興した。街道に近いせいもあり、当時の風流人たちが沢山立ち寄っていたといわれている。この絵はまさに西行の詠う夕暮の景色を描いたものである。今、宗匠風のかっこうをした男が婦人2人に、物知り顔で鳴立沢の風情を説明している。三人づれというわけでもなさそうだ。右側の婦人は笠をはずしているの、髪を手ぬぐいで覆っているのがわかる。整髪した島田がくずれないように、巻いているのである。男のまげも同様であるが、道中いつでもきれいな髪形を保つには苦勞したようだ。右側の婦人は笠の陰になってわかりづらいが、左側の婦人の腰がかなり、ふくらんでいるのがわかる。道中ではふところに、物をしまうことが多いので、帯だけではゆるんだり、形がくずれやすくなる。道中着の上にもう一度、腰紐でしめているためである。更に着物のすそがまとわりつかないように、前をたくし上げ、歩きやすく着つけている。足は足袋に草鞋ばきである。足袋は江戸中期元禄頃より、紐むすびから小鉤に変わったといわれている。この足袋は小鉤がけである。保永堂版は雨の景色で「虎が雨」の小題がつけられている。虎が雨とは5月28日に降る雨のことで、前述の虎御前が曾我三郎と別れた時の涙が雨になったといわれている。大磯宿には彼女が石になったという虎ヶ石もある。

10. 小田原 酒匂川 保永堂版 (天保3~4年頃刊)



東海道は酒匂川を渡ると、小田原宿に入る。川の向こうには小田原城と城下の街並みがみえる。背後の尖った山には箱根山であろう。小田原は大久保家11万3千石の城下町であり、大きな町であった。当時の名物に、いかの塩辛・小梅漬・糟漬梅・うゐろう(菜)・ちょうちん・鏝のたたきがあった。新鮮な魚や曾我梅林の梅など、現在でも名物のものが多い。

この画面は酒匂川の歩行渡しの光景である。この川は冬場は水量が少ないので、仮橋がかけられていたが、旧暦3月5日から10月5日までは夏川といい、歩行渡しであった。水深の基準線を1尺8寸(約54cm)として、増水して4尺4寸(約132cm)になると川止めとなり、旅人は川の東西の宿(大磯と小田原)に泊まらざるをえなかった。4尺(120cm)に減少して、やっと渡ることができた。画面では、人足に肩車をした旅人・蓮台に乗る武士・駕籠をのせた蓮台が川を渡っている。蓮台は大きく分けると3種類がある。4人がかつぐ梯子形の簡略なもの(小田原側に着岸寸前)・手すりのついたもの(左側)・駕籠がすっぽり収まるもの(川の中央)である。川を渡る時には先ず、川役所で渡し賃を払い切符をもらう。人足1人分は天保13年(1842)頃には46文(約700円)であったので、肩車の料金はこれだけである。梯子形の蓮台は人足4人であるので、人足賃2,800円プラス蓮台分(人足2人分)1,400円で全部で4,200円かかった。同様に計算していくと、

手すりのある蓮台は前に手張り（波除け）人足がいるので、人足7人分プラス蓮台分4人分で、料金は合わせて7,700円である。中央の大名をのせたいらしい駕籠を取めた蓮台は、手張り人足を合わせ、少なくとも17~8人はいるので、かなりの高額である。

11. 箱根 夜中松明登り 絵巻東海道

(弘化刊)



箱根湯本から、右に巢雲川をみながら、一路芦の湖岸の関所をめざして、ひたすら山道を登る光景である。画面左方に「夜中松明登」と記されるように、前後に松明たいまつをもつ人足をつけた駕籠を先頭に旅人たちが登っていく。広重の他の東海道シリーズにもよくある図柄であるので、毎日みられ

た光景なのだろう。昔は夜間の旅は禁止されていたので、もちろん今いう夜の旅ではない。日本橋でふれたように、明六ツ（朝6時）が夜明けになる時刻編成であるので、七ツ（4時）に出発するとなると、夜明けまで2時間は暗い道を歩かなければならなかった。現代風にいうと早朝の箱根路であろう。箱根の駕籠は山駕籠といい、通常の宿駕籠にくらべ、頑丈な造りで、竹で編み底を円形にこしらえていた。箱根の関所は明六ツ（朝6時）より暮六ツ（夕6時）までしか開いておらず、夜間は閉門である。うしろめたい脛に疵持つ旅人が関所を抜けようとしても、夜間の箱根山中には、追いはぎやたかりが待ち受けていた。昼間の敷重な関所に代って、皮肉にも夜は彼らが肩代りして、取締りをしていたようにもみえる。一般の旅人が関所を通るためには、現在の身分証明書にも似た身元保証人の大家や菩提寺が作る往来切手と、町奉行や代官等が作る関所手形を用意しなければならなかった。入り鉄砲と出女の取調べがやかましかったといわれている。婦人の調べは人見女が敷重に調べていたが、この関所では鉄砲の調べはほとんどなかったようである。鉄砲は遠州新居で行なっていたため、関ヶ原の合戦から200年もたった広重の時代には、その必要性も薄れていたであろう。

資料 I

研究・教育情報センターに関する書誌 1989.8~1990.7

〔研究・教育情報センター〕

“座談会 パーソナル・ヒストリー” 三田評論

No. 907, p. 4-15 (1989.10)

“資料にみる日本の食文化と食養史 (もよおし)”

臨床栄養 Vol. 75, No. 7 (1989.12)

“資料にみる日本の食文化と食養史” 栄養日本

Vol. 33, No. 1 (1990.1)

“資料にみる日本の食文化と食養史展 (今月の日

本の料理界)” 専門料理 Vol. 25, No. 1

(1990.1)

“資料にみる日本の食文化と食養史展” 月刊日

本料理 (1990.1)

“『資料にみる日本の食文化と食養史』展” 食べ

もの文化 No. 141 (1990.1)

“日本の食文化資料展 (ミニ情報)” 読売新聞

1990.1.21 朝刊 p. 14

“資料にみる日本の食文化と食養史展 (もよお

し)” 毎日新聞 1990.1.25 夕刊

“日本の食, 資料展 (文化往来)” 日本経済新聞

1990.1.27 朝刊 p. 36

“丸善のギャラリーで「日本の食文化・食養史」

を知る (HOTLINE)” 食生活 Vol. 84,

No. 2 (1990.2)

“編集手帳” 読売新聞 1990.3.15 朝刊 p. 1

“比較がおもしろい広重の東海道8種 (点描)”

朝日新聞 1990.4.10 夕刊 p. 9

〔三 田〕

“建築懐古録——慶應義塾図書館” 読売新聞

1989.10.27 朝刊 (都民版)

“キャンパス・グラフ大学はリッチです! ——図

書館がリッチです” 高2 V 進学コース Vol.

35, No. 12, p. 12 (1990.2)

上田修一 “図書館資料の破壊と劣化” 三田評論

No. 916, p. 88-91 (1990.7)

〔医 学〕

“落穂——北里記念医学図書館に望む” 慶應義

塾医学部新聞 No. 458, p. 1 (1989.8.20)

資料 II

スタッフによる論文発表・研究発表 1989.8~1990.7

〔論文発表〕

〔三 田〕

東田全義ほか 大学図書館の利用者教育 日本図

書館協会 256 p. (1989)

東田全義 “書評, 日本の農学関係書誌の書誌”

大学図書館研究 No. 35, p. 79-80 (1990.1)

- 東田全義 “『日本の農学関係書誌の書誌』(図書館員の本棚)” **図書館雑誌** Vol. 84, No. 1, p. 48 (1990. 1)
- 東田全義 “利用者サービスの課題” **公立大学協会図書館協議会研修会報告書** 1989 p. 21-36 (1990. 2)
- 東田全義 “三田情報センターの二十年(TEMPUS FUGIT)” **塾** Vol. 28, No. 2, p. 16 (1990. 4)
- 樋口恵子 “北米の学術図書館を中心とした情報システムの現状” **私立大学図書館協会会報** No. 93, p. 100-119 (1989. 12)
- 広田とし子 “社会に向けての情報サービス” **研修報告書——平成元年度係主任級 慶應義塾人事部編** p. 34-37 (1990)
- 市古健次 “三百五日間のアメリカ人——シカゴ大学における研修を終えて” **塾監局紀要** No. 16, p. 141-145 (1989. 8)
- 市古健次 “アンリ・コルディエ編『中国書誌』” **塾** Vol. 27, No. 6 表紙 p. [3] (1989. 12)
- 市古健次 “ウインディ・シティ、シカゴ” **国民生活** Vol. 20, No. 2, p. 44-45 (1990. 2)
- 市古健次 “学際的なセルフビブリオグラフィック・インストラクションの構築” **Library and Information Science** No. 27, p. 131-142 (1989)
- 石黒敦子 “研究・教育情報センター(研究所等紹介)” **慶應義塾大学報** No. 209, p. 2 (1989. 12)
- 石黒敦子ほか “海外機関とのILLの手引き” **私立大学図書館協会東地区部会研究部相互協力研究分科会報告** No. 3, p. 1-70 (1990. 3)
- 石黒敦子 “『海外機関とのILLの手引き』(資料紹介)” **大学図書館協力ニュース** Vol. 11, No. 1, p. 10 (1990. 5)
- 石黒敦子 “海外機関とのILLについて” **私立大学図書館協会会報** No. 94, p. 92-93 (1990. 6)
- 石原智子 “サービス面から見た情報公開制度の問題点” **Library and Information Science** No. 27, p. 143-158 (1989)
- 伊藤恭子 “CD-ROM検索について——利用する立場から” **大学図書館研究** No. 36, p. 21-27 (1990. 7)
- 長沢祐子 “人的サービスにおける問題関心の推移——レファレンス関係文献の分析を通して” **Library and Information Science** No. 27, p. 87-113 (1989)
- 小川治之ほか **大学図書館貸出データの計量的分析** 上智大学図書館 (1989)
- 渋川雅俊ほか “大学図書館サービスの基本” **日本私立大学連盟業務別研修—図書館関係—基礎課程テキスト** 日本私立大学連盟 200 p. (1989. 9)
- 渋川雅俊ほか “大学図書館における図書選択理論の問題” **現代の図書選択理論** 日本図書館学会研究会編 日外アソシエーツ p. 60-82 (1989. 9) (論集図書館学研究の歩み第9集)
- 渋川雅俊(古賀節子ほか) “図書資料の評価と選択” **改訂図書館資料論** (第2章) p. 48-87 (1990. 1) (図書館学シリーズ2)
- 渋川雅俊 “21世紀の大学図書館——学術情報基地への転換” **私立大学図書館協会東地区部会研究報告書平成元年度** p. 112-129 (1990. 3)
- 田中正之 “『明治期刊行物集成第一期』刊行の流れに乗って” **図書新聞** No. 2006, p. 7 (1990. 5. 26)
- 山本令子 “我が国における米文学の個人書誌の作成と評価——F. S. フィッツジェラルドの個人書誌作成を中心に” **書誌索引展望** Vol. 13, No. 3, p. 1-12 (1989. 8)
- [三田・日吉]
- 小川治之・斎藤憲一郎・吉川智江 “How much of cited conference materials can be found using bibliographic tools?” **Journal of the American Society for Information Science** Vol. 40, No. 5 (Sept. 1989)
- [日吉]
- 加藤好郎 “図書館に慣れることが勉学の第一歩” **慶應義塾大学報** No. 212, p. 2-3 (1990. 4)
- 加藤好郎 “カリフォルニア大学パークレー校の現

状と将来” 私立大学図書館協会会報 No. 94, p. 47-52 (1990. 6)

加藤好郎 “階層システム理論を導入した図書館の業務測定とその経営論” 図書館雑誌 Vol. 84, No. 7, p. 433-436 (1990. 7)

小沢ゆかり “氷室冴子『多恵子ガール』(読者のすすめる22冊)” 本の雑誌 Vol. 14, No. 7, p. 38 (1989. 7)

[理工学]

渥美恒二 “謡曲への誘い(私のリフレッシュ)” 塾監局紀要 No. 16, p. 188 (1989. 8)

清野早苗 “世界を見てしまった男たち(私の薦める一冊の本)” 塾監局紀要 No. 16, p. 181, (1989. 8)

和田幸一 “レコードのある生活(私のリフレッシュ)” 塾監局紀要 No. 16, p. 191 (1989. 8)

和田幸一 “大学図書館閲覧管理システムの機械化—慶應義塾大学を例にして” 私立大学図書館協会東地区部会研究部パブリック・サービス研究分科会論文集 (1990. 4)

[医学]

天野善雄 “洋書の差別価格について(オン・ザ・スポット)” 医学図書館 Vol. 37, No. 2, p. 110 (1990. 6)

市古みどり・南野典子 “Q & A 外国の統計資料について” 医学図書館 Vol. 36, No. 3, p. 200-201 (1989. 9)

佐久間公子 “西ドイツに於ける図書館政策と医学中央図書館” 第16回医学図書館員セミナー論文集 p. 8-15 (1989. 11)

山口佳世子 “看護学図書館ネットワーク化について” 第24回医学図書館員研究集会論文集 p. 13-17 (1990. 3)

[湘南藤沢]

松本和子ほか 大学図書館の利用者教育 日本図書館協会 256 p. (1989)

長島敏樹 “義塾における人材の確保と育成” 研修報告書—平成元年度係主任級 慶應義塾

人事部編 p. 38-40 (1990)

[研究発表]

[三田]

東田全義 “国際文化と書誌” 私立短期大学図書館協議会平成元年度全国研修会 1989. 11. 16 於全水道会館

東田全義 “パチョーリ『スママ』の形態と書誌記述” 私立大学図書館協会東地区部会 1990 年度第一回研究部会 1990. 6. 20 於成城大学

樋口恵子 “北米の学術図書館を中心とした情報システムの現状” 平成元年度私立大学図書館協会第50回総大会 1989. 8. 2 於近畿大学

小川治之 “大学図書館の相互協力” 平成2年度大学図書館員長期研修 1990. 7. 23 於慶應義塾大学

渋谷雅俊 “図書館機能の充実にむけて—学術情報基地への転換” 平成元年度私立大学図書館協会第50回総大会 1989. 8. 2 於近畿大学

渋谷雅俊 “大学図書館—そのしくみと働き” 日本私立大学連盟業務別研修(図書館)基礎課程講義 1989. 9. 4 於慶應義塾大学

渋谷雅俊 “大学図書館員を目指して” 日本私立大学連盟業務別研修(図書館)基礎課程講義 1989. 9. 6 於慶應義塾大学

渋谷雅俊 “大学図書館フューチャービジョニング” 私立大学図書館協会東地区部会研修会 1989. 11. 31 於創価大学

安田博 “ローカル・レベルでのコンピュータ・ネットワーク—私立大学図書館協会機械化委員会学術情報ネットワーク問題検討作業委員会の報告を中心として” 第10回大学図書館研究集会 1989. 11. 13 於早稲田大学大隈講堂

[理工学]

渡部満彦 “大学図書館における書庫管理の諸問題” 三田図書館・情報学会月例会 1990. 1. 20 於慶應義塾図書館新館

〔医学〕

五藤良子 “コアジャーナルについて——医学、
経済学分野を対象として” 私立大学図書館
協会東地区部会研究部逐次刊行物研究分科会
夏期合宿 1989. 8. 22 於コープビレッジ神
泉

村上篤太郎 “図書館員への道” 鶴見大学文学部
司書課程 1990. 7. 7 於鶴見大学図書館

酒井明夫 “UCLA の医学図書館とレファレン
ス活動” 第19回生物医学図書館員研究会
1990. 3. 24 於東京大学医学図書館

『福澤諭吉全集』未収新資料発見こぼれ話

先頃『全集』に記載されていない福沢先生書翰六通のほか、義塾の最も古いと思われる卒業証書など貴重な資料が見つかった。発見の経緯は以下の通りである。

商学部教授玉置紀夫君（金融史専攻）は、かつて英国の銀行史研究のため英国に留学して当地の文献を渉猟中、ロンドンで発行されているバンカーズ・マガジンに中井芳楠の活躍が大きく取り上げられている記事に出合った。

中井芳楠は和歌山の出身、明治5年から8年まで慶應義塾に学んだ。各地で教鞭をとった後、実業界に転じ、明治13年に横浜正金銀行に入り、23年からロンドン支店に副支配人として赴き、後に支店長となった。在任中、日清戦没後の清国からの賠償金の受領や日本への送金、外債発行に大きな功績をあげ、当時民間人としては極めて稀な叙勲を受けている。35年に一時帰国したが、病をえて翌年2月東京で没した。

玉置教授は、この中井芳楠の実績が英国で高く評価されているにも拘わらず、日本では殆ど忘れ去られていることを残念に思い、中井に関

する資料の発掘を続けてきたが、思うほどの資料はなかなか見つからない。遺族を辿っていけばそこに新しい資料が見つかる可能性があるが、果たして遺族を探し出せるか。玉置教授は、これを義塾図書館の情報サービス担当課長東田全義君に相談してみた。

東田君は、『慶應義塾出身者名流列傳』（実業之世界社 明治42年刊）に載っている中井芳楠の養嗣子長三郎から辿れないかと、昭和15年刊の大衆人事録にあたって、本郷区駒込千駄木五七の住所と家族構成を知りえた。次に昭和21年の東京の戦災地図にあたって、前出の住所の一面が焼け残っているので、現在の住宅地図で該当する場所を探したところ、長三郎の二男“中井楠夫”の名がそこにあった。これを最近刊の人事興信録で確認して、めでたく玉置教授に伝えることができ、新資料の発見につながった。

こう書いてしまえば極めて簡単なように思えるが、やはり長年蓄積された参考図書に関する知識と勘が働いてのことと言えよう。

（三田評論 914号 平成2年5月より抜粋）

年次統計要覧 <平成元年度>

慶應義塾大学研究・教育情報センター

I. 図書費 <平成元年度実績及2年度予算>

| 内訳 支部センター | 平成元年度実績 <単位：円> | | | 平成2年度予算 <単位：千円> | | |
|--------------|----------------|------------|---------------|-----------------|--------|-----------|
| | 図書支出 | 図書資料費 | 計 | 図書支出 | 図書資料費 | 計 |
| 三田情報センター | 630,869,957 | 6,012,584 | 636,882,541 | 637,144 | 3,763 | 640,907 |
| 図書館 | 338,851,991 | 6,012,584 | 344,864,575 | 334,363 | 3,763 | 338,126 |
| 学部* | 292,017,966 | — | 292,017,966 | 302,781 | — | 302,781 |
| (私大研究設備相当額) | (21,469,930) | — | ** | (21,685) | — | ** |
| 日吉情報センター | 148,649,887 | 3,919,270 | 152,569,157 | 150,883 | 2,250 | 153,133 |
| 図書館 | 57,519,409 | 2,174,388 | 59,693,797 | 59,418 | 2,250 | 61,668 |
| 学部* | 91,130,478 | 1,744,882 | 92,875,360 | 91,465 | — | 91,465 |
| (私大研究設備相当額) | (7,285,888) | — | ** | (7,373) | — | ** |
| 医学情報センター | 136,495,613 | 2,876,583 | 139,372,196 | 140,591 | 3,812 | 144,403 |
| // | 136,495,613 | 2,876,583 | 139,372,196 | 140,591 | 3,812 | 144,403 |
| 理工学情報センター | 154,388,508 | 1,466,439 | 155,854,947 | 129,125 | 1,507 | 130,632 |
| // | 154,388,508 | 1,466,439 | 155,854,947 | 129,125 | 1,507 | 130,632 |
| (私大研究設備相当額) | (1,300,000) | — | ** | (1,300) | — | ** |
| 合 計 | 1,070,403,965 | 14,274,876 | 1,084,678,841 | 1,057,743 | 11,332 | 1,069,075 |

注) * 特別図書費は含まず。

** () 内は合計欄に加算せず。

私大研究設備相当額は私大研究設備助成金に相当するよう義塾が臨時的に手当したもの。

平成2年度湘南藤沢メディアセンター図書支出予算は、201,149千円。

II-1 蔵書統計 <年間受入及び所蔵冊数>

| 支部センター | 内 訳 | 単 行 本 | | | 製 本 雑 誌 | | | 非 図 書 資 料 | 合 計 |
|------------------------------|-----------|-----------|-----------|-----------|----------|-----------|-----------|--------------|-------------|
| | | 和 | 洋 | 計 | 和 | 洋 | 計 | | |
| 年 間 受 入 冊 数 | 三田情報センター | 17,974 | 22,950 | 40,924 | 6,512 | 6,777 | 13,289 | 3,292 | 57,505 |
| | 図 書 館 | (9,450) | (11,565) | (21,015) | (4,070) | (2,116) | (6,186) | (1,492) | (28,647) |
| | 学 部 | (8,524) | (11,385) | (19,909) | (2,442) | (4,661) | (7,103) | (1,800) | (28,858) |
| | 日吉情報センター | 12,966 | 7,102 | 20,068 | 2,740 | 2,130 | 4,870 | 1,143 | 26,081 |
| | 図 書 館 | (10,119) | (739) | (10,858) | (1,733) | (149) | (1,882) | (811) | (13,551) |
| | 学 部 | (2,847) | (6,363) | (9,210) | (1,007) | (1,981) | (2,988) | (332) | (12,530) |
| | 医学情報センター | 1,440 | 1,334 | 2,774 | 1,940 | 4,531 | 6,471 | 427 | 9,672 |
| | 理工学情報センター | 1,833 | 2,000 | 3,833 | 694 | 6,453 | 7,147 | 89 | 11,069 |
| 合 計 | | 34,213 | 33,386 | 67,599 | 11,886 | 19,891 | 31,777 | 4,951 | 104,327 |
| 所 蔵 冊 数 (累 計) | 三田情報センター | 637,825 | 667,511 | 1,305,336 | 163,172 | 162,632 | 325,804 | 57,653 | 1,688,793 |
| | 図 書 館 | (453,250) | (387,075) | (840,325) | (99,088) | (62,602) | (161,690) | (37,512) | (1,039,527) |
| | 学 部 | (184,575) | (280,436) | (465,011) | (64,084) | (100,030) | (164,114) | (20,141) | (649,266) |
| | 日吉情報センター | 256,233 | 128,450 | 384,683 | 30,325 | 41,151 | 71,476 | 8,434 | 464,593 |
| | 図 書 館 | (187,774) | (20,159) | (207,933) | (19,090) | (1,075) | (20,165) | (3,055) | (231,153) |
| | 学 部 | (68,459) | (108,291) | (176,750) | (11,235) | (40,076) | (51,311) | (5,379) | (233,440) |
| | 医学情報センター | 32,244 | 35,316 | 67,560 | 48,058 | 98,094 | 146,152 | 2,043 | 215,755 |
| | 理工学情報センター | 47,449 | 29,041 | 76,490 | 35,311 | 102,613 | 137,924 | 575 | 214,989 |
| 合 計 | | 973,751 | 860,318 | 1,834,069 | 276,866 | 404,490 | 681,356 | 68,705 | 2,584,130 |

注1) 所蔵冊数(累計)は年間受入冊数から除籍冊数を引いた数値を前年度の累計所蔵冊数に加えたもの。
 2) 三田情報センター・学部には図書館・情報学科の製本雑誌を含む。

Ⅱ-2 蔵書統計 <逐次刊行物：タイトル数>

| 種別 支部センター | カレント | | | ノンカレント | | | カレント・ ノンカレント 合計 |
|-----------------------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|-----------------------|
| | 和 | 洋 | 計 | 和 | 洋 | 計 | |
| 三田情報センター 図書館 学部 | 5,335 | 4,031 | 9,366 | 5,175 | 2,706 | 7,881 | 17,247 |
| | (2,165) | (969) | (3,134) | (3,250) | (1,406) | (4,656) | (7,790) |
| | (3,170) | (3,062) | (6,232) | (1,925) | (1,300) | (3,225) | (9,457) |
| 日吉情報センター 図書館 学部 | 1,017 | 782 | 1,799 | 554 | 1,001 | 1,555 | 3,354 |
| | (606) | (55) | (661) | (208) | (18) | (226) | (887) |
| | (411) | (727) | (1,138) | (346) | (983) | (1,329) | (2,467) |
| 医学情報センター | 1,298 | 1,770 | 3,068 | 826 | 1,290 | 2,116 | 5,184 |
| 理工学情報センター | 1,095 | 1,514 | 2,609 | 2,842 | 4,928 | 7,770 | 10,379 |
| 合計 | 8,745 | 8,097 | 16,842 | 9,397 | 9,925 | 19,322 | 36,164 |

参考データ：非図書資料

| 支部センター | | 内訳 | 種別 | マイクロ資料 CD-ROM | A-V資料 | 合計 |
|-----------|----------|-------|-----|------------------|--------|--------|
| 年間 新規 | 三田情報センター | タイトル数 | | 46 | 34 | 80 |
| | | 個数 | | 3,214 | 78 | 3,292 |
| | 日吉情報センター | タイトル数 | | 28 | 247 | 275 |
| | | 個数 | | 685 | 458 | 1,143 |
| | 医学情報センター | タイトル数 | | 0 | 163 | 163 |
| | | 個数 | | 0 | 427 | 427 |
| 理工学情報センター | タイトル数 | | 0 | 4 | 4 | |
| | 個数 | | 66 | 23 | 89 | |
| 累計 | 三田情報センター | タイトル数 | | 866 | 7,549 | 8,415 |
| | | 個数 | | 45,620 | 12,033 | 57,653 |
| | 日吉情報センター | タイトル数 | | 327 | 2,215 | 2,542 |
| | | 個数 | | 4,069 | 4,365 | 8,434 |
| | 医学情報センター | タイトル数 | | 7 | 758 | 765 |
| | | 個数 | | 7 | 2,036 | 2,043 |
| 理工学情報センター | タイトル数 | | 18 | 23 | 41 | |
| | 個数 | | 475 | 100 | 575 | |

Ⅲ-1 利用統計 <貸出及び閲覧冊数>

| 内訳 支部センター | 館外貸出 | | | 館内閲覧 | | 前年度比 館外貸出(計) |
|--------------|--------|---------|---------|------|-----|-----------------|
| | 教職員 | 学生 | 計 | 一般図書 | 貴重書 | |
| 三田情報センター | 21,697 | 130,141 | 151,838 | * | 953 | 0.99 |
| 日吉情報センター | 5,628 | 102,405 | 108,033 | * | — | 0.97 |
| 医学情報センター | — | — | 58,849 | * | — | 0.95 |
| 理工学情報センター | — | — | 46,787 | * | — | 1.04 |
| 合計 | — | — | 365,507 | * | 953 | 0.99 |

* 開架のため実数不明。

Ⅲ-2 利用統計 <相互貸借(複写依頼を含む)>

| 内訳 支部センター | 依頼を受けた(貸) | | | 依頼した(借) | | | 合計 |
|--------------|-----------|-----|--------|---------|-----|-------|--------|
| | 国内 | 国外 | 計 | 国内 | 国外 | 計 | |
| 三田情報センター | 3,008 | 8 | 3,016 | 1,131 | 253 | 1,384 | 4,400 |
| 日吉情報センター | 303 | 0 | 303 | 228 | 120 | 348 | 651 |
| 医学情報センター | 10,279 | 136 | 10,415 | 1,966 | 62 | 2,028 | 12,443 |
| 理工学情報センター | 34,235 | 0 | 34,235 | 1,229 | 70 | 1,299 | 35,534 |
| 合計 | 47,825 | 144 | 47,969 | 4,554 | 505 | 5,059 | 53,028 |

参考データ：早慶ILL

| 内訳 支部センター | 貸 | 借 |
|--------------|-------|-----|
| 三田情報センター | 718 | 455 |
| 日吉情報センター | 37 | 64 |
| 医学情報センター | 145 | 14 |
| 理工学情報センター | 196 | 292 |
| 合計 | 1,096 | 825 |

Ⅲ-3 利用統計 <複写サービス>

| 内 訳 支部センター | 種 別 | 学 内 | | 学 外 | | 合 計 | |
|---------------|--------------------|--------|---------|---------|---------|---------------|---------------|
| | | 件 数 | 枚 数 | 件 数 | 枚 数 | 件 数 | 枚 数 |
| 三田情報センター | 電子コピー (オペレーター付) | 8,545 | 179,587 | 2,305 | 39,150 | 10,850 | 218,737 |
| | 簡易印刷 | 191 | 224,594 | — | — | 191 | 224,594 |
| | OHP・スライド作製 | 36 | 212 | — | — | 36 | 212 |
| | 電子コピー (セルフ式) | — | — | — | — | — | 1,468,041 |
| | マイクロフィルム | 4 | 399 | 35 | 20,457 | 39 | 20,856 |
| | ファクシミリ | — | — | — | — | 2,336 (送信) | 2,585 (受信) |
| 日吉情報センター | 電子コピー (オペレーター付) | 636 | 4,061 | 1 | 2 | 637 | 4,063 |
| | 電子コピー (セルフ式) | — | — | — | — | — | 244,388 |
| | マイクロフィルム | 5 | 89 | — | — | 5 | 89 |
| 医学情報センター | 電子コピー (オペレーター付) | 52,498 | 355,779 | 132,798 | 731,499 | 185,296 | 1,087,278 |
| | OHP・スライド作製 | 1,430 | 6,656 | — | — | 1,430 | 6,656 |
| | ファクシミリ | — | — | — | — | 510 (送信) | 1,721 (受信) |
| 理工学情報センター | 電子コピー (オペレーター付) | 279 | 2,264 | 32,905 | 288,481 | 33,184 | 290,745 |
| | OHP・スライド作製 | 263 | 1,300 | — | — | 263 | 1,300 |
| | 電子コピー (セルフ式) | 20,648 | 325,658 | 1,318 | 48,174 | 21,966 | 373,832 |
| | マイクロフィルム | 65 | 1,872 | 4 | 36 | 69 | 1,908 |

参考データ：電子コピー枚数

| 内 訳 支部センター | オペレーター付 | セルフ式 | 合 計 |
|---------------|-----------|-----------|-----------|
| 三田情報センター | 218,737 | 1,468,041 | 1,686,778 |
| 日吉情報センター | 4,063 | 244,388 | 248,451 |
| 医学情報センター | 1,087,278 | — | 1,087,278 |
| 理工学情報センター | 290,745 | 373,832 | 664,577 |
| 合 計 | 1,600,823 | 2,086,261 | 3,687,084 |

Ⅲ-4 利用統計 <レファレンス・サービス>

利用者別

| 内 訳 支部センター | 学 内 者 | | 学 外 者 | 合 計 |
|---------------|-------|--------|-------|--------|
| | 教 職 員 | 学 生 | | |
| 三田情報センター | 2,234 | 7,003 | 4,622 | 13,859 |
| 日吉情報センター | 2,255 | 4,774 | 235 | 7,264 |
| 医学情報センター | 2,103 | 307 | 2,422 | 4,832 |
| 理工学情報センター | 741 | 4,527 | 2,027 | 7,295 |
| 合 計 | 7,333 | 16,611 | 9,306 | 33,250 |

業務内容別

| 内 訳 支部センター | 文献所在調査 | 事 項 調 査 | 利 用 指 導 | そ の 他 | 合 計 |
|---------------|--------|---------|---------|-------|--------|
| | | | | | |
| 日吉情報センター | 2,148 | 679 | 4,431 | 6 | 7,264 |
| 医学情報センター | 2,266 | 1,712 | 853 | 1 | 4,832 |
| 理工学情報センター | 4,735 | 785 | 1,613 | 162 | 7,295 |
| 合 計 | 15,211 | 3,779 | 14,005 | 255 | 33,250 |

編集後記

未来的な図書館サービスについて普通は、電算機システムの導入によるきらびやかな一面のみが強調される。しかし、前号から引続き特集した「21世紀の図書館サービス」で、情報センター職員は、学術情報サービスにおける専門技能開発の必要性をいろいろな切り口で表現している。なかには、よく整備された情報インフラストラクチャーを味方に新たな図書館サービスの展開に自信をのぞかせるコメントもあった。大学審議会大学部会は、新しい設置基準の図書館設置に関し、専門

職としての図書館員の必要性をはじめて提案している。やはり21世紀への課題は人間の頭脳と身体によって達成できるというのが真剣に将来を考えている人々に共通する考えだろう。

その課題達成の前提となる義塾図書館システムの概要が本号に掲載されているが、これは現在開発作業の途上にあり、明年4月から実現される。そして研究と教育に対する総合的な情報支援サービス形成につながっていくはずである。

(渋川雅俊)

編集委員*情報センター本部 渋川雅俊*三田情報センター 関口素子 柴田由紀子*日吉情報センター
酒井裕美子*理工学情報センター 長谷川博子*医学情報センター 南野典子*湘南藤沢メディアセンター 松本和子